

田野町文化財調査報告書 第25集

しち

の

七野第4遺跡

西地区開発事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1997

宮崎県宮崎郡田野町教育委員会

例　　言

1. 本書は、田野町西地区開発事業環境ふれあいタウン「ざ・田野詩魅21」に伴い田野町教育委員会が実施した、七野第4遺跡の報告書である。

2. 本遺跡の調査は、下記の通り実施した。

平成7年度 発掘調査、資料整理

平成8年度 発掘調査報告書作成

3. 調査は、次の体制で実施した。

調査主体 田野町教育委員会 教育長	鍋倉 政信
社会教育課長	前田 久育
社会教育課長補佐	
兼係長 川口 博文	
同主任 森田 浩史	
発掘調査担当	金丸 武司
同主事補	

4. 出土遺物、図面等の整理にあたっては、次の方々の補助をえた。



5. 本書の執筆は金丸が担当した。

6. 現地の調査にあたっては、田野町および山之口町在住の方々の協力があった。

7. 本書に用いた方位は磁北、標高は絶対高である。また、記号については下記のとおりである。

集石遺構（S I） 土抗（S C）

8. 出土遺物は田野町教育委員会で保管している。

9. 本書に用いた土色は、農林省農林水産技術会事務局監修の「標準土色帳」による。

10. 現地調査および室内調査にあたっては、下記の方々にご指導ご協力を賜った。

橋 昌信（別府大学教授）・新東晃一（鹿児島県文化課）・東 和幸（同）・桑畑光博（都城市文化課）

写 真 目 次

P L 1	調査区遠景	55
P L 2	S I - 0 1 検出状況	55
P L 3	S I - 0 2 検出状況	55
P L 4	S I - 0 3 検出状況	55
P L 5	S I - 0 4 検出状況	55
P L 6	S C - 0 1 検出状況	56
P L 7	S C - 0 2 検出状況	56
P L 8	S C - 0 3 検出状況	56
P L 9	S C - 0 4 検出状況	56
P L 10	S C - 0 5 検出状況	56
P L 11	S C - 0 6 検出状況	56
P L 12	S C - 0 7 検出状況	57
P L 13	S C - 0 8 検出状況	57
P L 14	S C - 0 9 検出状況	57
P L 15	S C - 1 0 検出状況	57
P L 16	S C - 1 1 検出状況	57
P L 17	S C - 1 2 検出状況	57
P L 18	S C - 1 3 検出状況	58
P L 19	S C - 1 4 検出状況	58
P L 20	S C - 1 5 検出状況	58
P L 21	S C - 1 6 検出状況	58
P L 22	S C - 1 7 検出状況	58
P L 23	S C - 1 8 検出状況	58
P L 24	S C - 1 9 検出状況	59
P L 25	S C - 2 0 検出状況	59
P L 26	S C - 2 1 検出状況	59
P L 27	S C - 2 2 検出状況	59
P L 28	S C - 2 3 検出状況	59
P L 29	S C - 2 4 検出状況	59
P L 30	S C - 2 5 検出状況	60
P L 31	S C - 2 6 検出状況	60
P L 32	S C - 2 7 検出状況	60
P L 33	S C - 2 8 検出状況	60
P L 34	S C - 2 9 検出状況	60
P L 35	S C - 3 0 検出状況	60
P L 36	S C - 3 1 検出状況	61
P L 37	S C - 3 2 検出状況	61
P L 38	集石遺構検出状況	61
P L 39	土坑検出状況	61
P L 40	B区西壁土層断面	61
P L 41	S I - 3 0 出土遺物	62
P L 42	A区出土石器	62
P L 43	A区出土接合資料	63
P L 44	A区出土接合資料	63
P L 45	A区出土石器（外面）	64
P L 46	A区出土石器（内面）	64
P L 47	B区出土旧石器時代石器	65
P L 48	B区出土土器	65
P L 49	B区出土土器	66
P L 50	B区出土土器	66
P L 51	B区出土土器	67
P L 52	B区出土土器	67
P L 53	B区出土土器	68
P L 54	B区出土土器	68
P L 55	B区出土土器	69
P L 56	B区出土土器	69
P L 57	B区出土縄文時代石器	70
P L 58	表面採集旧石器時代石器	70
P L 59	表面採集土器	71
P L 60	表面採集縄文時代石器	71

第Ⅰ章 序 説

第1節 発掘調査に至る経緯

農業が中心であった田野町も、企業誘致や工業団地の整備充実等により飛躍的な発展を遂げつつある。これまで町東部を中心に開発が行なわれていたが、近年では町中心部にも及びつつある。そのなか、比較的造成の立ち遅れていた町西部を対象として大規模な工業・住宅団地の建設が計画され、七野台地南東部にあたる丘陵地を開発対象地として遺跡の照会を受けた。同町教育委員会が平成7年4月に現地を踏査した結果、造成開始以前に行なわれていた土取りの跡から遺物が確認され、これを基に遺跡の保存と工事の対応について協議を行なった結果、工事施工上やむをえず削平する箇所について記録保存の措置をとることとなり、同年4月26日より現地の作業に着手した。

第2節 歴史的環境

田野町は宮崎県の中央部東側、宮崎市より南西約20kmに位置する。田野町は南那珂山地から片井野川や松山川等の小河川が流入し形成された田野盆地を中心部にもつ。この河川の浸食作用により、田野盆地は、丸野地区・元野地区・前平地区・八重地区等の台地部と低地部をそれぞれ形成している。七野第4遺跡は、田野町中央部よりやや西よりにある丸野地区台地上の東南部、東西を開析谷によつて幅の狭まった標高約190mの台地上に立地している。同台地には丸野第2遺跡（縄文早～後期の集落跡）をはじめとして、良好な遺跡が多数密集している。七野第4遺跡の歴史的環境を知るために、町内の遺跡を時代順に概観してゆきたい。

旧石器時代

旧石器時代では、芳ヶ迫第1遺跡（前平字芳ヶ迫）でナイフ形石器、剥片尖頭器、三稜尖頭器、彫器などが出土しているほか、同第3遺跡では剥片尖頭器と石核が出土している。周辺には他に石核とナイフ形石器が出土した札ノ元遺跡（前平字札ノ元）もあり、この前平地区周辺では早くから遺跡が形成されたことが窺える。ほかには萩ヶ瀬第2遺跡（三角寺字萩ヶ瀬）や沓掛、元野地区で少量発見されている。七野周辺では長藪遺跡（七野字長藪）より石核が出土している。

縄文時代

町内の縄文時代は他地域や他時代に対して卓越した分布を見せる。草創期では砂田遺跡（八重字砂田）や井手ノ尾遺跡（塩水字井手ノ尾）、芳ヶ迫第3遺跡で爪形文土器が若干出土している程度であるが、早期になると出土量が急増し、前平地区では集石遺構が54基検出された芳ヶ迫第1遺跡（前平字芳ヶ迫）、集石遺構84基に加え竪穴住居2軒と連結土坑を検出した札ノ元遺跡、同じく竪穴住居を有する又五郎遺跡（前平字又五郎）が密集している。ほかにもほぼ完形の貝殻文円筒土器が採集された前畠第4遺跡（八重字佐野前田）、立地は大きく異なるが円筒貝殻文土器の殆どのタイプが出土した天神河内第1遺跡（字天神河内）をはじめ、長藪遺跡、権現谷第1・第2遺跡、（八重字権現谷）宮田遺跡（八重字宮田）、砂田遺跡、二ツ山第1遺跡（二ツ山字二ツ山）でも早期の土器が一定量確認されている。その内容も、南九州特有の貝殻文円筒土器、塞ノ神式、平椿式土器ばかりでなく、押型文土器も少量ながら出土し、また県内においては数少ない環状石斧が芳ヶ迫第1遺跡で出土するなど内容も多彩であり、当地において様式間の交流が土器以外にも活発に行なわれたことを示しているといえよう。

前期は元木遺跡（ニツ山字元木）で良好な曾畠式土器が多量に出土しているほか、丸野第2遺跡（七野字丸野）、長藪遺跡、天神河内第1遺跡でも前期の遺物・遺構が確認されている。

中期は東九州で遺跡数、出土量共に減少傾向にあるが、町内では天神河内第1遺跡で春日式土器、船元式土器などが多量に出土しているほか、元野遺跡でも春日式土器を中心とした遺物が多数確認されている。またニツ山第3遺跡では春日式、里木式土器、船元式土器に属する土器群に加え、それに伴う住居址が検出されるなど、数多くの遺跡が知られる。

後期の遺跡としては青木遺跡（鬼丸・野首新村字青木）で後期前葉の南九州に広く分布する指宿式土器をはじめ、綾式、下弓田式土器などが出土している。一方、黒草遺跡（黒草字黒草）や七野と同じ台地上に位置する丸野第2遺跡では前述の土器群に加え、福田K2式土器や小池原上層式土器、鐘崎式土器といった、磨消縄文系の土器群が流入しており、この時期における土器群の動態の違いを窺わせる。また元野地区では後期中葉の丸尾式土器や後期後葉と考えられる研磨の入った土器が出土している。この時期の遺跡では石斧や石鏃といった石製品以外にも、石刀などの特殊石器、配石遺構や貯蔵穴などの遺構、さらに七野第4遺跡付近の丸野第2遺跡では27軒にものぼる堅穴住居が検出されている。

このように数々の大規模な遺跡の報告事例に事欠かない縄文時代の田野町も、晩期に入るとその出土量を激減させ、黒草遺跡と芳ヶ迫第3遺跡（前平字芳ヶ迫）で土器片が僅かに確認される程度にすぎず、遺構なども未発見である。

弥生時代

弥生前期の遺跡は、県内全域で稀少であり、町内でも出土例はない。この遺跡の空白は中期まで後続する。中期はその末から後期にかけて元木遺跡で出土例があり、その時期に伴う遺構も存在する。後期では他に高野原遺跡（元野字高野原）にて花弁状住居が多数検出されている。ほかに壺や甕に瀬戸内からの影響が認められるなど、当遺跡において集落が営まれ、地域間の物質的交流が活発に行なわれていたことが明らかとなっている。また隣接した本野遺跡（元野字本野）でも同時期の遺物が確認されたほか、権現谷第1遺跡でも後期の集落跡が検出されている。なお、七野周辺では丸野第2遺跡より後期にあたる住居址が1軒報告されている。

古墳時代

この時期は県内の至る所で、在地の首長によって盛んに古墳が築造されたが、田野町は墳丘墓の調査事例は皆無である。しかし地下式横穴墓はこれまで灰ヶ野（灰ヶ野字灰ヶ野）で2基、高野原（元野字高野原）で1基発見・調査されている。灰ヶ野地下式横穴墓は、1号は平入りの隅丸方形プランを呈し、蛇行剣1、鉄斧1、鉄鏃10前後、矛身1、刀子1が副葬されているほか、人骨が1体分出土した。また、一方、2号は1号とは約10mの距離にあり、羨門石閉塞の平入り不定形プランを呈し、副葬品は鉄族8、刀子1である。一方、高野原地下式横穴墓は片井野川と井倉川に挟まれ半孤立化した台地上にあり、1号地下式横穴は羨門石閉塞の平入り長方形プランである。鹿角製刀装具付き剣1が副葬されていたが、それ以外は確認されなかった。なお、七野台地周辺の発見例は未だ報告されていない。これまでの調査により、町内の地下式横穴の年代は6世紀代のものであることが判明している。

歴史時代

歴史時代の遺物としては、平安時代と思われる布痕土器が出土した合子ヶ谷第1遺跡（合子ヶ谷）

があり、中世に下ると芳ヶ迫第2遺跡（前平字芳ヶ迫）で東播系の片口壺などが出土している。また最近では、元木遺跡より堀立柱建物が数多く検出されている。



第1図 田野町遺跡分布図

〈参考文献〉

「芳ヶ迫第1・第2・第3・札ノ元遺跡」『田野町文化財報告書』第3集

田野町教育委員会 1986

二宮忠司「九州におけるナイフ形石器」『考古学論叢』1

1973

茂山 譲・大野寅夫 「児湯郡下の旧石器」『宮崎考古』3号

宮崎考古学会 1977

「長藪遺跡」『田野町文化財報告書』第6集

田野町教育委員会 1989

「前畠第2遺跡・砂田遺跡」『田野町文化財調査報告書』第12集

田野町教育委員会 1991

「井手ノ尾遺跡」『田野町文化財調査報告書』第14集

田野町教育委員会 1992

茂山 譲「宮崎県田野町採集の貝殻条痕文土器」『宮崎考古』第4号

宮崎考古学会 1978

「天神河内第1遺跡」

宮崎県教育委員会 1991

「八重地区遺跡」『田野町文化財調査報告書』第19集

田野町教育委員会 1994

「二ツ山第1遺跡」『田野町文化財調査報告書』第13集

田野町教育委員会 1992

「丸野第2遺跡」『田野町文化財調査報告書』第11集

田野町教育委員会 1990

「元野地区遺跡」『田野町文化財調査報告書』第16集

田野町教育委員会 1993

「二ツ山第3遺跡」『田野町文化財調査報告書』第15集

田野町教育委員会 1992

鈴木重治「宮崎郡田野町青木遺跡の調査」『日本考古学協会第28会大会発表要旨』

日本考古学会 1963

「黒草遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告書』(3)

宮崎県教育委員会 1979

田中 茂「宮崎県田野町灰ヶ野地下式横穴」『研究紀要』1

宮崎県総合博物館 1972

「田野町灰ヶ野地下式古墳調査報告」『宮崎県文化財調査報告書』第17集

宮崎県教育委員会 1973

「高野原地下式1号墳発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第24集

宮崎県教育委員会 1981

「合子ヶ谷第1遺跡」『田野町文化財報告書』第8集

田野町教育委員会 1992

第Ⅱ章 遺構と遺物

第1節 調査区の設定と概要

七野第4遺跡は、田野盆地北西部にある標高約200mの台地東端、開析谷によって形成され半ば孤立した幅の狭い台地上に位置する。当遺跡と同じ台地上には縄文時代後期を主体とした丸野第2遺跡がある。

発掘調査開始時にはすでに調査区内は土取りによる削平を全面に受けている。この残存部分のうち、南東部は微高地が形成されており、下部の土層の残存は良好であると考えてこれをA区とし試掘による調査を行なった。また削平を免れた農面道路部分をB区として調査を行なった。更に調査区内に複数のトレーナーを設定したが、遺物が出土したのはこの2箇所のみである。調査面積は約1000m²である。

発掘による調査は平成7年4月24日～同年6月16日にかけて行なわれ、その結果、東側調査区からは土坑が32基にわたって検出されたほか、ナイフ形石器、細石器類といった旧石器時代の遺物も確認された。道路部分より縄文時代早期の塞ノ神式土器、前期の轟式土器、曾畠式土器、中期の大平式土器が出土し、石器では石鏃をはじめ、スクレイパー、石匙、台石などが出土した。また旧石器時代のものと考えられる石核なども確認されている。

第2節 層序

基本層序としては、以下13層が確認された。A地区に関しては、上層を削平されているため、IX層以下の確認となった。なお、堆積状況は、区により若干の食い違いがあり、一様ではない。

I層：(Hue2.5GY灰白8／1) 道路作成時に敷設されたと思われる砂質層である。圧縮により固く締まっているが、粘性は無く乾燥しており、砂利、軽石片、瓦片、現代陶器片などが多く混入している。中・近世と考えられる土器片はこの層より出土した。

II層：(Hue7.5YR黒2／1) 耕作土層である。水気は殆ど含まず柔かい。下層からの混入や現代のものと考えられる炭の断片などが多く検出された。

III層：(Hue2.5Y黄褐5／4) 軟らかく乾燥した火山灰層。ガラス質の粒子を若干含むものの、火山灰層としては良好な状態とは言い難く、アカホヤ火山灰の二次堆積層と考えられる。縄文中期の遺物が主体となるが、旧石器時代や縄文早・前期の遺物も出土している。

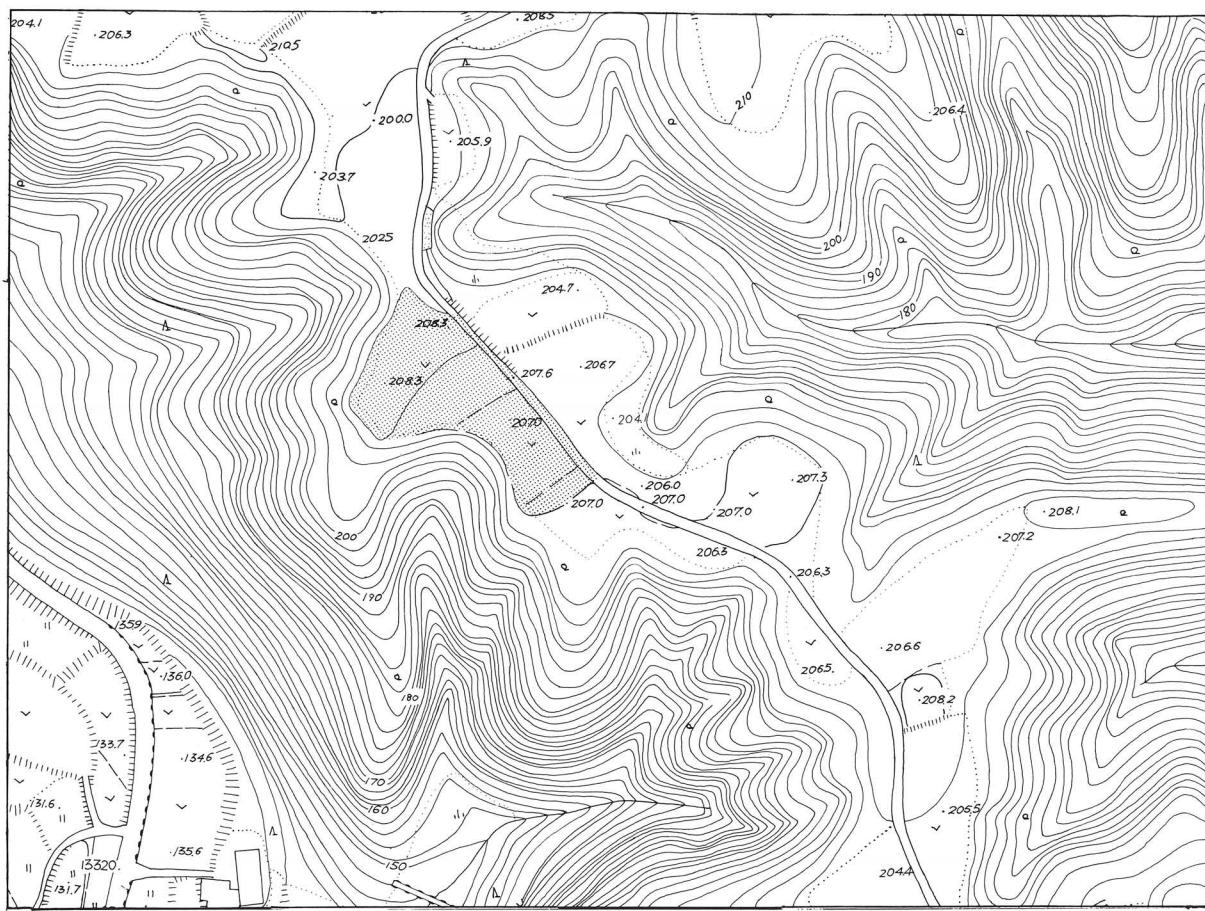
IV層：(Hue2.5Y黄8／8) アカホヤ火山灰層である。しかし、町内の他の地点に比べ、良好な堆積状況ではないため、II層と同様二次堆積層である可能性がある。遺物は縄文時代前期のものが大部分を占める。

V層：(Hue5Y灰5／1) 固く締まったシルト質層。この層の下位が縄文早期の遺物包含層にあたるが、部分的な欠落も見られる。2～5mmの白色や淡黄色の粒子を多量に含む。

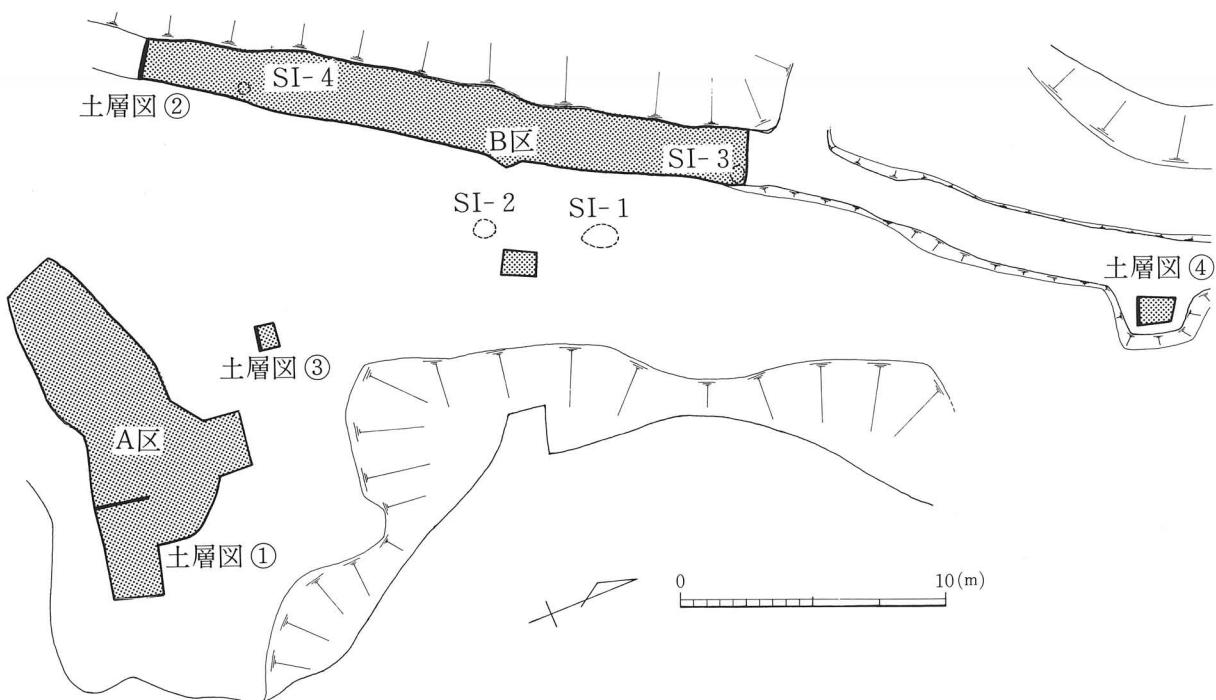
VI層：(Hue10YRにぶい黄褐5／4) V層とVII層の漸移層である。V層と同質の白色粒子を少量含み、粘性が強い。

VII層：(Hue7.5YRにぶい褐5／3) 粘質土層。上層に比べやや湿っており、粘性が強い。白色粒子を僅かに含む。

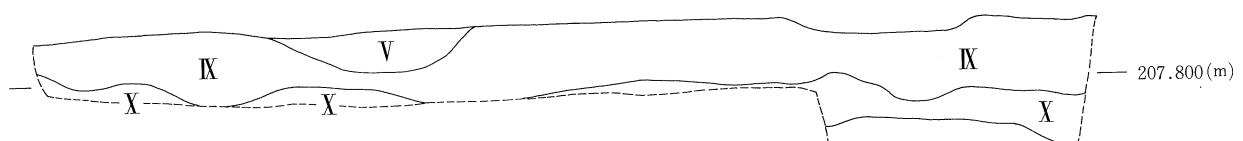
VIII層：(Hue10YRにぶい黄褐5／3) VI層とVII層の漸移層である。粘性はVI層よりも強まり、黒味がかった所が若干見受けられる。混入物は認められない。



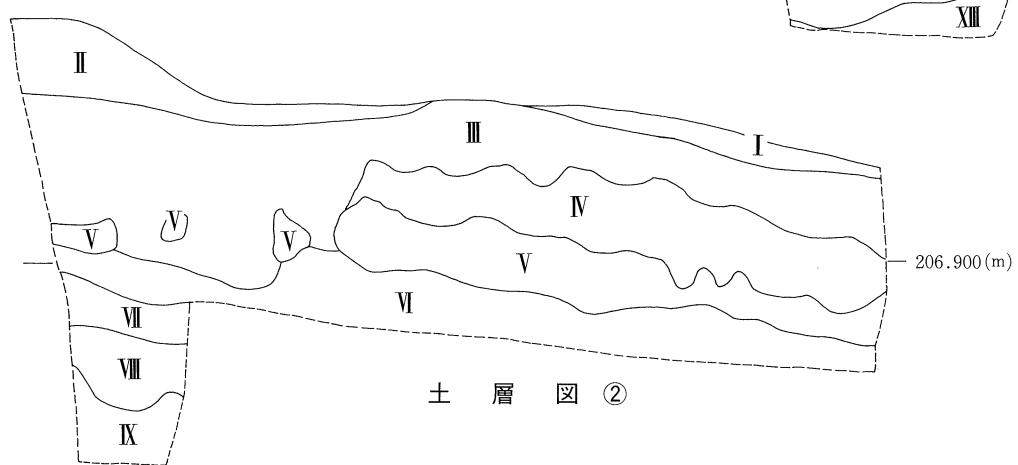
第2図 調査区周辺地形図



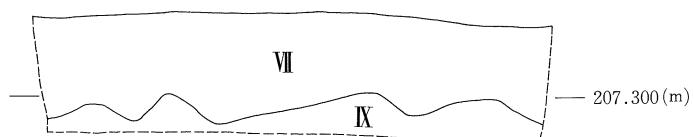
第3図 トレンチ配置図



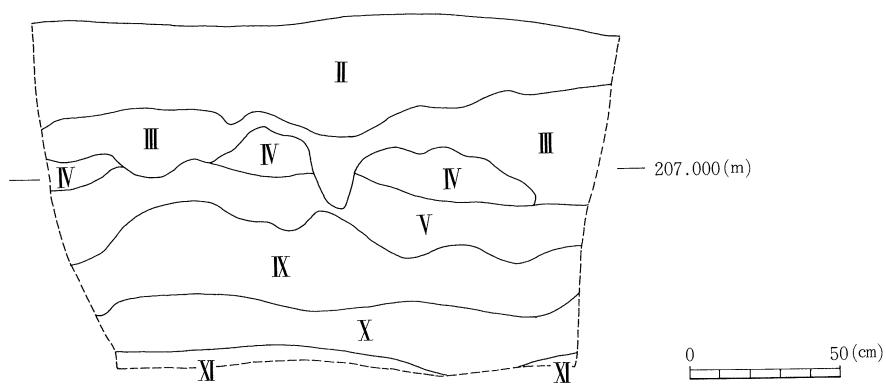
土層図①



土層図②



土層図③



土層図④

第4図 土層断面実測図

- IX層：(Hue10YRにぶい黄橙6／4)粘質土層。粘性に富み、湿っている。旧石器時代および縄文時代草創期の遺物包含層である。礫などの混入物は認められない。
- X層：(Hue7.5YRにぶい褐5／3)粘質土層。層中に流れ込みと思われる3～5cmの礫を大量に含むが、それ以外はIX層とほぼ変わらない。遺物は確認されなかった。
- XI層：礫層。5～10cm大の堆積岩系の礫を大量に含み、礫間は湿気を帯びた粘質土(Hue7.5YRにぶい褐5／3)が入り込む。
- XII層：(Hue10YRにぶい黄橙7／4)シルト質層。IX層の礫が若干混じる。粘性は殆ど認められない。
- XIII層：(Hue5Y浅黄7／3)シルト質層。砂岩系の礫が混じるほか、5mm程度の黒色の斑点も混じる。粘性は認められない。

第3節 遺構

集石遺構(第6図)

集石遺構は4基検出された。出土地点はいずれも調査区西部の微高地状の箇所に限られている。

{S I - 1}

調査区西側の微高地で検出されたものであるが、上部に削平を受けており、完全な形ではない。遺構はV層下部を径110cmで楕円形を呈し、掘り込みをもたないものでありその上部に拳大の円礫を高密度に配置する。遺構中に焼土や炭化物、遺物のたぐいは認められなかった。

{S I - 2}

S I - 1より約2m南で検出された。S I - 1と同様に上部が削平を受けている。層位はV層下部、大きさは約120cmであり、ほぼ円形を呈す。掘り込みはなく、拳大の円礫を高密度に配置する。集石中には土器など混入物は認められなかった。

{S I - 3}

B調査区より検出された。層位はV層～VI層の境界辺りである。拳大の礫が少量配置されているのみであり、遺構自体は小規模である。しかし遺構のすぐ横に落ち込みがあり、集石遺構もそれに関連したものと考えられる。遺物などは出土されなかった。

{S I - 4}

B調査区内、S I - 3より25mほど南部で検出された。集石というよりも直径25cmほどの扁平な川原石が連なったものであり、集石としてのまとまりに欠ける。掘り込みは見当らず、焼土や炭化物、遺物など集石に関連づけられる資料は認められなかった。出土層位はV層下部にあたる。

土坑(第7～10図)

32基検出された。これらは全て調査区西側、つまり道路部分の東側の微高地から南東調査区上にかけての地点である。検出面はいずれもIX層の上面であるが、この地点はこの面まで削平が行なわれており、正確な検出面ではない。土坑中にはV層が流入しているため、縄文時代早期に比定される。

{S C - 1}

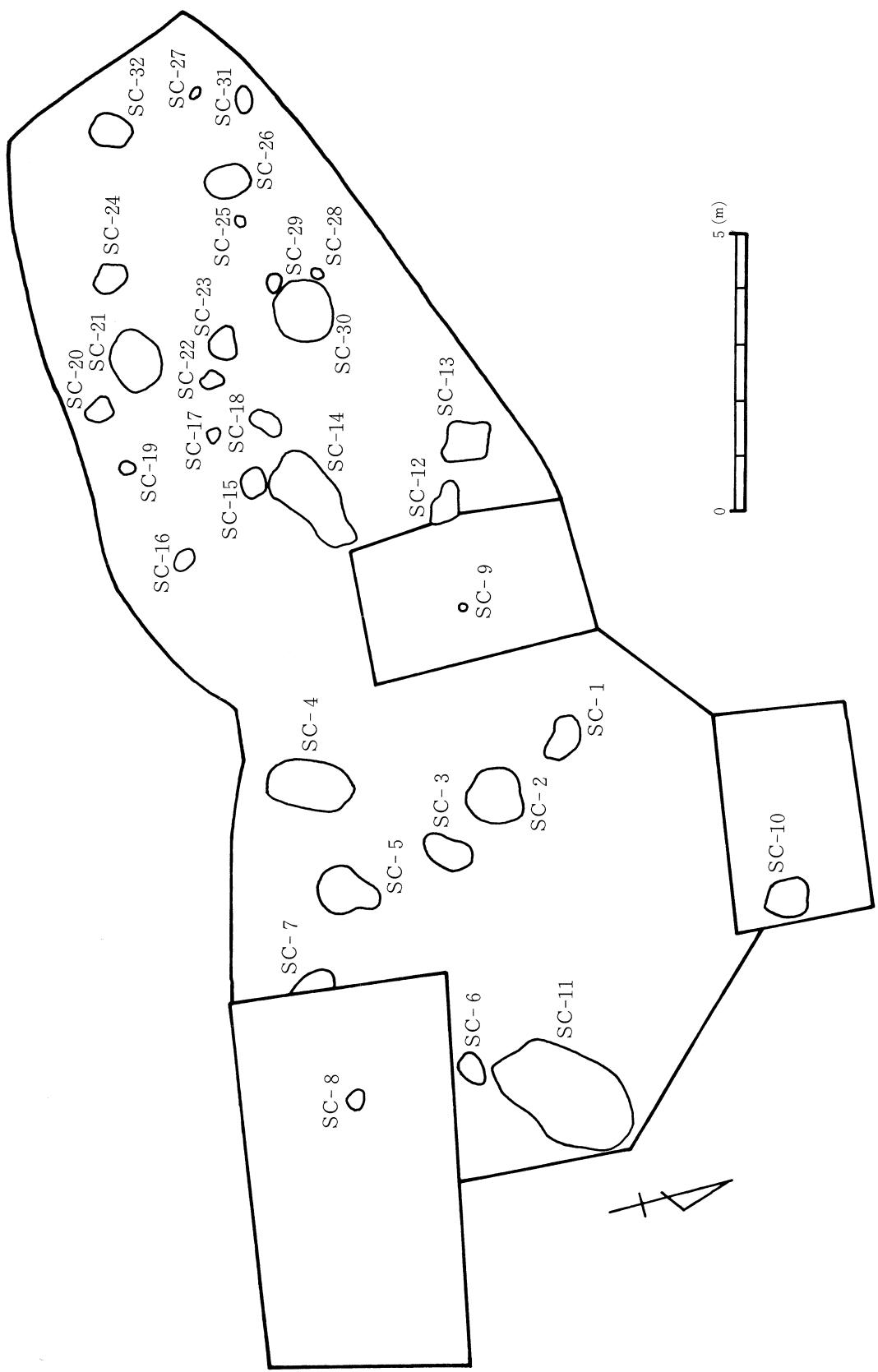
長さ1m、幅60cm、深さ15cmのやや歪な楕円形を呈する。混入物等はまったく認められなかった。

{S C - 2}

長さ1m、幅1m、深さ90cmのやや歪な円形を呈する。断面はロート状になる。混入物等はまったく認められない。

{S C - 3}

長さ1m、幅50cm、深さ20cmの楕円形を呈する。土坑西端に底面が円形となる掘込みがあり、その



第5図 遺構分布図

深さ検出面から約60cmである。混入物等は出土していない。

{ S C - 4 }

長さ1m70cm、幅1m、深さ15cmの楕円形を呈する。北側土坑縁部に円形の掘込みがあり、深さは検出面から50cm、底面は歪な楕円形に近いプランである。また土坑中央よりやや北側には直径10cmほどの落ち込みがある。深さは検出面から30cmである。

{ S C - 5 }

長さ1mの円形プランに直径60cmの円形プランが隣接した形になっている。1mの土坑は深さ30cmだが、60cmの土坑の方は10cmほどであり、半円形状を呈すテラス状に孤立している。土坑東側には円形の落ち込みがあり、深さは検出面より70cm程度、底面は直径20cmの円形を呈す。なお、混入物等はまったく認められなかった。

{ S C - 6 }

長さ60cm、幅70cmのやや歪な楕円形を呈する。深さは30~40cmほどである。混入物等はまったく認められなかった。

{ S C - 7 }

調査区の壁により寸断されているため、正確な形状は把握不能な状態にあるが、残存部は幅70cm、深さ20cmである。土坑西側は楕円形の落ち込みがあり、深さは検出面から50cmほどである。混入物の類は認められなかった。

{ S C - 8 }

直径25cmのやや歪な円形を呈す。第Ⅷ層清査時に検出された遺構であるため、深さについての記述には正確性を欠く。遺物の出土は皆無であった。

{ S C - 9 }

直径20cmの円形を呈す。S C - 8 同様清査時に検出された。遺物は出土していない。

{ S C - 10 }

直径80cmのやや歪な円形を呈する。断面は摺り鉢状に拡がる。清査時の検出である。遺物は出土していない。

{ S C - 11 }

長さ3m、幅1m60cmのやや歪な楕円形を呈する。遺構は不完全に周囲を巡る落ち込みと、中央部の凹みより構成される。中央部の凹みは底面形のまちまちな土坑が合わさったものである。なお、混入物等は認められなかった。

{ S C - 12 }

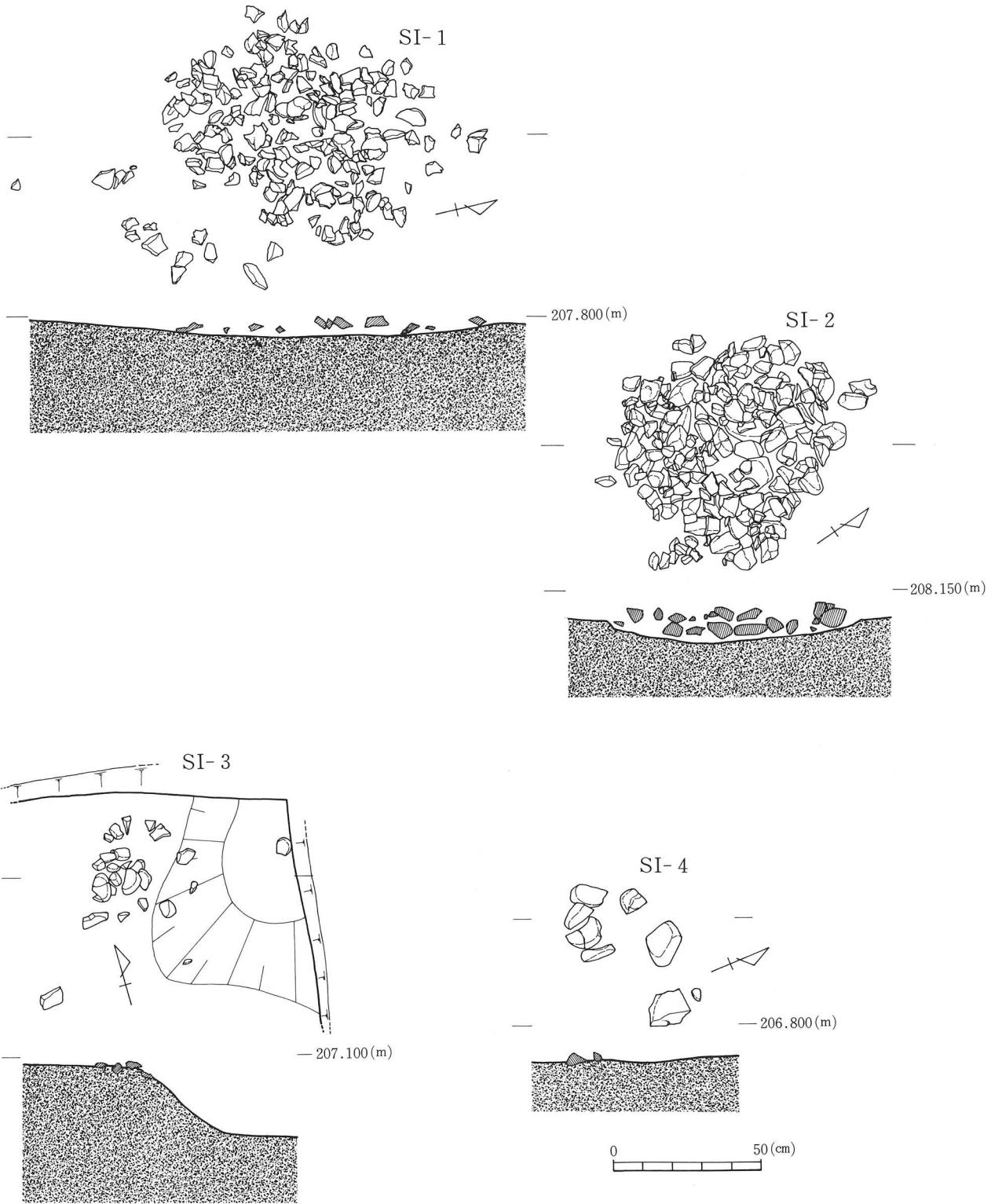
調査区の壁により寸断されているため、遺構の形状の把握は不可能である。残存部の幅は70cmである。遺構南側に円形の落ち込みがあり、深さは検出面より40cmである。

{ S C - 13 }

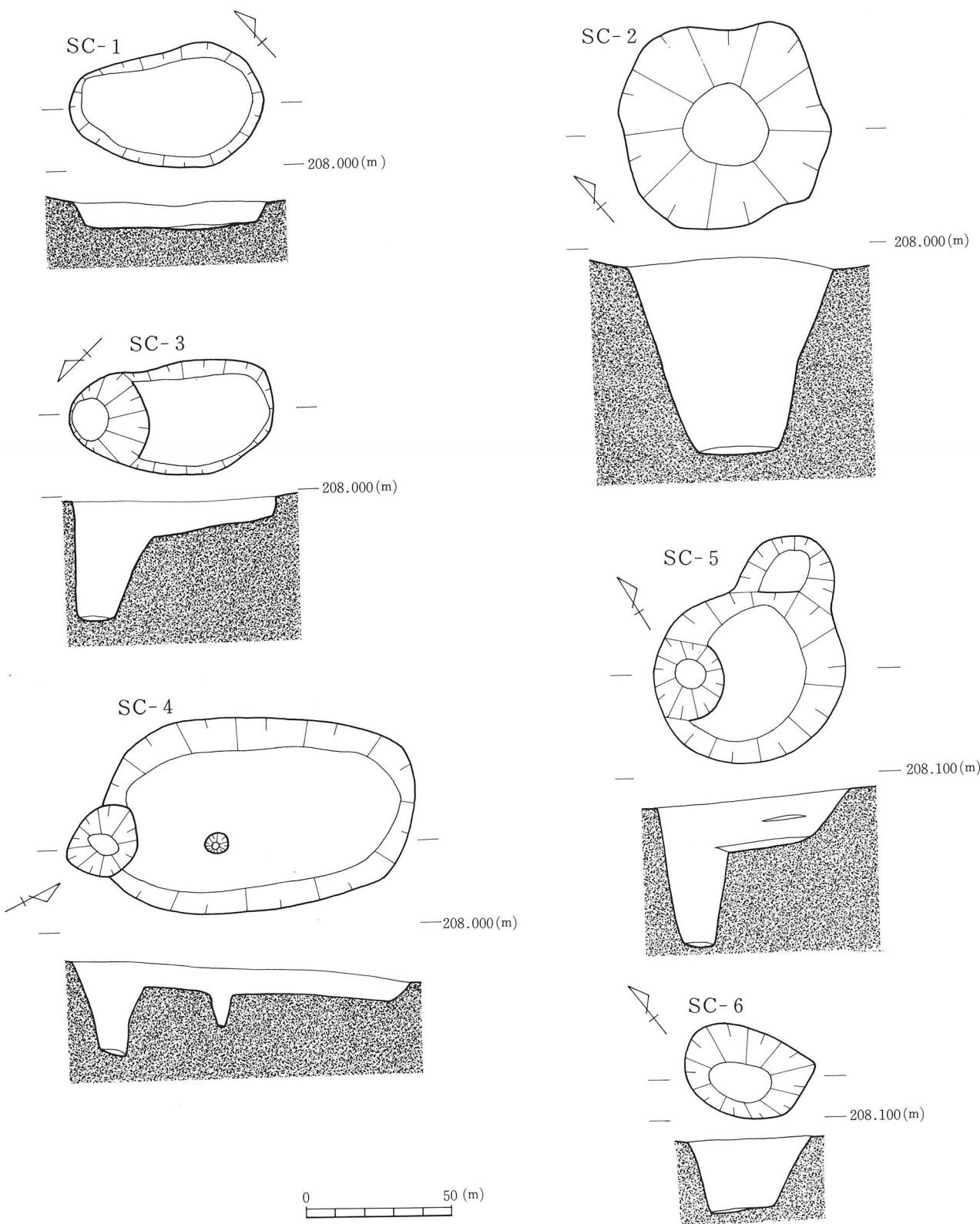
長さ90cm、幅1m30cmの、菱形に近い形状を呈している。遺構北側にて円形の落ち込みがあり、遺構検出面50cmの深さである。また、遺構やや北寄り、落ち込みの南端から直径30cmの石が検出された。使用痕の類は認められなかった。

{ S C - 14 }

長さ2m30cm、幅1m10cmの歪な楕円形を呈する。遺構全体の深さは20cm足らずであるが、土坑東側先端部には楕円形の落ち込みがあり、その落ち込みの深さは遺構検出面より35cmである。混入物などの出土は確認されなかった。



第6図 出土遺構実測図



第7図 出土遺構実測図

{ S C -15 }

長さ60cm、幅40cmのやや歪な楕円形を呈する。深さは検出面から25cmである。

{ S C -16 }

長さ40cm、幅35cmの楕円形状を呈する。深さは検出面より30cm程である。遺物は確認されなかった。

{ S C -17 }

直径30cmのやや歪な円形を呈する。深さは約30cm程である。

{ S C -18 }

長さ80cm、幅30の横長状を呈する。3基の土坑が連なった恰好になっているが、土坑断面形はまちまちであり統一性を欠く。なお、その深さは15~20cmである。

{ S C -19 }

長さ35cm、幅25cmのやや歪な楕円形を呈す。土坑断面は砲弾形を呈する。深さは20cmである。

{ S C -20 }

長さ60cm、幅55cmの楕円形を呈する。遺構の断面は摺り鉢状であるが、最深部は北側に大きく傾いている。遺物は確認されなかった。

{ S C -21 }

長さ1m、幅1mの歪な楕円形を呈する。深さは15cm前後であるが、遺構東端に直径20cmの落ち込みがあり、その深さは検出面から40cmである。また遺構西端には3基の小規模な土坑が重なっている。深さはいずれも30cmである。

{ S C -22 }

長さ50cm、幅40cmのやや歪な楕円形状を呈する。深さは10cm足らずであるが、南側縁部に底面が楕円形状を呈す落ち込みがある。深さは30cmである。なお、混入物の類は認められなかった。

{ S C -23 }

長さ80cm、幅60cmの歪な楕円形を呈する。深さは10~20cmであるが、遺構東側に更に土坑が重なっている。長さが40cm、幅20cmの楕円形を呈しており、深さ20cmで半円形のテラスを形成した後、50cmの地点まで落ち込む。

{ S C -24 }

直径50cmの歪な円形状を呈している。遺構の深さは20~15cmである。混入物の類は認められなかった。

{ S C -25 }

直径20cmのやや歪な円形状を呈す。遺構の深さは20cmに満たぬ程度であり、遺物は認められなかった。

{ S C -26 }

長さ1m、幅75cmの楕円形状を呈する。遺構中からは約10cmの堆積岩系の礫が出土しているが、使用された痕跡は窺えなかった。

{ S C -27 }

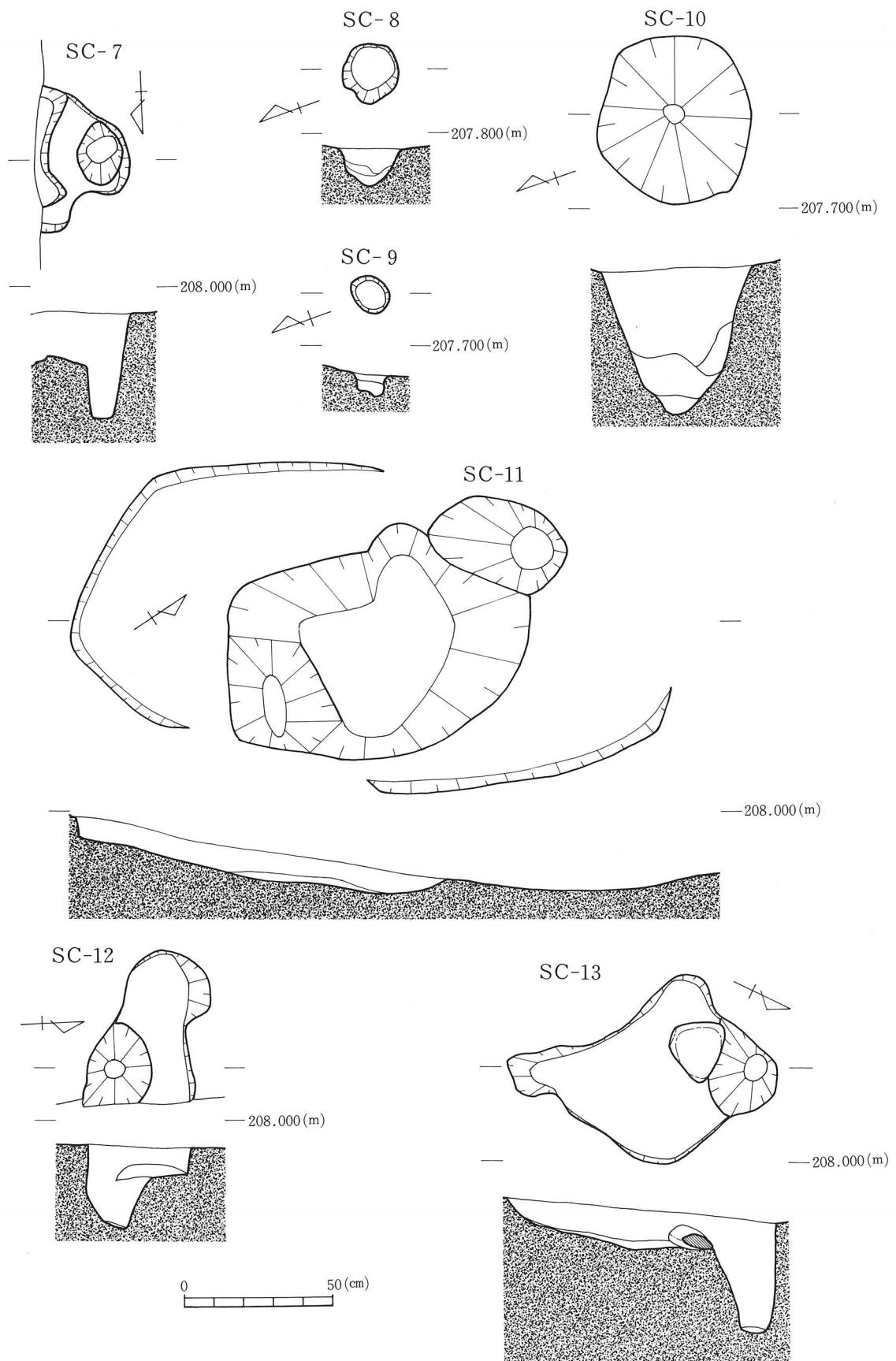
長さ35cm、幅25cmの楕円形を呈する。遺構は最深部で検出面から50cmと遺構の面積に比して深めである。混入物は認められなかった。

{ S C -28 }

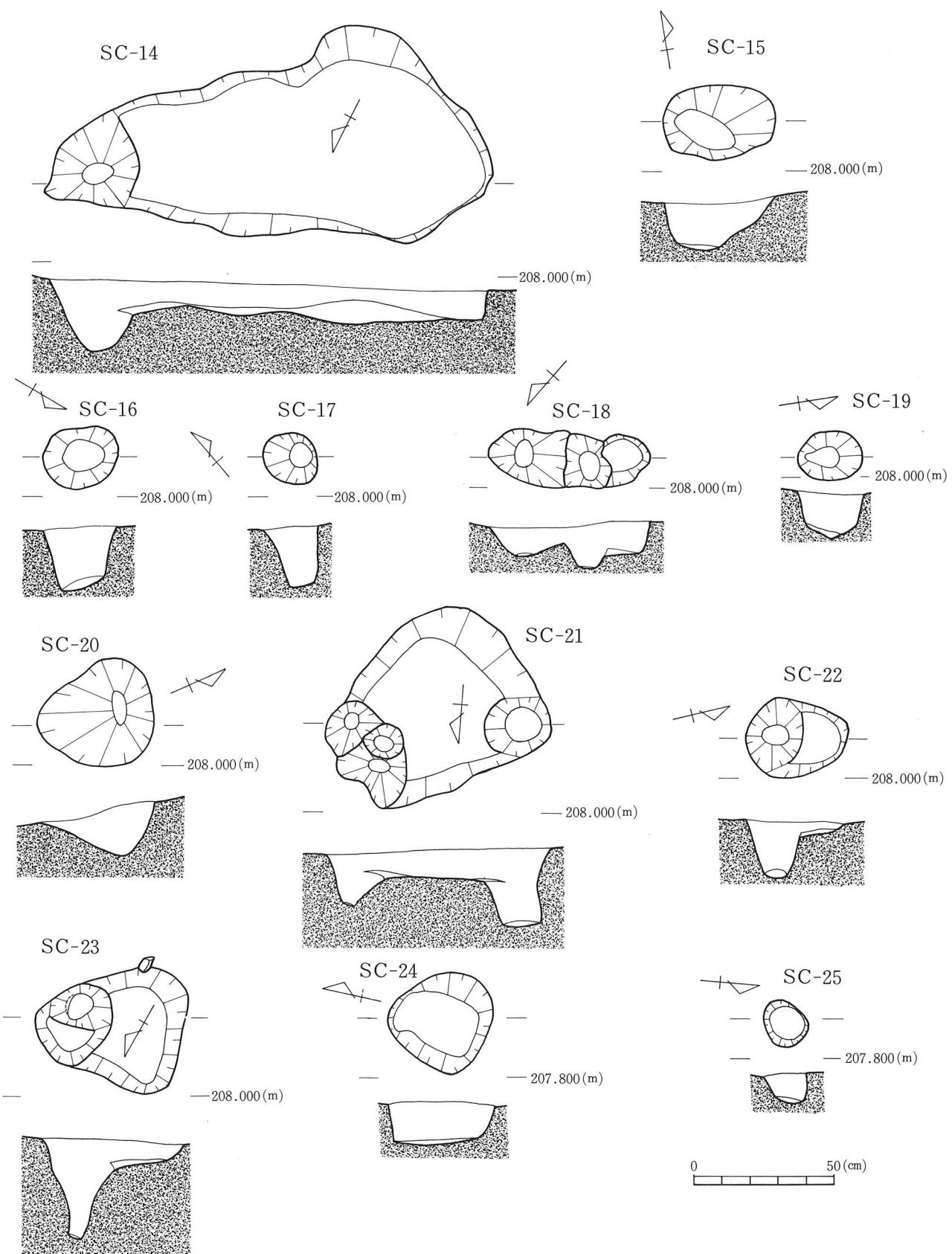
直径20cm足らずの円形を呈した小形のものである。深さは20cm程である。

{ S C -29 }

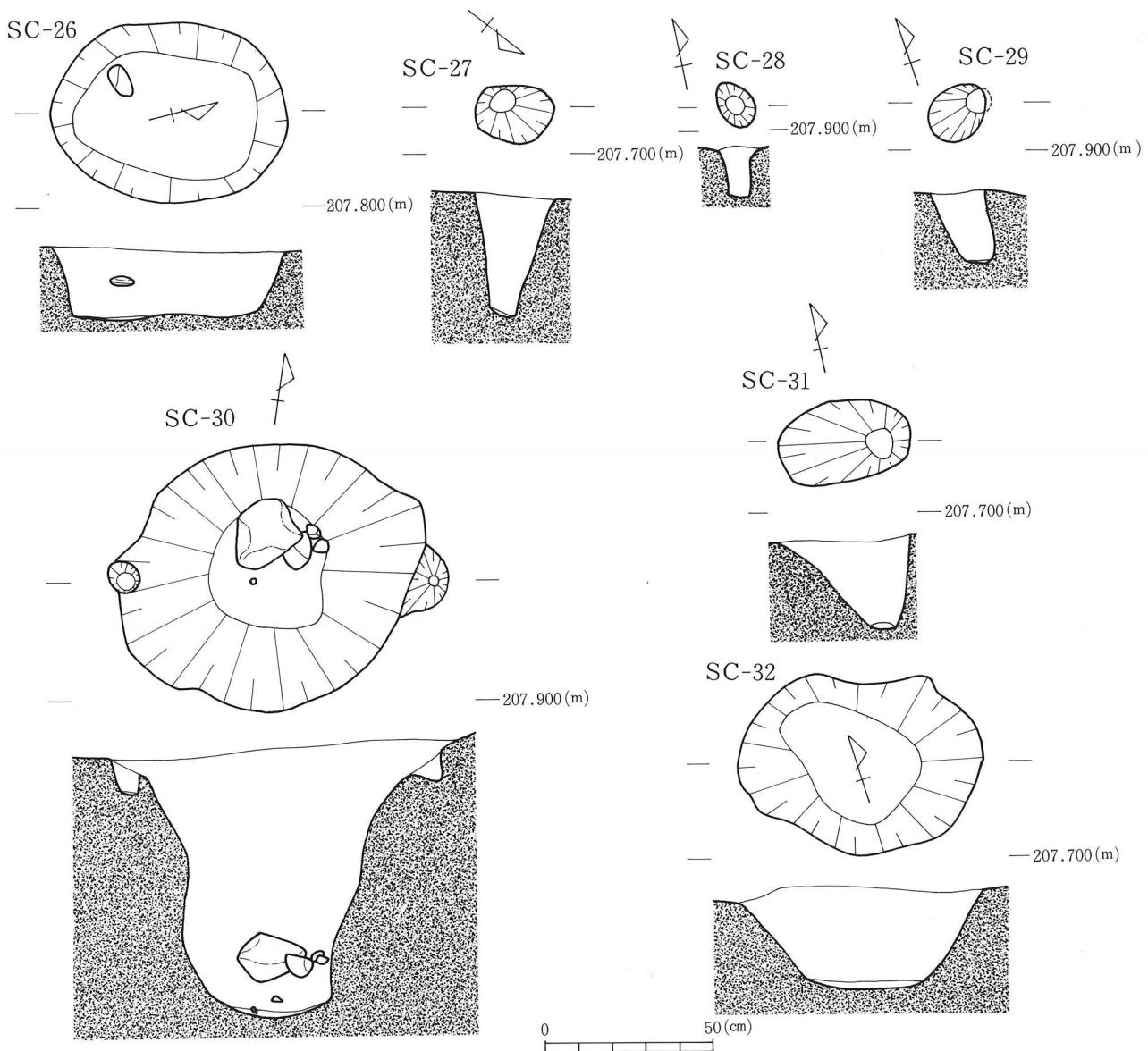
長さ30cm。幅20cmのやや歪な楕円形状を呈する。遺構は東側に大きく傾く。遺物の類は確認されな



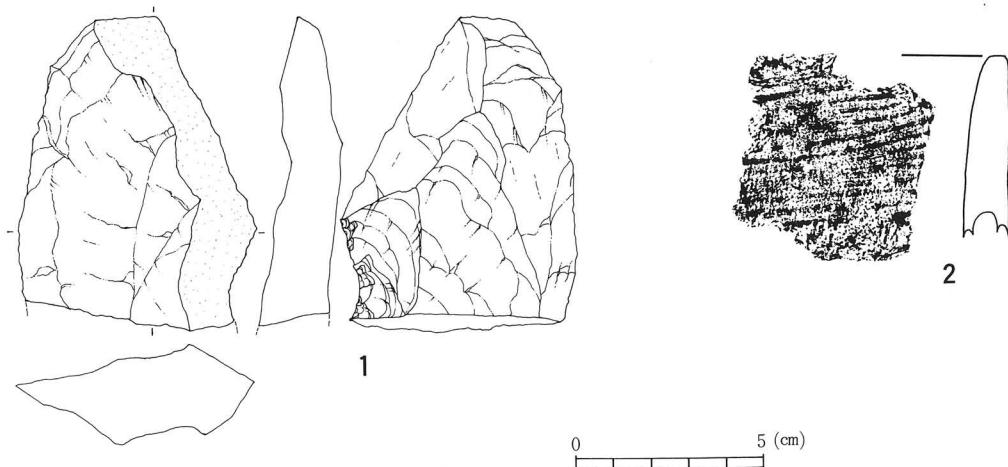
第8図 出土遺構実測図



第9図 出土遺構実測図



第10図 出土遺構実測図



第11図 S C - 30出土遺物実測図

かった。

{ S C -30 }

直径 1 m 20cm のやや歪な円形状を呈する。遺構断面は上部は摺り鉢状であるが、検出面の 40cm 下部より垂下する恰好になり、最深部は 1 m 50cm にまで達する。土坑の覆土中には長辺が 30cm になるものをはじめ大小さまざまな礫が出土している。また遺構の底面付近では石器と土器がそれぞれ出土している。なお、土坑の東西縁辺部には直径 10cm の小さな土抗が隣接しており、中央の土坑との関連性を窺わせる。

S C -30 出土土器（第11図）

外面に斜位の二枚貝による条痕文が明瞭に残される口縁部片である。暗褐色を帶びており、胎土には砂粒が目立つ。おそらく早期のものであろう。

S C -30 出土石器（第11図）

同一方向から連続的に剥離が行なわれた凝灰岩製の剥片である。石器表面右側部に残される小規模な剥離は使用痕と考えられる。裏面左側部には自然面が残される。石質の影響のため、剥離面の観察は明確ではない。

{ S C -31 }

長さ 50cm 、幅 40cm の歪な橢円形を呈す。遺構断面はロート状であるが、東側に大きく傾いており、深さは検出面から 40cm である。混入物等は確認されなかった。

{ S C -32 }

長さ 1 m 、幅 80cm の歪な橢円形を呈す。深さは検出面から 40~50cm である。出土遺物は認められなかった。

第4節 A区の調査

当調査区はⅧ層まで土取りによる削平を全面にわたって受けており、包含層の状態として良好と呼べない状態にあった。そのなかで微高地状を呈した地点を A 区として試掘による調査を行なった。 A 区は北側が谷によって落ち込んだ狭い丘陵地上にある。ここでは、旧石器時代の遺物が出土したほか、縄文草創期と考えられる遺物も確認された。

旧石器時代の遺物

ナイフ形石器（第12図 3 ）

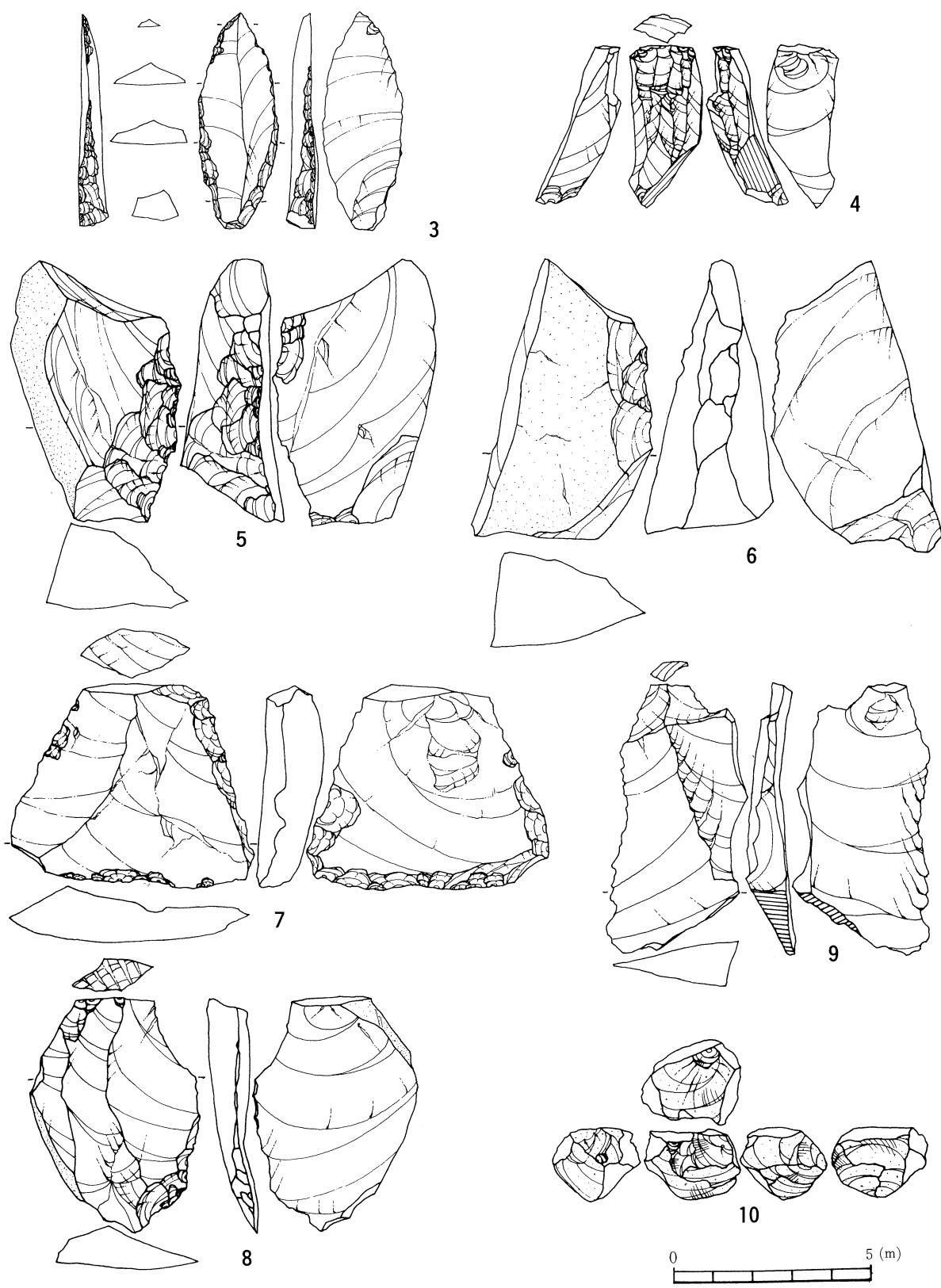
同一方向から連続的に剥離作業を行なう石核より剥離された縦長剥片を素材としたナイフ形石器である。基部を中心に二側縁加工を行ない、左右対称形に仕上げている。

作業面再生剥片（第12図 4 ）

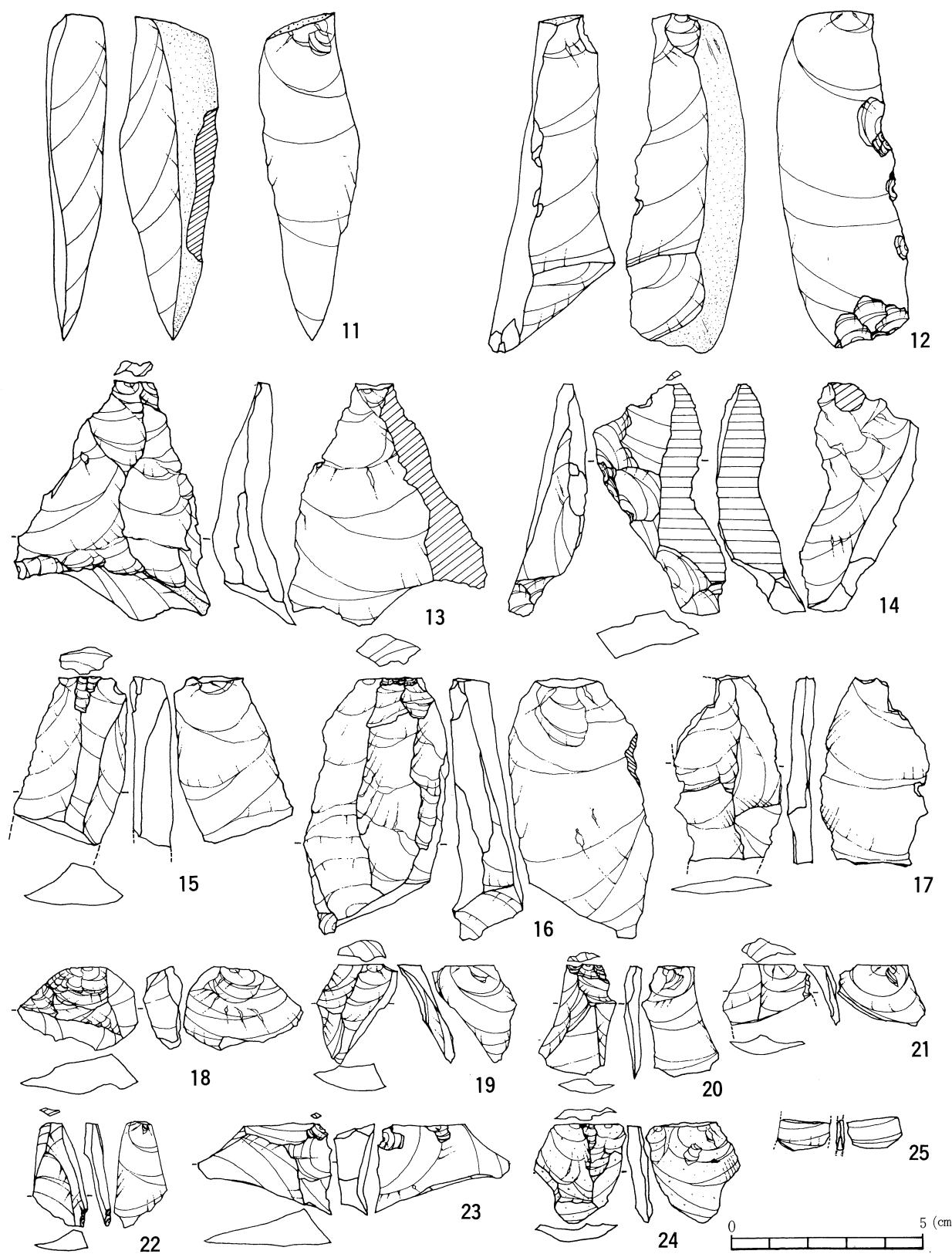
表面には剥離痕が階段状に残され、打角補正の必要性が窺える。底部に平坦面が確認されないものの、平坦面を打面として一端から細石刃の剥離が行なわれており、船野型細石刃核によるものと考えられる。ただし、通常のそれよりも打面幅や高さの点において、若干異なる様相を呈す。

スクレイパー（第12図 5 ~ 8 ）

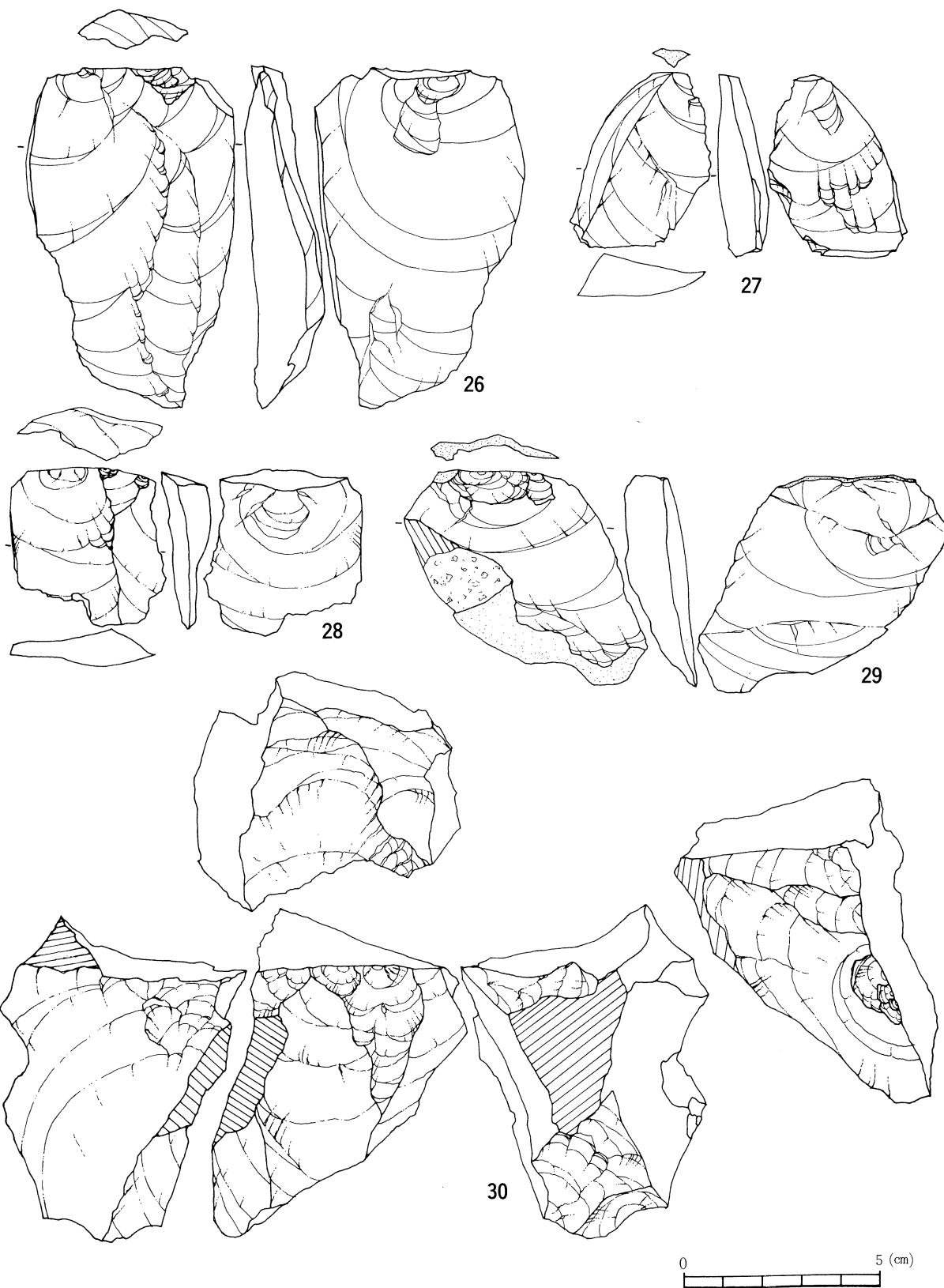
5 は自然面を有す剥片の打面を除去し、その側縁に裏面から急角度の刃部調整を行なっている。 8 は、縦長剥片の右側縁下部に剥離を施している。刃部角は 20° 以内とかなり低い。 7 は凝灰岩製である。刃部は打面をのぞいた全縁にわたる。表面には、節理が顕著に認められる。 6 も凝灰岩製であるが、これは剥片の末端部に粗雑な剥離を行なったにすぎない。



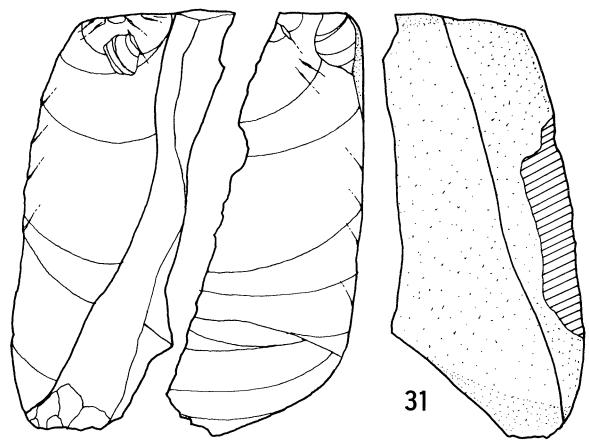
第12図 A区出土石器実測図



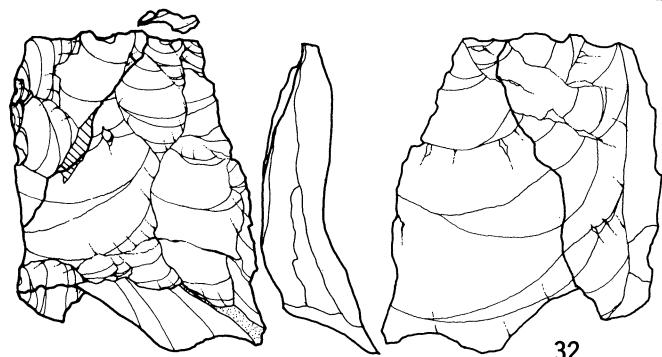
第13図 A区出土石器実測図



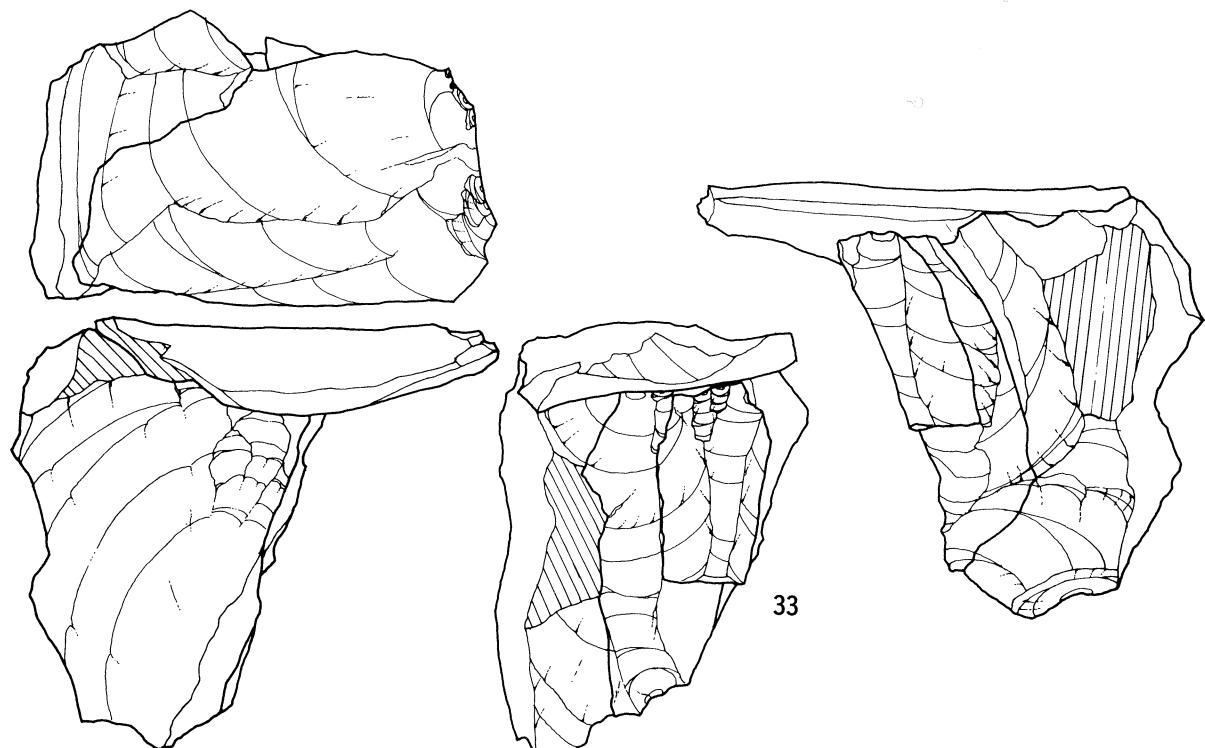
第14図 A区出土石器実測図



31



32



33

0 5 (cm)

第15図 A区出土石器実測図

石核（第12図10、第14図30）

7はサイコロ状の石核である。黒耀石製であるが、若干風化しており、剥離面の切り合いが明確でない。8は縦長剥片を連続的に剥離した石核である。

剥片（第12図9、第13図11～第14図29）

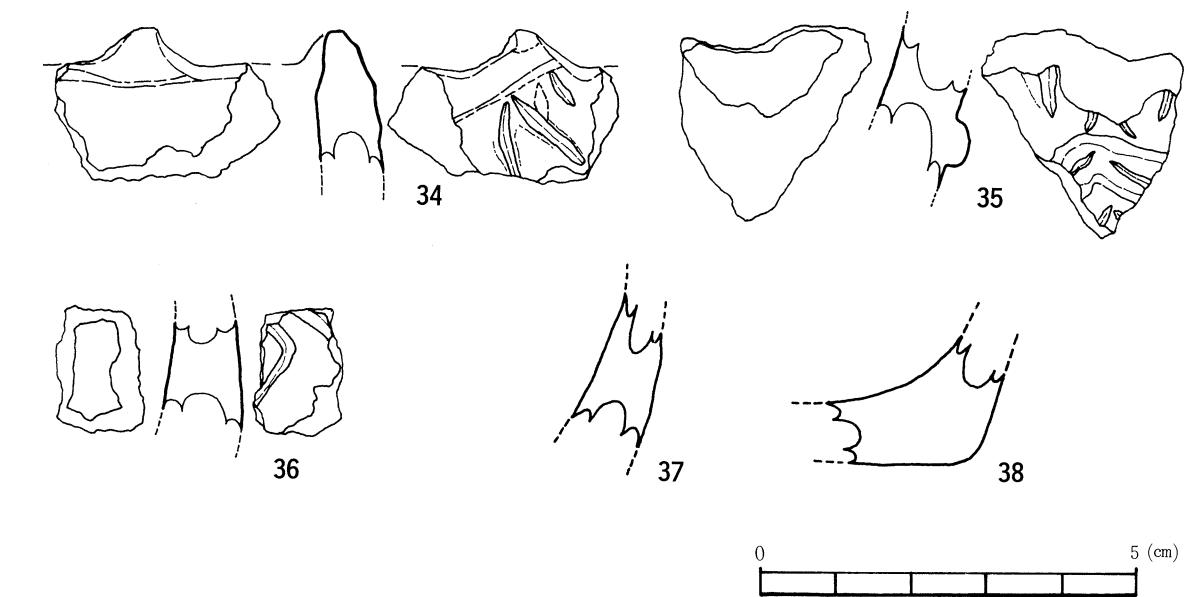
11、12はともに腹部に礫面をもった縦長剥片であり、殊に12は二次加工が行なわれている。13、14は節理面で折損している。18～25はいずれも小形であり、調整剥片の類と考えられる。24は器面が著しく風化している。18は点状打面を有す。25はチャート製であり、28は凝灰岩製の剥片である。

接合資料（第15図31～33）

31～33は接合資料である。31は11と12の接合であり、礫面除去の工程の際に剥離された可能性が強い。32は節理面に沿って折損する以前の形態が復元された。33は剥片3点と石核1点の接合資料である。石核整形の後、縦長剥片を剥離しその際26を作出、作業面と打面を転移し再び剥離作業を行なう。その工程上で9・15・16を剥離する。

土器（第16図34～38）

A区は全面にわたってⅧ層より上部が削平されているため、土器の出土は期待できないと思われた。しかし、第IX層より、旧石器時代の石器と共に土器が5点出土した。34は口縁部片であり、口縁に突起が付き、また籠状工具により凸帶上に浮き上がった部分に爪形状の刺突文が深く施される。内面には横方向にナデが残されている。35の部位は不明であるが、細長い粘土紐を「く」の字状に貼り付け、粘土紐上および器面全体に爪形の刺突を行なったものである。粘土紐上の刺突は粘土紐に対し平行しているが、それ以外は明確な方向性を欠く。36は小片である。鋭利な工具で沈線文を「く」の字に描いている。37は無文の胴部である。内外面共に横方向のナデが認められる。38は土器底部にあたると思われ、平底状を呈していたようである。これらの土器は、赤～暗褐色を帶びており、胎土には長石が多く含まれるという特徴から、同一個体のものと考えられる。また、その出土層位より、縄文時代草創期の土器の可能性が窺われる。



第16図 A区出土土器実測図

第5節 B区の調査

調査区の西端には農面道路がある。大部分削平を受けていた本遺跡のなかで、この地点は削平を免れたため、ここをB区として調査を行なった。当地区は西側にやや傾斜しており、そのため搅乱層が多く入り込んでいた。出土遺物も、搅乱層からのものが殆どである。

旧石器時代の遺物

いずれもⅢ層の搅乱層からの出土であり、したがって遺物の形態的識別ののみの分類となるため若干整合性を欠くが、以下の遺物が旧石器時代に該当すると考えられる。

細石刃核（第17図39）

分割礫の平坦面を打面とし、側面と作業面に整形を行なっている。細石刃の剥離は行なわれておらず、下端部および下端部からの調整が認められる。

両面加工石器（第17図40）

肉厚の剥片の両面に面的な剥離を施したものである。裏面中央の剥離は素材剥片段階のものである。

剥片（第17図41、42）

41は薄手の剥片であり、上端部には頭部調整を行なった痕が窺われる。縁辺には歯こぼれ状の使用痕が多く残される。42は石核の稜を除去する際に剥離された剥片である。裏面左側部に認められる微細な剥離は、使用痕である可能性がある。

石核（第18図43）

拳大の礫を分割せずに、作業面と打面を転移し打点を後退させながら剥離を行なう。技法からナイフ形石器文化の時期に属する石核と推察されよう。

第1表 A区出土旧石器時代石器観察表(1)

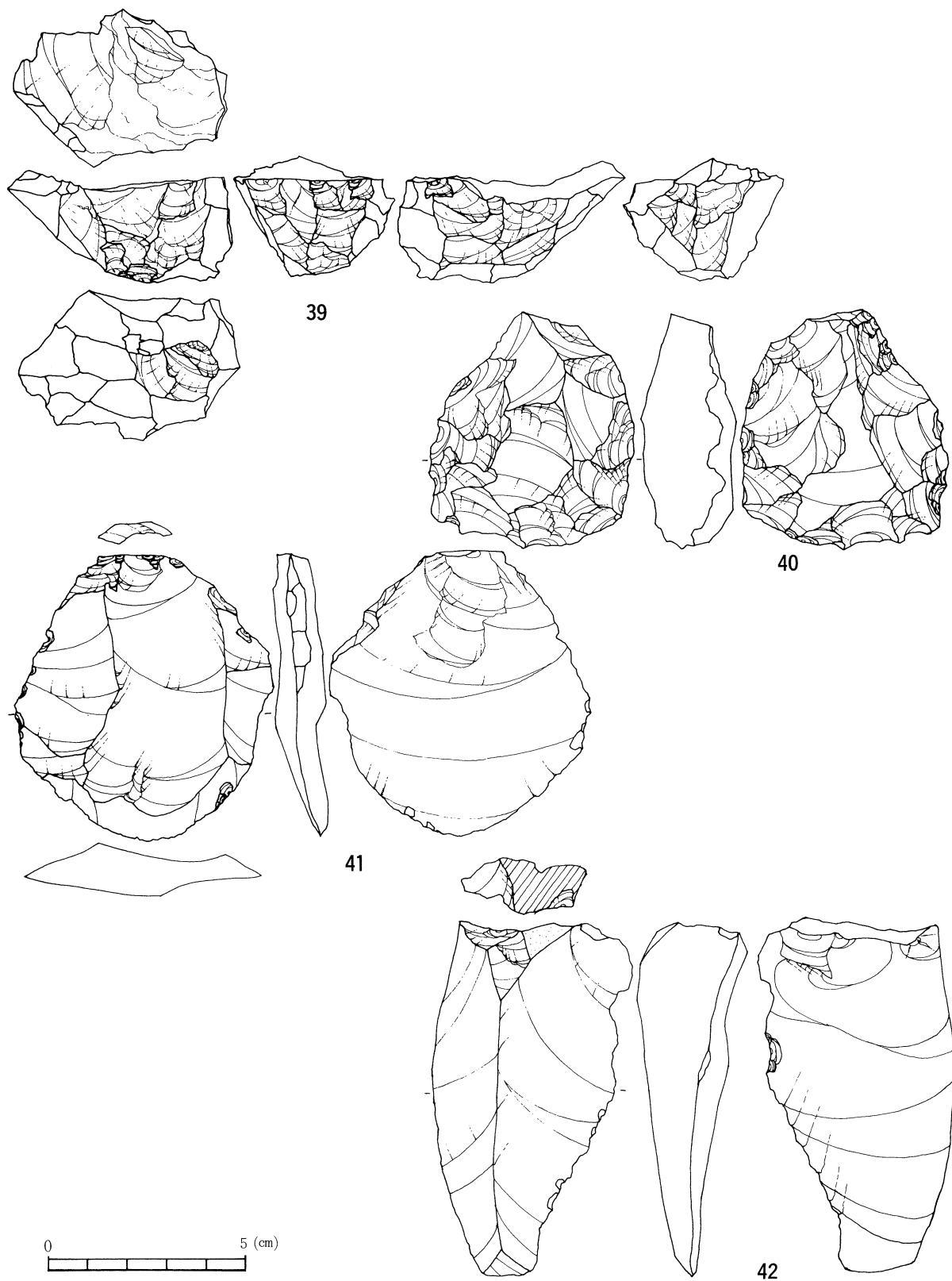
遺物番号	出土層位	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
3	第IX層	ナイフ形石器	流紋岩	5.5	2.1	0.8	
4	々	側面調整剥片	流紋岩	4.2	1.7	2.2	
5	々	スクレイパー	流紋岩	6.7	4.2	2.6	
6	々	スクレイパー	凝灰岩	7.1	4.6	3.7	
7	々	スクレイパー	凝灰岩	5.2	6.1	1.7	
8	々	スクレイパー	流紋岩	6.1	4.2	1.3	
9	々	剥片	流紋岩	6.9	3.5	1.3	
10	々	石核	黒耀石	1.8	2.9	2.3	
11	々	剥片	流紋岩	8.5	2.6	1.7	
12	々	剥片	流紋岩	9.3	3.5	3.2	
13	々	剥片	流紋岩	6.2	5.1	2.1	
14	々	剥片	流紋岩	6.0	3.0	2.3	
15	々	剥片	流紋岩	4.4	3.0	1.6	下端部欠損
16	々	剥片	流紋岩	6.7	4.8	1.9	
17	々	剥片	凝灰岩	4.9	2.8	0.7	上部欠損
18	々	剥片	チャート	2.2	3.1	1.0	
19	々	剥片	流紋岩	2.6	2.0	1.5	
20	々	剥片	流紋岩	2.8	2.0	0.5	
21	々	剥片	流紋岩	1.6	2.3	0.9	
22	々	剥片	流紋岩	2.8	1.4	0.7	

第2表 A区出土旧石器時代石器観察表(2)

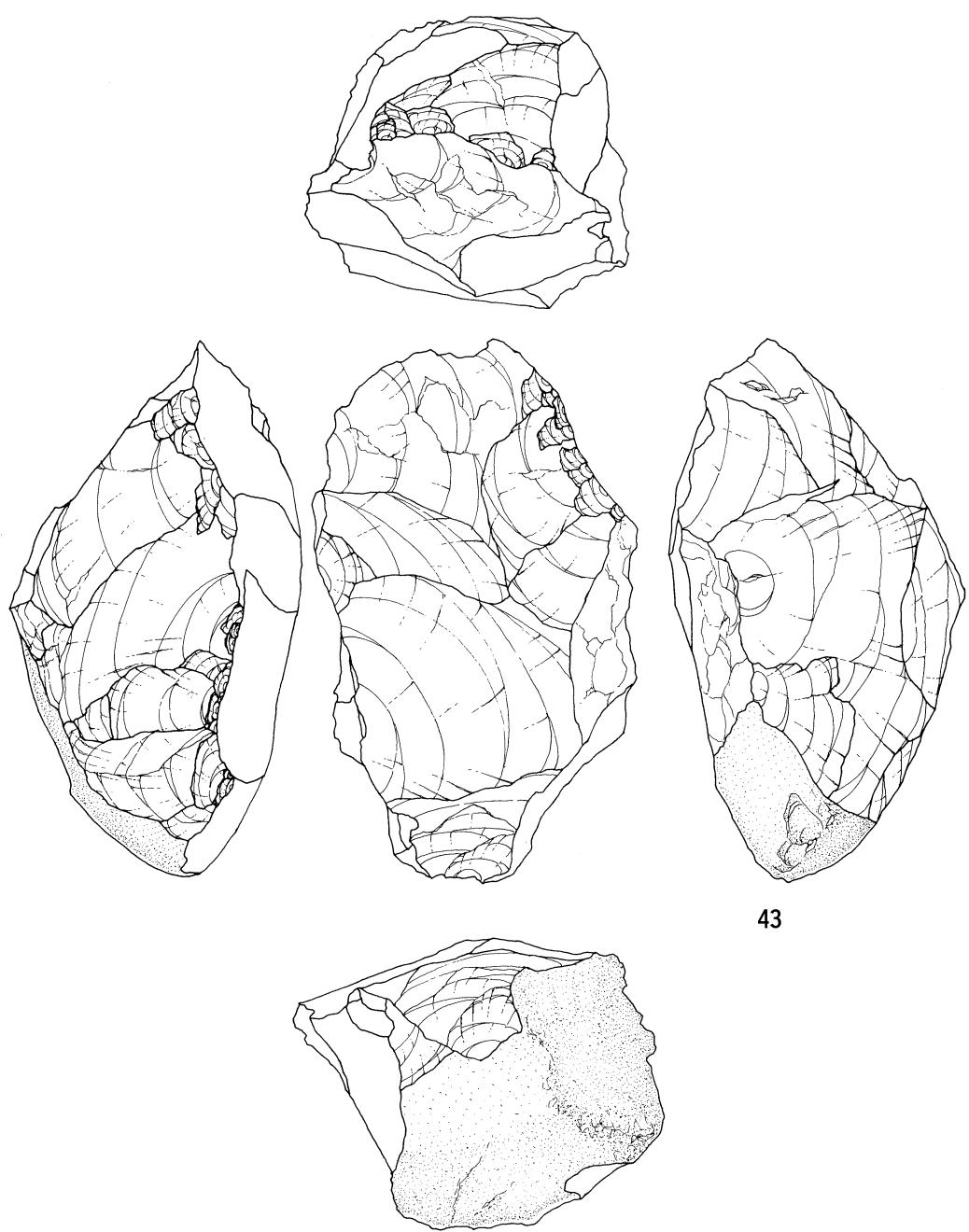
遺物番号	出土層位	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
23	第IX	剥片	流紋岩	2.4	3.5	1.1	
24	〃	剥片	粘板岩	2.7	2.4	0.6	
25	〃	剥片	チャート	0.8	1.4	0.3	
26	〃	剥片	流紋岩	8.3	5.4	2.1	
27	〃	剥片	流紋岩	4.5	3.5	1.4	
28	〃	剥片	凝灰岩	4.1	4.0	1.3	
29	〃	剥片	凝灰岩	5.6	6.3	1.8	
30	〃	石核	流紋岩	8.4	7.5	6.4	

第3表 A区出土縄文土器観察表

遺物番号	出土層位	残存部位	文様及び調整		焼成	色調		胎土	備考
			外面	内面		外面	内面		
34	第IX層	口縁部	凸帯貼付のちナデのち爪形刺突	ヨコナデ	やや軟	5YR6/6 橙	10YR4/2 灰黄褐	長石を多量、角閃石を少量、1mm以下の白色粒を多量	
35	〃	胴部	凸帯貼付のちナデのち爪形刺突	不明	やや軟	5YR6/6 橙	10YR4/2 灰黄褐	長石を多量、角閃石を少量、1mm以下の白色粒多量	
36	〃	胴部	ナデのち沈線	ヨコナデ	やや軟	5YR6/6 橙	10YR4/2 灰黄褐	長石多量、角閃石を少量、1mm以下の白色粒多量	
37	〃	胴部	ヨコナデ	ヨコナデ	ふつう	5YR4/3 にぶい黄橙	5YR4/3 にぶい黄橙	長石を多量、角閃石を少量	
38	〃	底部	ヨコナデ	ヨコナデ	ふつう	10YR7/4 にぶい黄橙	2.5YR3/2 黒褐	長石を多量、角閃石を少量、1mm以下の白色粒多量	



第17図 B区出土石器実測図



第18図 B区出土石器実測図

縄文時代の遺物

土器

早期の土器（第19図44～51）

44は外面に斜方向の二枚貝条痕が顕著に残されており、早期初頭の円筒貝殻文系土器群に属するものと思われる。45、46は筒形の胴部のうえに付けられた大きく外反する口縁部であり、早期後半に位置付けられる椎ノ原式土器のものであり、47はその撚糸文と隆帯から同型式の胴部と考えられる。器壁はかなり薄い。48は外面に蒲鉾上の隆帯を横位置に二条貼りつけたもので、断言はできないものの、早期のものとみて間違いないであろう。49は外面に5本前後を単位とした沈線を横位または斜位に巡らし、部分的に刻み目を付けたものである。50、51は外面に条痕文の残されたものである。

前期の土器（第19図52～68）

52～55は外面に爪形の刺突文を施したものである。爪形は連続的に一定の指向性をもつ。内面には横方向に丁寧なナデが行なわれている。胴部が若干膨らむ、いわゆるキャリパー状の器形を呈しており、水ノ江氏の分類する轟C、D式土器の可能性が強い。56～58は条痕文を蜜に施したのちに、断面三角形の隆帯を彫り付けたものである。頸部に屈曲ではなく、前期前葉の轟B式土器と考えられる。59、60も同類と思われるが、焼成が粗い上に外面の観察も明確でない。61～64は内外面に沈線文が連続的に描出されるものであり、前期末の曾畠式土器にあたるものである。65は横位に蒲鉾状の断面をもつ隆帯が巡らされたものである。隆帯上及び口唇部には刻み目が施される。また平口縁ではないが、波状でもないようである。口縁部から頸部にかけては屈曲は認められない。前例に乏しく土器型式による断定は不可能であるが、出土層位から前期に相当するとした。68は底部片である。肉厚であり、丸底状を呈す。

中期の土器（第19図69～129）

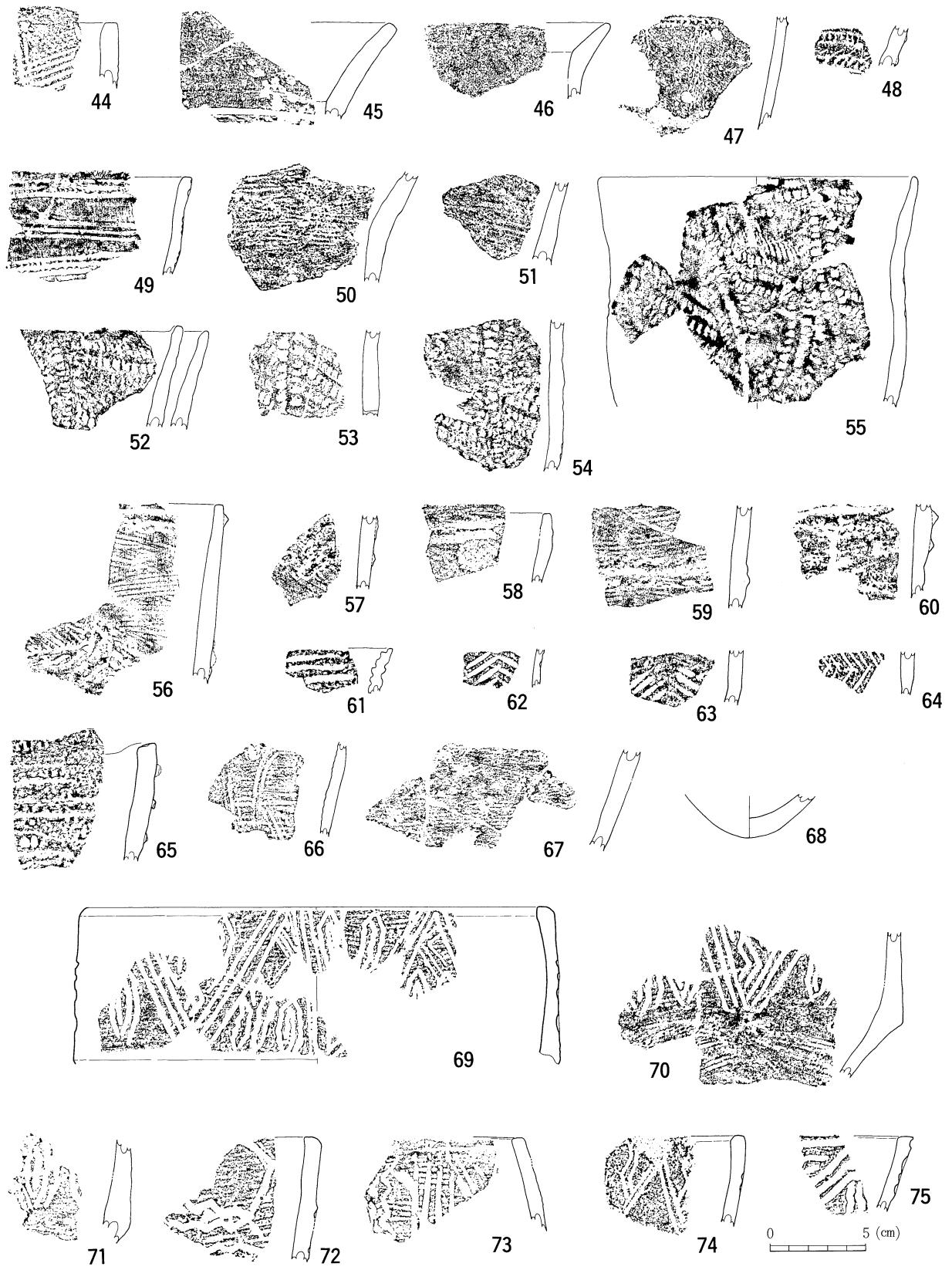
69～113は垂直に近い角度で立ち上がった口縁部に亀甲状の文様が描かれるものであり、中期後葉に位置付けられている大平式土器にあたる。この遺跡で出土しているものは、施文工具より以下3タイプに分類が可能である。

- 1類) 篦状工具による沈線文によって描かれるもの。
- 2類) 凹線文によって描かれるもの。
- 3類) 櫛描状の細線文によって描かれるもの。

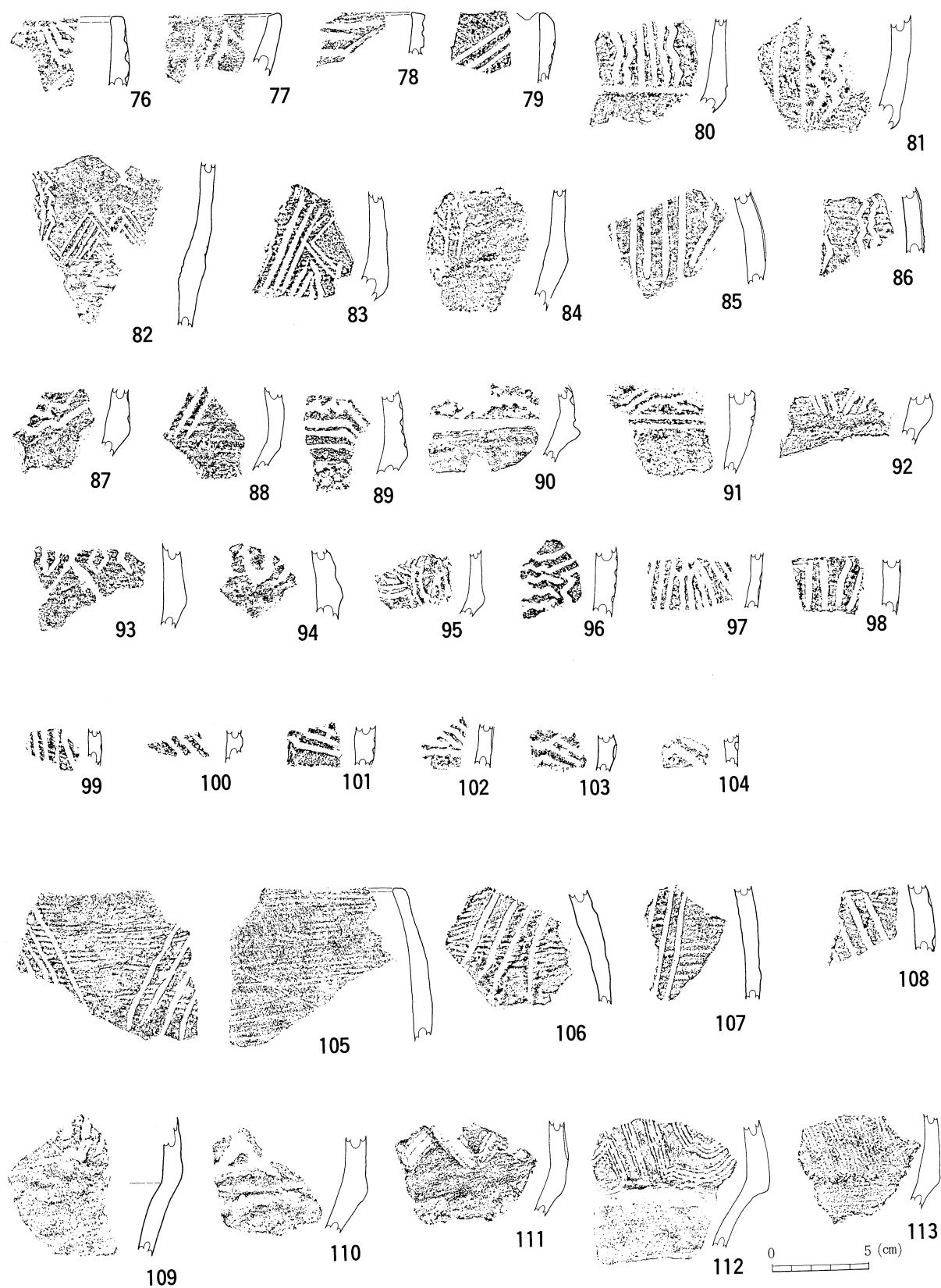
さらに1類は、モチーフによりa：鋸歯状文と直線文の合わさるものと、b：直線文のみのものに細別が可能である。これらを分類別に説明してゆきたい。

1 a類：69は口縁部片である。口縁部内面は内湾しながら立ち上がっており、外面は横方向に条痕を施したのち、沈線により文様を描く。文様は3本を一単位として構成されており、鋸歯状文を亀甲状に仕上げた部分と、直線文を斜方向に仕上げた部分が混在する。なお、69～71は同一個体である。72～79は口縁部片である。平口縁が殆どであるが、文様のモチーフはまちまちであり、鋸歯状であるほかは斎一性に欠ける。また、79は突起部を有しており、波状もしくは把手状になる可能性がある。80～95は頸部片である。口縁部から胴部の境は外面に明確な稜が形成され、個体によっては稜を際立たせるため稜の直上に沈線を施文するものもある。82～84は鋭利な工具により施文されている。93～95は沈線を施したのちに器面をナデたものであり、沈線が半ば潰されている。96～104は口縁部～頸部にかけてのものであろう。

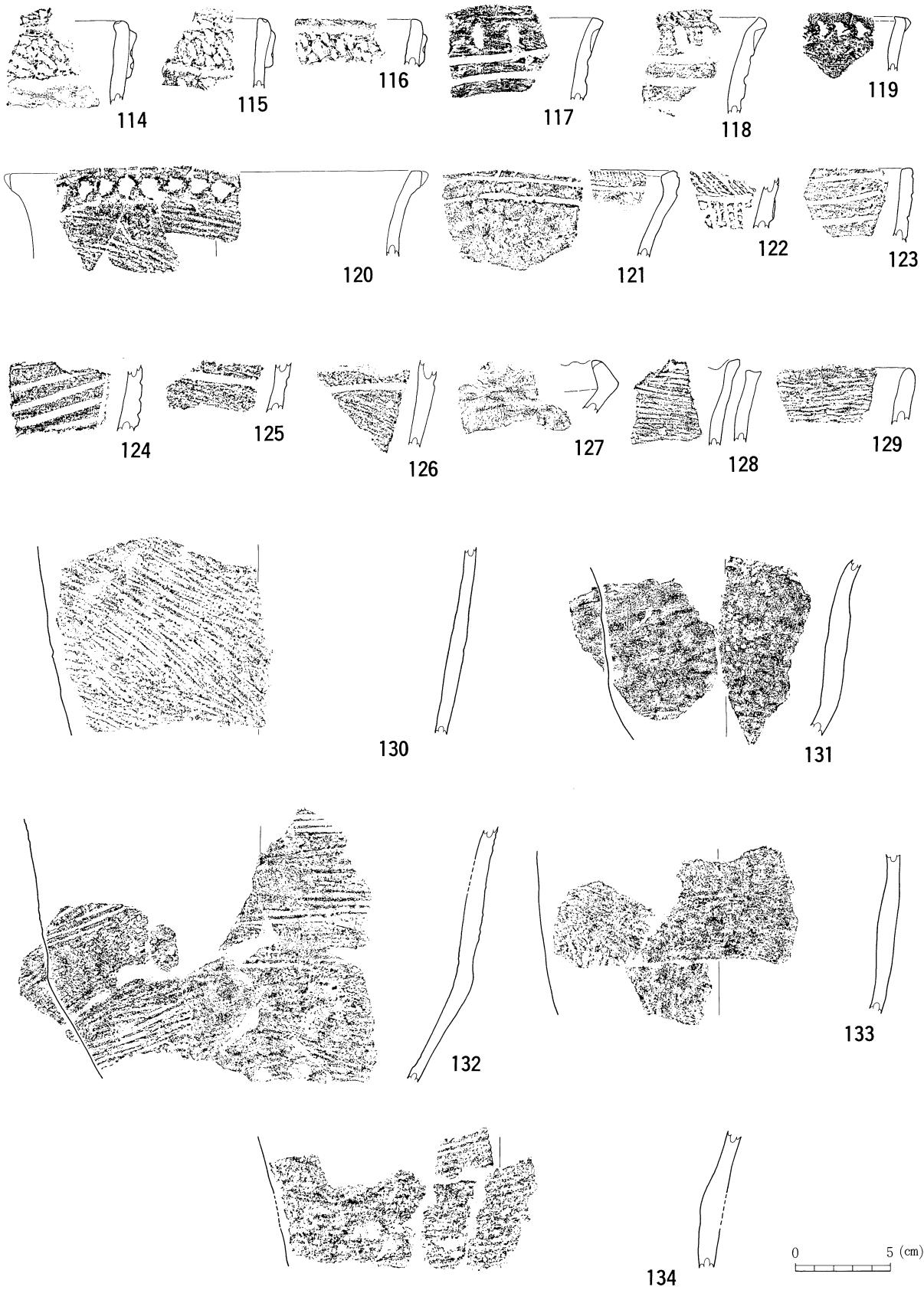
1 b類：105～108は直線文を主体として描かれた土器である。内面は横方向に条痕文を施したのち、



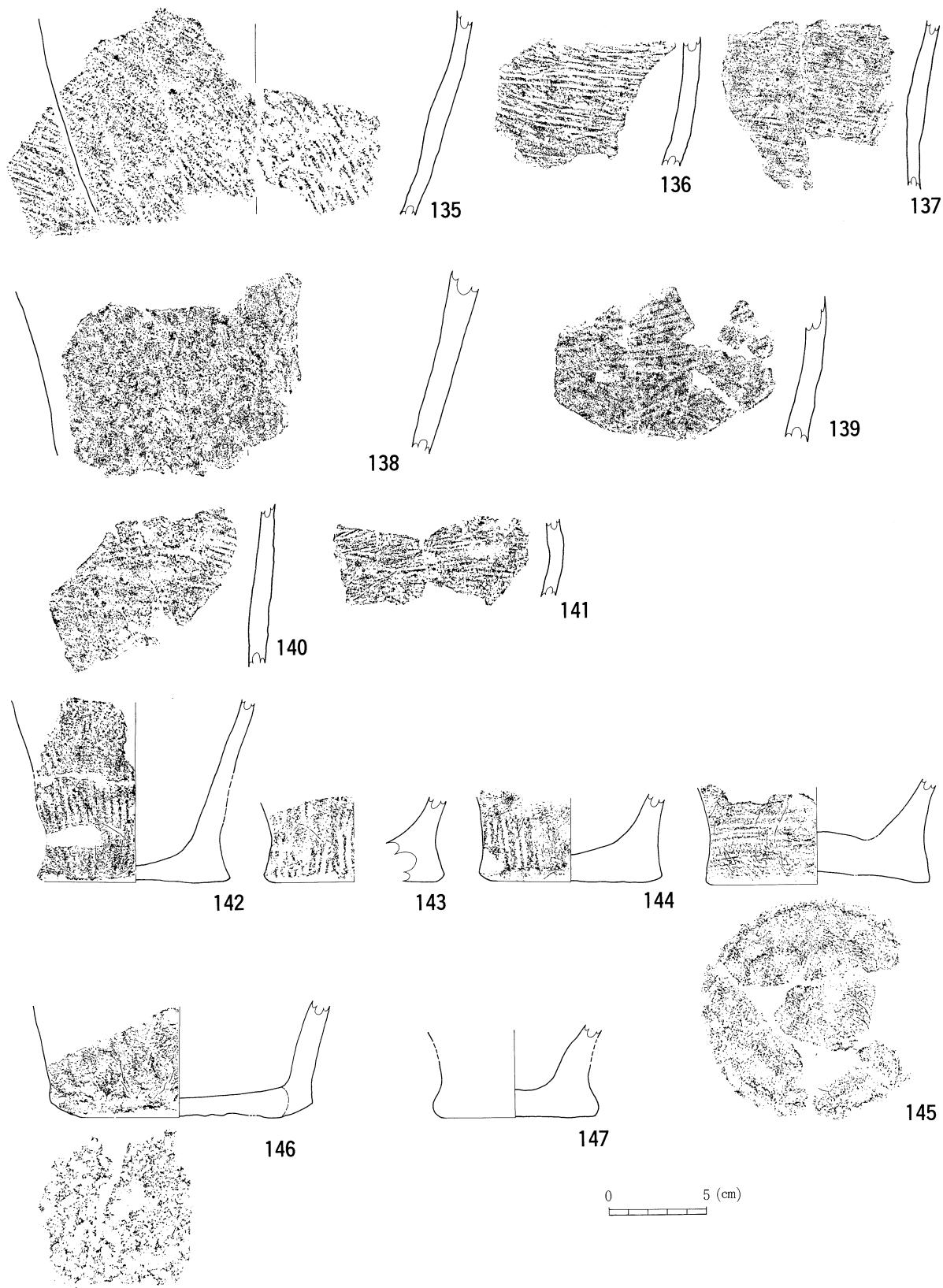
第19図 B区出土土器実測図



第20図 B区出土土器実測図



第21図 B区出土土器実測図



第22図 B区出土土器実測図

丁寧にナデが用いられている。口縁部は内外面共に内湾しながら立ち上がる。器形や焼成などに類似性が窺えることから、いずれも同一個体であると思われる。

2類：109～111は凹線文により施文された一群である。鋸歯状のモチーフであるところは1類と相違はないが、凹線の単位が1本に集約され、また沈線の後にナデを行う。

3類：112、113は櫛状の施文具によって施文されたものである。112は亀甲状に仕上げたものであり、口縁部～胴部の屈曲が著しい。113は直線状のモチーフを斜方向に平行させている。どちらも赤褐色の色調を帶びており、明黄褐色を中心とする他の分類の土器とは一線を画す。

114～116は、外面口縁部直下に帯状の貼り付けを有し、さらにそのうえに巻貝による圧痕を2～3列にわたって施している。口唇部には竹管状の刺突が一定間隔を置いて認められる。焼成は粗悪であり、たいへん脆い。117、118は外面口縁部上面に指頭状の刺突文を連続的に施し、その直下を横方向の沈線文で施文するものである。内面には貝殻による条痕文が明瞭に残される。口唇部は浅い刻み目が蜜に施される。これらの土器は中期後葉に位置付けられると思われ、周辺では高岡町橋山A遺跡に類似の資料が報告されている。119、120は、口縁部に凸帯が貼り付けられており、凸帯上に籠状工具で刻み目を付けている。内外面共に貝殻による条痕文が深く残される。中期後葉の春日式期のものと考えられる。また121は口縁部片であり、内外面に沈線が認められるほか、口唇部には刻み目が施される。器形は頸部より外反が強くなり口縁直下で稜をもたず内湾する、いわゆるキャリパー形である。122は外面に帯状の凸帯を貼りつけたのち、羽状の沈線文を横位に施すものである。内面は条痕文が残される。123～126は沈線文を数本平行させるものである。123は口縁部片であるが、文様は外面に施文された沈線のみにとどまる。127～129は口縁部片である。129は平口縁であるが、128は波状もしくは鋸歯状となり、さらに127は口縁直下で「く」の字状に屈曲したのちに平口縁となり、口唇部は指頭状の押圧が施される。

無文の土器（第21図130～第22図141）

130～141は無文の胴部片である。

130は外面に斜方向の条痕文が施されるが、内面には入念なナデが認められる。132の器形は胴部下半で屈曲しており、また外面には条痕文の後に粗いナデが行なわれた形跡がある。131、133は胴部が若干膨らむ器形を呈す。外面は粗い条痕の後に粗雑なナデを行なっている。137は外反しながら立ち上がっているが、これは頸部付近のものであろう。

底部（第22図142～147）

142、145は上げ底気味である。その外は平底状を呈するが、146は底部の摩滅が著しく、観察が明確でない。

石器

石鎌（第23図148～157）

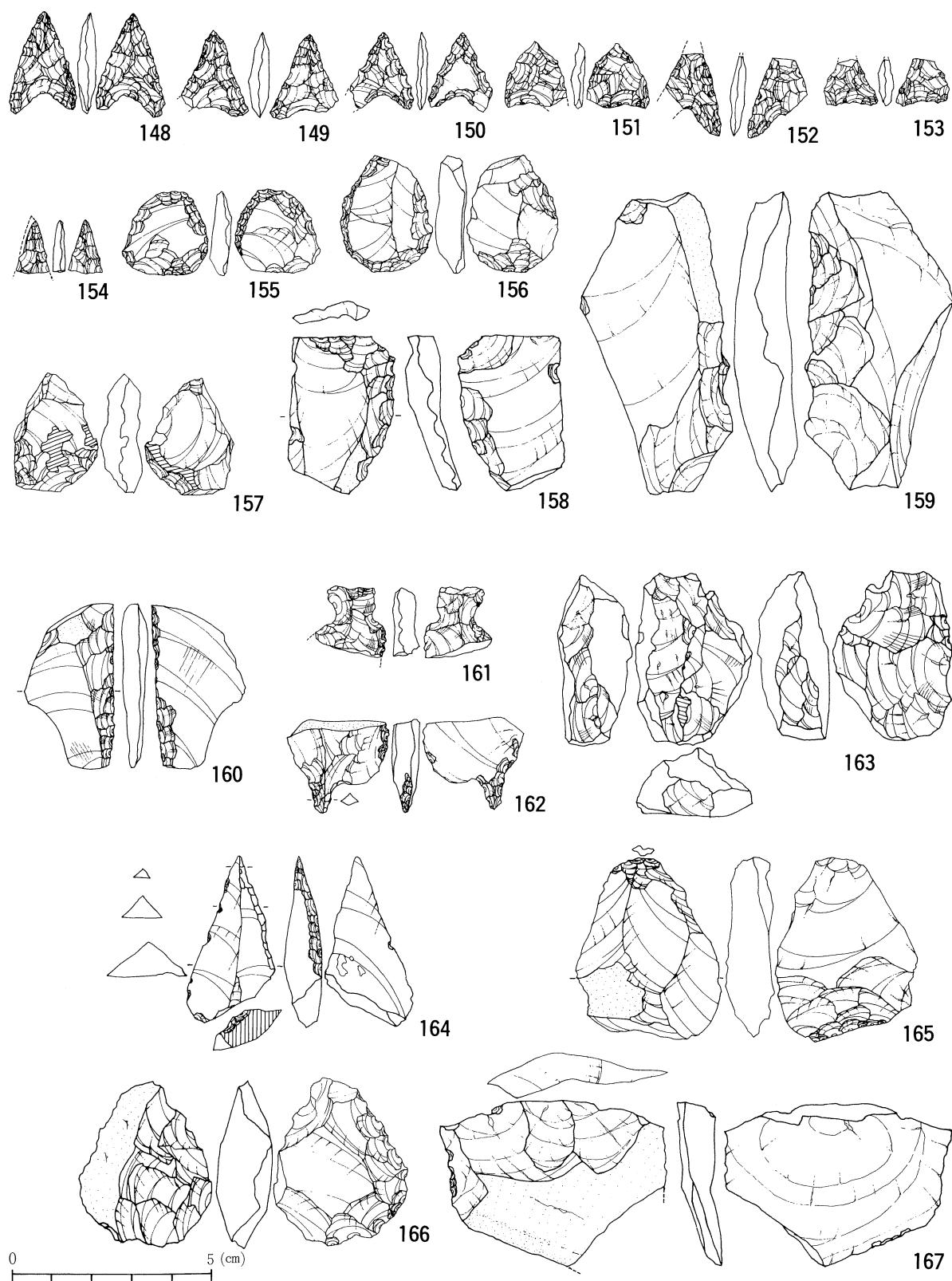
完成品は7点、完形品は1のみである。基部が残存しているものは全て抉りをもつが、その殆どが浅いものである。

スクレイパー（第23図158、160）

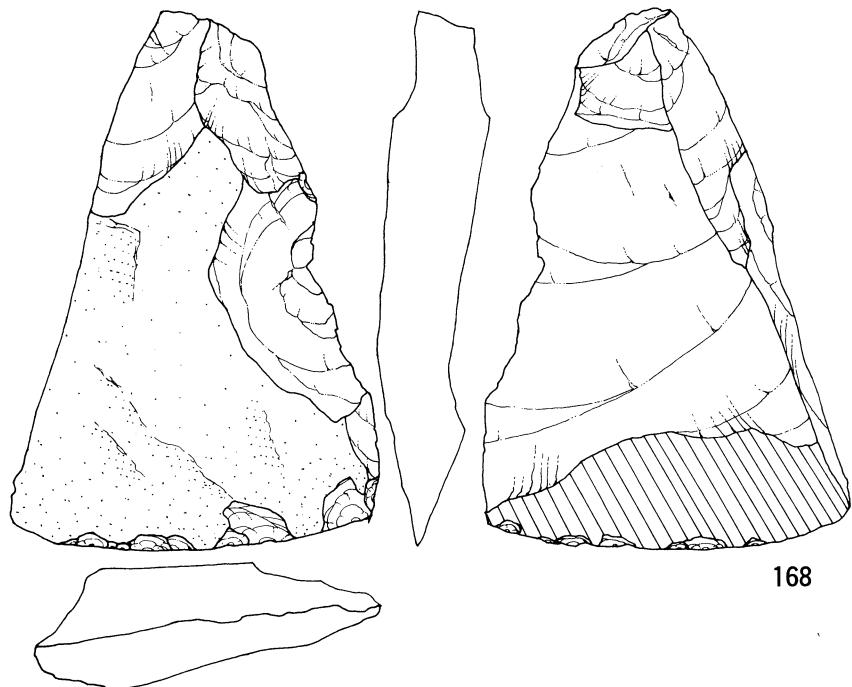
158は連続的に剥離した際の剥片の一端に両側から剥離作業を行なったものである。159は不定方向から剥離を行なった凝灰岩製の剥片の側縁に粗い剥離を行ない刃部にしている。160は姫島産黒耀石であり、薄手の剥片の打面を折断によって除去したのち、片側縁に刃部を設ける。

石匙（第23図161）

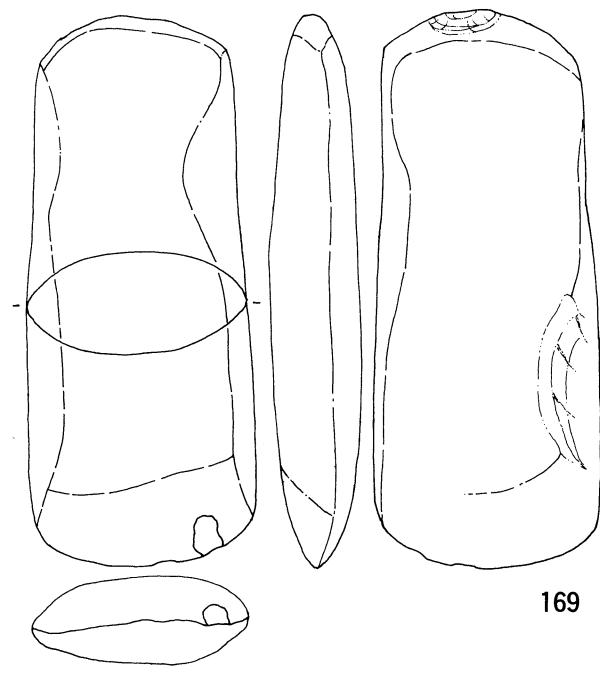
抉り部のみ残存している。元は縦長あるいは三角形状を呈したものと考えられる。器面は風化が著



第23図 B区出土石器実測図



168



169

0 5 (cm)

第24図 B区出土石器実測図

しく、剥離面の観察は明確でない。

石錐（第23図162）

自然面を打面とした薄手で小形の剥片の下部に調整を行なった石錐である。刃部断面は菱形状をなす。

石核（第23図163）

黒耀石の原礫を使用した石核である。作出した稜から剥離が行なわれたため、剥離方向は一様さを欠く。縄文時代のものと考えられる。

尖頭状石器（第23図164）

整形を意図とした調整を右側縁に僅かに行なう。素材剥片の形状のため、3つの稜が形成され、断面が二等辺三角形状をなす。打面部は節理に沿って折損している。先端部は表裏から調整を行ない、尖頭状に仕上げようとした意図が窺われるが、用途に関しては不明である。出土は第5層、縄文早期にあたり、あるいはこの時期に卓越する尖頭状石器の一形態とも考えられよう。

二次加工剥片（第23図165、166）

小形の剥片の表裏に面的な剥離を加えたもので、石鎌の未製品と考えられる。165は側縁部整形のための調整を行なっておらず、製作の初期段階であったことが窺える。

使用痕剥片（第23図167、第24図168）

ともに礫面除去を目的として剥離した薄手の剥片の縁辺を利用した凝灰岩製の剥片である。167は表面左側縁に、168は下端部は歯こぼれ状の使用痕が顕著に認められる。

石斧（第24図169）

打撃成形を行なった後に研磨により仕上げた石斧である。刃部はほぼ一直線である。

礫器（第25図170）

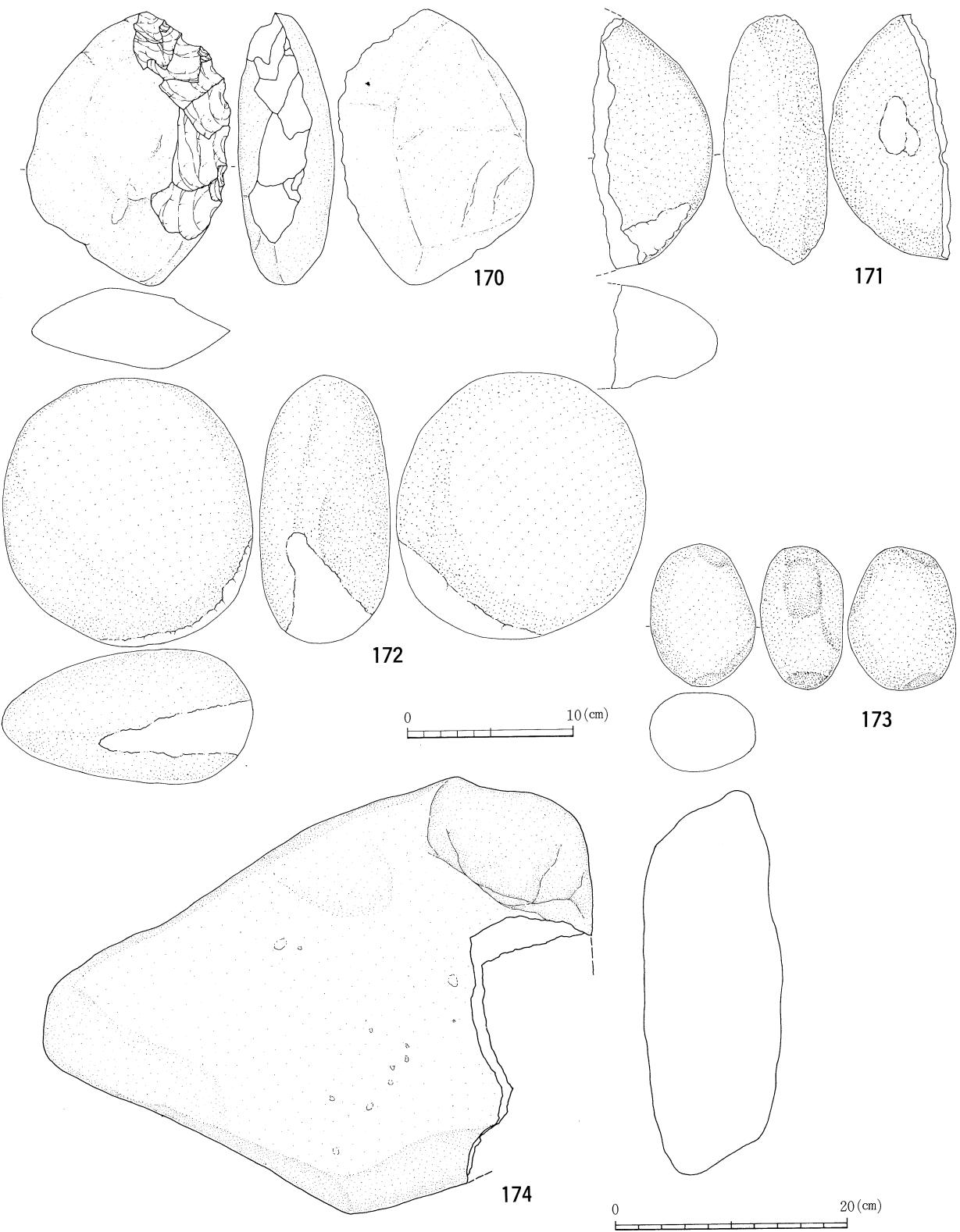
火山岩系の礫を用いた礫器である。刃部は片側にのみ作出される。

磨石（第25図171～173）

171は半碎した磨石である。部分的に敲打による使用痕が残される。尾鈴山産であろうが粒子は比較的粗めである。172は大形の磨石であるが、一部に顕著な使用痕が認められる。173は他のものに比べ小形である。

石皿（第25図174）

堆積岩系の扁平な礫を利用した石皿である。



第25図 B区出土石器実測図

第4表 B区出土旧石器時代石器観察表

遺物番号	出土層位	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
39	第Ⅲ層	ブランク	流紋岩	3.0	4.1	6.7	
40	〃	両面加工石器	流紋岩	6.2	5.2	2.7	
41	〃	剥片	流紋岩	7.2	6.6	1.3	
42	〃	剥片	流紋岩	9.0	5.0	2.8	
43	〃	石核	流紋岩	6.9	12.6	6.4	

第5表 B区出土縄文土器観察表(1)

遺物番号	出土層位	文様及び調整		焼成	色調		胎土	備考
		内面	外面		外面	内面		
44	第Ⅲ層 口縁部	斜方向二枚貝条痕のちヨコナデ	斜方向二枚貝条痕のちヨコナデ	ふつう	5YR7/6 橙	5YR6/3 にぶい橙	長石多量、1mm以下の白色粒多量	円筒貝殻文系
45	第V層 口縁部	ヨコナデのち沈線	ヨコケズリ	ふつう	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/3 にぶい黄橙	角閃石を少量、長石を少量、1mm位の白色粒を多量	塞ノ神式土器
46	〃 口縁部	横方向条痕のちヨコナデ	ヨコナデ	ふつう	5YR6/6 橙	7.5YR7/6 橙	角閃石を多量、長石を多量、1mm以下の白色粒を多量	塞ノ神式土器
47	〃 胴部	凸帯のちミガキのち撫糸	ヨコナデ	やや軟	5YR5/4 橙	10YR5/3 橙	長石を多量、砂粒を少量、角閃石を少量	塞ノ神式土器
48	〃 頸部	ヨコナデのち凸帯のち刻目	不明	やや軟	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR8/4 浅横橙	角閃石を多量、長石・雲母片ごく少量、1mm以下の白色粒少量	平柄式土器
49	〃 口縁部	ヨコナデのち沈線のち刻目	ヨコナデ	ふつう	7.5YR5/3 にぶい褐色	10YR6/3 にぶい黄橙	角閃石を少量、長石・雲母片少量、1mm以下の白色粒多量	
50	〃 胴部	斜方向条痕のちヨコナデ	ヨコ二枚貝条痕のちヨコナデ	ふつう	7.5YR7/4 にぶい橙	10YR7/3 にぶい黄橙	角閃石を少量、長石を少量、1mm位の白色粒多量	同一個体
51	〃 胴部	斜方向条痕のちヨコナデ	ヨコ二枚貝条痕のちヨコナデ	ふつう	7.5YR7/4 にぶい橙	10YR7/3 にぶい黄橙	角閃石を少量、長石を少量、1mm位の白色粒多量	同一個体
52	第IV層 口縁部	ナデのち爪形文刺突	斜方向二枚貝条痕のちヨコナデ	ふつう	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	角閃石を少量、長石を多量、1mm位の白色粒を多量	
53	〃 胴部	ナデのち爪形文刺突	斜方向二枚貝条痕のちヨコナデ	ふつう	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	角閃石を少量、長石を多量、1mm位の白色粒を多量	
54	〃 胴部	ナデのち爪形文刺突	斜方向二枚貝条痕のちヨコナデ	ふつう	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	角閃石を少量、長石を多量、1mm位の白色粒を多量	
55	〃 口縁部	ナデのち爪形文刺突	斜方向二枚貝条痕のちヨコナデ	ふつう	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	角閃石を少量、長石を多量、1mm位の白色粒を多量	
56	〃 口縁部	斜方向条痕のちナデ、のち凸帯貼付	ヨコ方向条痕	良好	7.5YR4/2 灰褐	7.5YR5/6 明褐	角閃石・長石を多量、1mm以下の白色粒を少量	轟B式土器 同一個体
57	〃 胴部	斜方向条痕のちナデ、のち凸帯貼付	ヨコ方向条痕	やや軟	7.5YR4/2 灰褐	7.5YR5/6 明褐	角閃石・長石を多量、1mm以下の白色粒を少量	轟B式土器 同一個体
58	第III層 口縁部	隆帶のちヨコナデ	斜方向条痕のちヨコナデ	やや軟	10YR5/2 灰黄褐	7.5YR6/6 橙	長石を多量、角閃石を少量、1mm以下の白色粒を少量	轟B式土器
59	〃 胴部	横方向条痕のちヨコナデのち隆帶	条痕文	良好	2.5Y7/3 浅黄	10YR7/6 明黄褐	長石を少量、角閃石を多量、1mm以下の白色粒を少量	轟B式土器
60	第IV層 胴部	斜方向条痕のち凸帯貼付のちナデ	ヨコナデ	やや軟	10YR6/2 灰黄褐	10YR8/2 灰白	角閃石を少量、長石を多量、1mm以下の白色粒を少量	轟B式土器
61	〃 口縁部	沈線	沈線	やや軟	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	長石・角閃石を多量、雲母片を少量、1mm以下の白色粒を少量	曾畠式土器
62	第III層 胴部	沈線	斜方向条痕のちヨコナデ	ふつう	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	長石・角閃石を少量、1mm以下の白色粒を少量	曾畠式土器
63	第IV層 胴部	ヨコナデのち沈線	ヨコナデ	やや軟	7.5YR7/6 橙	10YR8/4 浅黄橙	長石・角閃石を多量、雲母片を少量、1mm以下の白色粒を少量	曾畠式土器
64	第V層 胴部	羽状沈線文	ナデ	ふつう	5YR6/3 にぶい橙	5YR6/4 にぶい橙	長石を少量、角閃石を少量、砂粒を少量	曾畠式土器
65	第IV層 口縁部	ヨコナデのち凸帯貼付のち刻目	横方向条痕のちヨコナデ	ふつう	10YR7/4 にぶい橙	10YR7/4 にぶい橙	長石を多量、角閃石・砂粒を少量、1mm以下の白色粒を少量	
66	〃 胴部	二枚貝条痕のちヨコナデ	斜方向二枚貝条痕	ふつう	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR5/4 灰褐	長石を多量、角閃石を少量	

第6表 B区出土縄文土器観察表(2)

遺物番号	出土層位	文様及び調整		焼成	色調		胎土	備考
		内面	外面		外面	内面		
67	第IV層 胴部	斜方向条痕のちヨコナデ	ヨコナデ	ふつう	10YR5/2 灰黄褐	10YR5/2 灰黄褐	長石、角閃石、雲母片を少量、 1mm以下白色粒を少量	
68	〃 底部	爪形文刺突のちミガキ	ミガキ	ふつう	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	角閃石を少量、長石を多量、 1mm位白色粒を多量	
69	第III層 口縁部	横方向二枚貝条痕のちヨコナデのち沈線	横方向二枚貝条痕のちヨコナデ	ふつう	7.5YR8/3 浅黄橙	7.5YR7/2 明褐灰	長石、角閃石を少量、砂粒、 1mm以下白色粒を少量	大平式土器 同一個体
70	〃 口縁部	二枚貝条痕のちヨコナデのち沈線	横方向二枚貝条痕のちヨコナデ	ふつう	7.5YR7/3 にぶい橙	7.5YR6/2 褐灰	長石を多量、角閃石、砂粒を 少量、1mm以下白色粒を少量	大平式土器 同一個体
71	〃 口縁部	二枚貝条痕のちヨコナデのち沈線	横方向二枚貝条痕のちヨコナデ	ふつう	7.5YR7/3 にぶい橙	7.5YR6/1 褐灰	長石を多量、角閃石、砂粒を 少量、1mm以下白色粒を少量	大平式土器 同一個体
72	〃 口縁部	横方向条痕のちヨコナデのち沈線	縦方向二枚貝条痕のちヨコナデ	ふつう	7.5YR8/3 浅黄橙	7.5YR7/3 にぶい橙	長石を多量、角閃石を少量、 1mm以下白色粒を多量	大平式土器
73	〃 口縁部	横方向二枚貝条痕のち沈線	横方向二枚貝条痕のちヨコナデ	ふつう	5YR8/3 浅橙	5YR8/4 浅橙	長石、角閃石を少量、砂粒を 少量、1mm以下白色粒を少量	大平式土器
74	〃 口縁部	ヨコナデのち沈線	横方向条痕のちヨコナデ	ふつう	7.5YR7/3 にぶい橙	10YR7/3 にぶい黄橙	長石を多量、角閃石、砂粒を 少量、1mm以下白色粒を少量	大平式土器
75	〃 口縁部	口縁部ヨコナデのち沈線	横方向条痕のちヨコナデ	ふつう	10YR8/3 浅黄橙	2.5YR7/2 灰黃	長石、角閃石を少量、砂粒、 1mm以下白色粒を少量	大平式土器
76	〃 口縁部	横方向条痕のちヨコナデのち沈線	ヨコナデ	ふつう	7.5YR7/3 にぶい橙	7.5YR7/2 にぶい橙	長石を多量、角閃石を少量、 1mm位白色粒を多量	大平式土器
77	〃 口縁部	沈線のちヨコナデ	ヨコナデ	やや軟	2.5Y8/2 灰	2.5Y6/2 灰黃	長石、角閃石を少量、砂粒を 多量、1mm位白色粒を多量	大平式土器
78	〃 口縁部	沈線のちヨコミガキ	横方向二枚貝条痕のちヨコナデ	ふつう	10YR4/3 褐灰	7.5YR7/2 明褐灰	長石を少量、角閃石を少量、 1mm以下白色粒を少量	大平式土器
79	〃 口縁部	斜方向ナデのち沈線	斜方向ナデ	ふつう	10YR7/3	10YR6/1	長石を多量、角閃石を少量、 砂粒を少量	大平式土器
80	〃 口縁部	ヨコナデのち沈線	ヨコナデ	ふつう	10YR8/3 浅黄橙	5Y8/2 灰白	長石を多量、角閃石を少量、 砂粒を多量	大平式土器
81	〃 口縁部	横方向条痕のち沈線のちヨコナデ	ヨコ条痕のちヨコナデ	ふつう	5YR7/4 にぶい橙	5Y6/4 にぶい橙	長石を多量、角閃石を少量、 1mm以下白色粒を少量	大平式土器
82	〃 口縁部	ヨコナデのち沈線	横方向二枚貝条痕のちヨコナデ	ふつう	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR8/3 浅黄橙	長石を少量、角閃石を少量	大平式土器
83	〃 口縁部	横方向条痕のちヨコナデのち沈線	ヨコナデ	ふつう	7.5YR7/3 にぶい橙	7.5YR6/1 褐灰	長石を多量、角閃石、砂粒を 少量、1mm以下白色粒を少量	大平式土器
84	〃 口縁部	ヨコナデのち沈線	横方向条痕のちヨコナデ	ふつう	5YR7/4 にぶい橙	10YR8/4 浅黄橙	長石を少量、角閃石を多量、 1mm以下白色粒を多量	大平式土器
85	〃 口縁部	横方向二枚貝条痕のち沈線	横方向二枚貝条痕のちヨコナデ	ふつう	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR7/6 橙	長石、角閃石を少量、砂粒を 少量、1mm以下白色粒を少量	大平式土器
86	〃 口縁部	横方向二枚貝条痕のち沈線	横方向二枚貝条痕のちヨコナデ	ふつう	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR7/6 橙	長石、角閃石を少量、砂粒を 少量、1mm以下白色粒を少量	大平式土器
87	〃 口縁部	沈線のちヨコナデ	横方向条痕のちヨコナデ	ふつう	7.5YR7/4 にぶい橙	2.5Y8/3 にぶい橙	長石、角閃石、砂粒、1mm以 下白色粒いずれも少量	大平式土器
88	〃 口縁部	横方向条痕のちヨコナデのち沈線	ヨコナデ	ふつう	7.5YR7/3 にぶい橙	7.5YR7/3 にぶい橙	長石、角閃石、砂粒を多量、 1mm位白色粒を少量	大平式土器
89	〃 口縁部	押引のちヨコナデ	ヨコナデ	ふつう	2.5Y6/3 黄灰	10YR6/1 褐灰	長石を多量、角閃石を少量、 1mm以下白色粒を多量	大平式土器
90	〃 口縁部	ヨコナデのち沈線	横方向条痕のちヨコナデ	やや軟	5YR6/6 橙	7.5YR5/4 にぶい褐色	長石、角閃石、1mm以下白 色粒いずれも少量	大平式土器
91	〃 口縁部	横方向条痕のち沈線のちヨコナデ	横方向条痕のちヨコナデ	ふつう	10YR5/2 灰黄褐	10YR7/4 にぶい黄橙	長石を多量、角閃石を少量、 砂粒を少量	大平式土器
92	〃 口縁部	ヨコナデのち沈線	横方向条痕のちヨコナデ	ふつう	7.5YR7/3 にぶい橙	10YR7/3 にぶい黄橙	長石を多量、角閃石、砂粒、 1mm以下白色粒を少量	大平式土器
93	〃 口縁部	条痕のちナデのち沈線	横方向条痕のちヨコナデ	ふつう	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	長石を多量、角閃石、砂粒、 1mm以下白色粒を少量	大平式土器
94	〃 口縁部	ヨコナデのち沈線	横方向条痕のちヨコナデ	ふつう	7.5YR8/3 浅黄橙	7.5YR7/3 にぶい黄橙	長石を少量、砂粒、1mm以 下白色粒を多量	大平式土器 同一個体

第7表 B区出土縄文土器観察表(3)

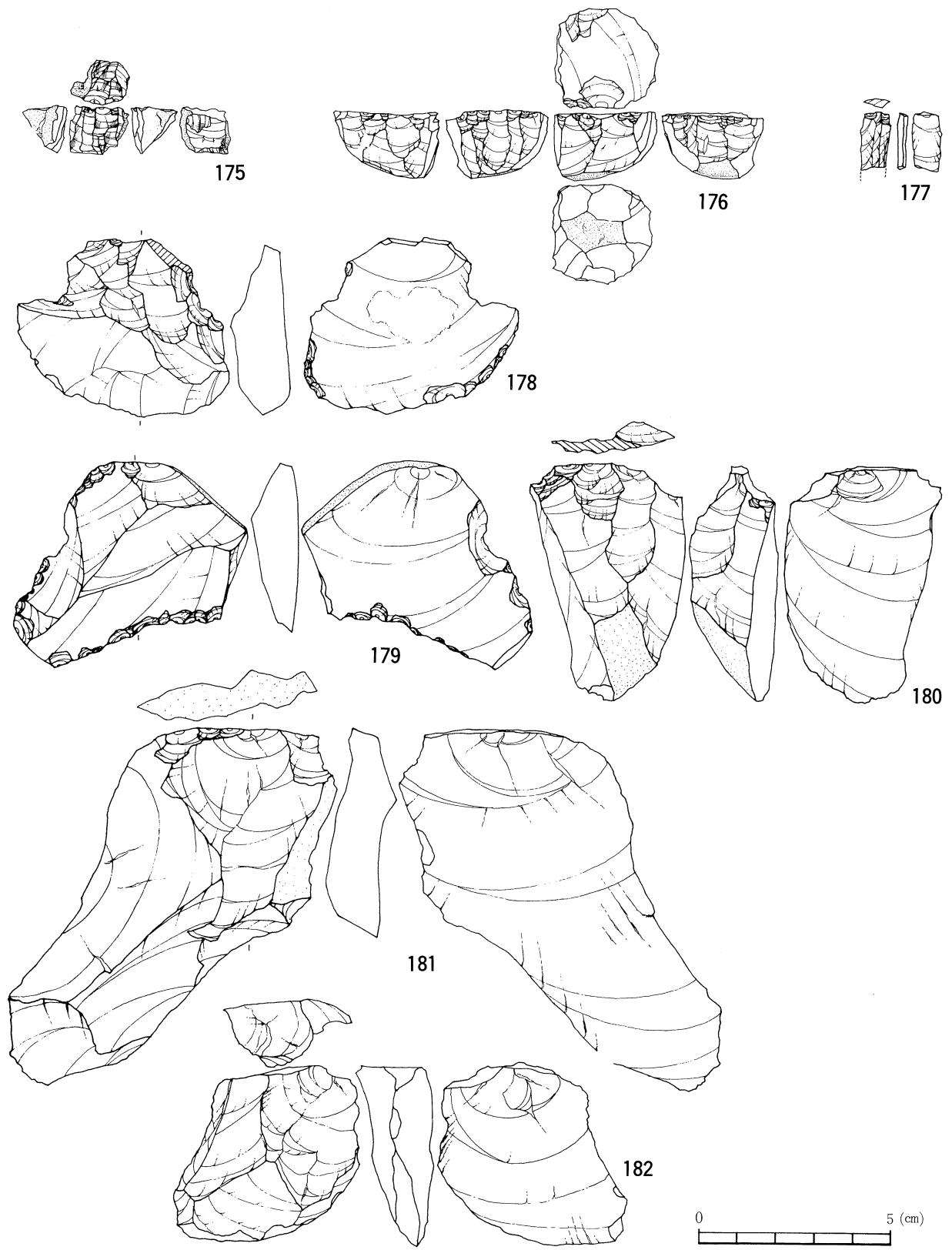
遺物番号	出土層位	残存部位	文様及び調整		焼成	色調		胎土	備考
			内面	外面		外面	内面		
95	第三層	口縁部	横方向条痕のちヨコナデのち沈線		ふつう	10YR7/4 明黄褐	10YR8/4 浅黄橙	長石を多量、角閃石を少量、1mm以下の白色粒を多量	大平式土器
96	〃	口縁部	沈線のちナデ	ナデ	ふつう	7.5YR7/6 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	長石を多量、角閃石、1mm以下の白色粒を少量	大平式土器
97	〃	口縁部	横方向条痕のちヨコナデのち沈線		ふつう	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/6 橙	長石を多量、角閃石、1mm以下の白色粒を少量	大平式土器
98	〃	口縁部	ヨコナデのち沈線	横方向条痕のちヨコナデ	ふつう	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR7/3 にぶい黄橙	長石を少量、砂粒、1mm以下の白色粒を多量	大平式土器 同一個体
99	〃	口縁部	沈線のちナデ	ナデ	ふつう	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR8/4 浅黄橙	長石を多量、角閃石、1mm以下の白色粒を少量	大平式土器
100	〃	口縁部	ナデのち沈線	ヨコナデ	ふつう	7.5YR7/4 にぶい橙	10YR5/1 褐灰	長石を少量、1mm位の白色粒を少量	大平式土器
101	〃	口縁部	沈線のちナデ	ナデ	ふつう	5YR7/4 にぶい橙	5YR7/4 にぶい橙	長石を多量、角閃石、1mm以下の白色粒を少量	大平式土器
102	〃	口縁部	横方向条痕のち沈線のちヨコナデ	横方向条痕のちヨコナデ	ふつう	7.5YR7/6 橙	7.5YR6/3 にぶい褐色	長石を多量、角閃石、1mm以下の白色粒を少量	大平式土器
103	〃	口縁部	沈線のちヨコナデ	ヨコナデ	ふつう	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	長石、角閃石、砂粒、1mm以下の白色粒いすれも少量	大平式土器
104	〃	口縁部	沈線のちヨコナデ	ヨコナデ	ふつう	5YR6/4 にぶい橙	5YR5/4 にぶい橙	長石を少量、角閃石を多量、1mm位の白色粒を少量	大平式土器
105	〃	口縁部	横方向二枚貝条痕のち沈線	横方向二枚貝条痕のちヨコナデ	ふつう	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR7/6 橙	長石、角閃石、砂粒、1mm以下の白色粒いすれも少量	大平式土器 同一個体
106	〃	口縁部	横方向二枚貝条痕のち沈線	横方向二枚貝条痕のちヨコナデ	ふつう	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR7/6 橙	長石、角閃石、砂粒、1mm以下の白色粒いすれも少量	大平式土器 同一個体
107	〃	口縁部	横方向二枚貝条痕のちヨコナデのち沈線	横方向二枚貝条痕のちヨコナデ	ふつう	7.5YR7/4 明褐灰	7.5YR7/2 明褐灰	長石を多量、角閃石、1mm以下の白色粒を少量	大平式土器
108	〃	口縁部	横方向二枚貝条痕のち沈線 横方向二枚貝条痕のちヨコナデ		ふつう	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR7/6 橙	長石、角閃石、砂粒、1mm以下の白色粒いすれも少量	大平式土器 同一個体
109	〃	口縁部	ヨコナデのち凹線	横方向条痕のちヨコナデ	ふつう	10YR8/4 灰白	2.5Y6/2. 灰黄	長石を多量、角閃石を少量、1mm以下の白色粒を多量	大平式土器
110	〃	口縁部	ヨコナデのち凹線	横方向条痕のちヨコナデ	ふつう	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	長石、砂粒を多量	大平式土器
111	〃	口縁部	ヨコナデのち凹線	ヨコ方向条痕のちナデ	ふつう	2.5Y8/4 淡黄	5Y8/2 灰白	長石、角閃石を少量、砂粒を多量、1mm以下の白色粒を少量	大平式土器
112	〃	口縁部	ナデのち細線	ヨコナデ	良好	5YR8/4 橙	5YR6/6 橙	長石を多量、角閃石、砂粒、1mm以下の白色粒を少量	大平式土器
113	〃	口縁部	ナデのち細線のちミガキ	横方向二枚貝条痕のちヨコナデ	ふつう	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐	長石を多量、角閃石、1mm位の白色粒を少量	大平式土器
114	〃	口縁部	ヨコナデのち凸帯貼付のち巻貝押圧	横方向条痕	軟	5YR4/4 にぶい赤褐	5YR4/6 赤褐	長石を少量、角閃石を多量、1mm以下の白色粒を少量	口唇部刻目 同一個体
115	〃	口縁部	ヨコナデのち凸帯貼付のち巻貝押圧	横方向条痕	軟	5YR4/4 にぶい赤褐	5YR4/6 赤褐	長石を少量、角閃石を多量、1mm以下の白色粒を少量	口唇部刻目 同一個体
116	〃	口縁部	ヨコナデのち凸帯貼付のち巻貝押圧	横方向条痕	軟	5YR4/4 にぶい赤褐	5YR4/6 赤褐	長石を少量、角閃石を多量、1mm以下の白色粒を少量	口唇部刻目 同一個体
117	〃	口縁部	ヨコ方向条痕のち沈線のち連点のちヨコナデ	斜方向条痕のちヨコナデ	ふつう	2.5Y7/3 浅黄	2.5Y6/1 黄灰	長石を多量、角閃石、砂粒、1mm以下の白色粒を少量	
118	〃	口縁部	ヨコ方向条痕のち沈線のち連点のちヨコナデ	ヨコナデ	やや軟	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y5/1 黄灰	長石を多量、角閃石、砂粒を少量、1mm以下の白色粒を多量	口唇部刻目
119	〃	口縁部	ヨコナデのち刻目	横方向二枚貝条痕文	ふつう	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR6/6 橙	長石を少量、雲母を少量	
120	〃	口縁部	斜方向二枚貝条痕のち凸帯貼付のち刻目	横方向条痕のちヨコナデ	ふつう	7.5YR6/4 にぶい橙	5YR7/4 にぶい橙	長石、角閃石、砂粒、1mm以下の白色粒いすれも少量	
121	〃	口縁部	沈線のちナデ	横方向条痕のち横方向粗いミガキ	やや軟	5YR3/6 暗赤褐	7.5YR4/6 褐色	長石、角閃石、1mm以下の白色粒いすれも多量	口唇部刻目
122	〃	胴部	凸帯貼付のち横方向条痕のち沈線	横方向二枚貝条痕のちヨコナデ	やや良好	2.5Y4/2 暗灰黄	10YR7/3 にぶい黄橙	長石、角閃石、雲母片、砂粒、1mm以下の白色粒いすれも少量	時期不明

第8表 B区出土縄文土器観察表(4)

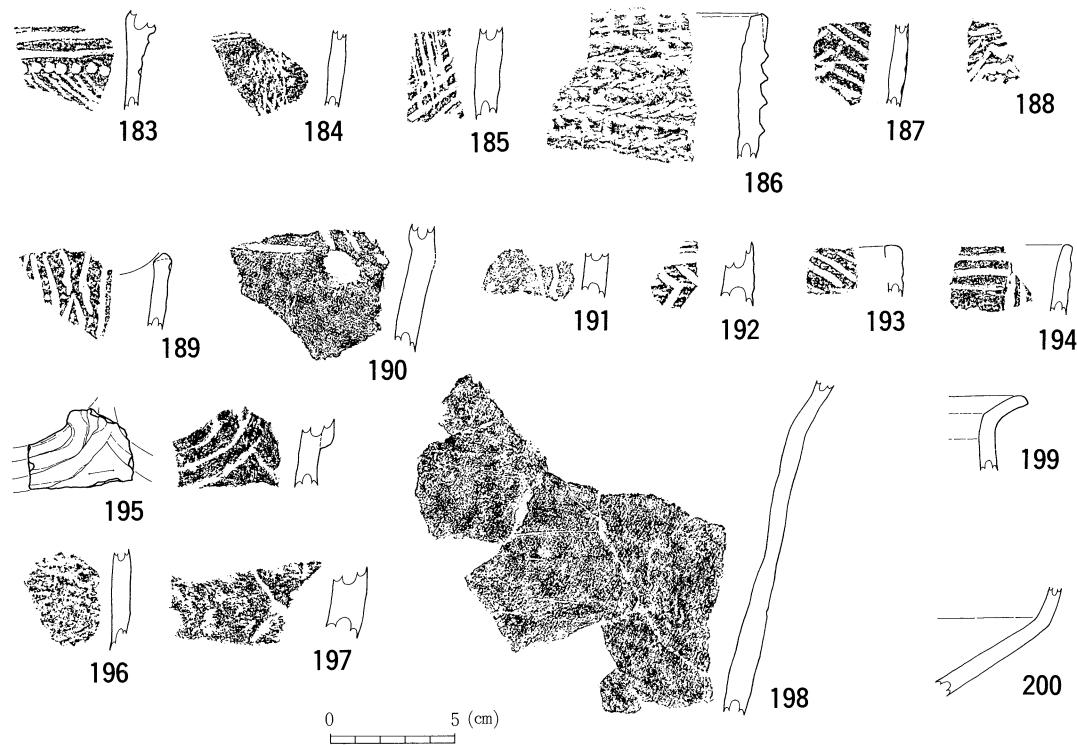
遺物番号	出土層位	残存部位	文様及び調整		焼成	色調		胎土	備考
			内面	外面		外面	内面		
123	第Ⅲ層	口縁部	斜方向巻貝条痕のち巻貝沈線のちヨコミガキ	横方向巻貝条痕のちヨコミガキ	ふつう	7.5YR6/3 にぶい褐色	10YR7/3 にぶい黄橙	長石、角閃石、砂粒いずれも少量	
124	~	胴部	沈線のちヨコナデ	ヨコナデ	ふつう	2.5Y4/2 暗灰黄	10YR6/3 にぶい黄橙	長石、角閃石、1mm以下の白色粒をいずれも少量	
125	~	胴部	横方向条痕のち沈線のちヨコナデ	横方向条痕のちヨコナデ	ふつう	2.5Y5/1 黄灰	2.5Y5/1 黄灰	長石を多量、角閃石を少量、1mm以下の白色粒を多量	
126	~	胴部	斜方向条痕のち沈線のちヨコナデ	斜方向条痕のちヨコナデ	ふつう	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y6/1 黄灰	長石、角閃石を少量、1mm以下の白色粒を多量	
127	~	口縁部	ヨコナデのちヨコミガキ	ヨコナデのちヨコミガキ	やや良好	7.5YR3/4 暗褐	7.5YR3/4 暗褐	長石を多量、角閃石を少量、1mm以下の白色粒を多量	鋸歯状口縁
128	~	口縁部	斜方向二枚貝条痕	ヨコナデ	やや良好	2.5Y5/3 黄褐	2.5Y5/3 黄褐	長石を多量、角閃石を少量、1mm位の白色粒を多量	口唇部指頭押圧
129	~	口縁部	横方向条痕のちヨコナデ	横方向条痕のちヨコナデ	ふつう	5YR7/6 橙	5YR6/3 橙	長石を多量、角閃石を少量、1mm以下の白色粒を多量	
130	~	胴部	斜方向二枚貝条痕	斜方向二枚貝条痕のちヨコナデ	ふつう	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	長石、角閃石、砂粒、1mm以下の白色粒いずれも多量	
131	~	胴部	ヨコナデ	横方向二枚貝条痕のちヨコナデ	やや良好	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	長石を少量、角閃石を少量、砂粒を多量	
132	~	胴部	横方向二枚貝条痕のちヨコナデ	横方向二枚貝条痕のちヨコナデ	やや軟	2.5Y8/4 淡黄	10YR8/3 浅黄橙	長石を多量、長石、角閃石、1mm以下の白色粒を少量	
133	~	胴部	横方向二枚貝条痕のちナデ	斜方向条痕	ふつう	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/2 明褐灰	長石、角閃石、砂粒を少量	
134	~	胴部	横方向二枚貝条痕のちヨコナデ	ヨコナデ	ふつう	5YR7/3 にぶい橙	2.5Y8/2 灰白	長石、砂粒を多量、角閃石を少量、1mm以下の白色粒を少量	
135	~	胴部	斜方向二枚貝条痕	横方向二枚貝条痕のちヨコナデ	ふつう	2.5Y8/3 淡黄	2.5Y6/1 黄灰	長石、角閃石を少量、1mm以下の白色粒を多量	
136	~	胴部	ヨコ方向条痕のちミガキ	横方向二枚貝条痕のちヨコナデ	やや良好	5YR5/6 明赤褐	5YR6/6 橙	長石、角閃石を多量、1mm以下の白色粒を少量	
137	~	胴部	横方向二枚貝条痕のちヨコナデ	横方向二枚貝条痕のちヨコナデ	やや良好	5YR6/4 にぶい橙	7.5YR8/4 浅黄橙	長石を多量、角閃石を少量、砂粒を多量	
138	~	胴部	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐	長石を少量、砂粒を少量	
139	~	胴部	横二枚貝条痕のちタテナデ	ヨコ二枚貝条痕のちヨコナデ	ふつう	2.5Y8/4 浅黄	10YR8/3 浅黄橙	長石を多量、角閃石、砂粒、1mm以下の白色粒を少量	
140	~	胴部	横方向二枚貝条痕のち斜方向ナデ	横方向二枚貝条痕のちヨコナデ	ふつう	7.5YR8/4 浅黄橙	10YR8/2 灰白	長石を多量、角閃石を少量、砂粒を多量	
141	~	胴部	横方向二枚貝条痕のちヨコミガキ	横方向条痕のちヨコナデ	やや良好	5YR7/4 にぶい橙	10YR8/4 浅黄橙	長石、角閃石を少量	
142	~	底部	縦方向条痕のちヨコナデ	斜方向条痕のちヨコナデ	ふつう	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR8/4 浅黄橙	長石を少量、角閃石を少量、1mm以下の白色粒を少量	
143	~	底部	縦方向二枚貝条痕	ヨコナデ	ふつう	2.5Y8/4 淡黄	2.5Y8/2 灰白	長石、角閃石、砂粒、1mm以下の白色粒いずれも少量	
144	~	底部	縦方向二枚貝条痕のちヨコナデ	横方向二枚貝条痕	ふつう	2.5Y8/4 淡黄	2.5Y8/4 灰白	長石、角閃石、砂粒いずれも多量	
145	~	底部	横方向二枚貝条痕のちヨコナデ	不明	ふつう	10YR8/4 浅黄橙	2.5Y8/2 灰白	長石、角閃石を多量、砂粒を少量、1mm以下の白色粒を多量	
146	~	底部	ヨコケズリ	ヨコナデ	やや良好	5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	長石を多量、角閃石を少量、1mm以下の白色粒を少量	
147	~	底部	ナデ	不明	やや軟	7.5YR7/4 にぶい橙	5YR7/1 明褐灰	長石を多量、角閃石を少量、1mm以下の白色粒を多量	

第9表 B区出土縄文時代石器観察表

遺物番号	出土層位	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
148	第V層	石鏸	流紋岩	2.6	1.7	0.4	
149	第III層	石鏸	チャート	2.2	1.7	0.5	片脚部欠損
150	〃	石鏸	サヌカイト	2.0	1.5	0.2	片脚部欠損
151	〃	石鏸	チャート	1.6	1.6	0.4	片脚部欠損
152	〃	石鏸	流紋岩	2.0	1.5	0.4	尖端・脚部欠損
153	〃	石鏸	流紋岩	1.2	1.4	0.4	尖端部欠損
154	〃	石鏸	チャート	1.3	0.9	0.3	下部欠損
155	〃	石鏸	流紋岩	2.1	2.6	0.5	未製品
156	第IV層	石鏸	流紋岩	2.9	2.4	0.7	未製品
157	第III層	石鏸	玉髓	2.9	2.1	1.1	未製品
158	〃	スクレイパー	流紋岩	4.0	2.7	1.4	
159	〃	スクレイパー	安山岩	7.6	3.7	1.6	
160	〃	スクレイパー	黒耀石	4.2	2.2	0.6	
161	〃	石匙	黒耀石	1.7	1.7	0.6	下部欠損
162	〃	石錐	流紋岩	2.4	2.5	0.6	
163	〃	石核	黒耀石	4.3	2.9	1.8	
164	第IV層	尖頭状石器	流紋岩	4.3	2.2	1.0	
165	第III層	二次加工剥片	流紋岩	4.6	3.6	1.2	
166	第III層	二次加工剥片	流紋岩	4.1	3.4	1.9	
167	第V層	使用痕剥片	安山岩	4.2	5.7	1.4	
168	第III層	使用痕剥片	安山岩	10.9	7.2	2.5	
169	〃	石斧	砂岩	10.3	4.7	1.8	
170	第V層	礫器	安山岩	11.7	8.3	3.6	
171	第III層	磨石	尾鈴山産	12.7	5.2	4.3	欠損
172	〃	磨石	尾鈴山産	11.4	9.7	5.5	
173	〃	磨石	尾鈴山産	5.0	4.9	3.7	
174	〃	石皿	堆積岩系	47.5	33.5	13.0	



第26図 表面採集石器実測図



第27図 表面採集土器実測図

第6節 表面採集による遺物

旧石器時代の遺物

細石器類（第26図175～177）

175は黒耀石の小塊を素材とした細石刃核である。176は流紋岩製の細石刃核で、底面に自然面がみられることから、礫面除去の際の剥片に側面調整を施し整形したのち、一端から細石刃の剥離作業を行なったものと考えられる。177は細石刃であり、上部には頭部調整によると思われる剥離痕が若干認められる。流紋岩製。

スクレイパー（第26図178、179）

どちらも不定方向から剥離された薄手の剥片を素材とし、刃部を作出しているが、調整は刃部を明確に断定しえないほど粗雑なものに留まる。

剥片（第26図180～182）

180は、同一方向から連続的な剥離を行なった剥片である。剥離角から、打角補正を意図して剥離されたものと考えられる。181は、求心状に剥離を行なう石核から剥離された大形の剥片である。自然面を打面としている。182は、凝灰岩製の剥片であるためローリングが激しく、剥離の方向に明確性を欠く。

縄文時代の遺物

土器

早期（第27図183～185）

183は胴部上半にあたり、沈線、連点、撚糸を横位置に施している。内面にはナデが認められる。内面上部に外反する屈曲があることから、早期後葉の塞ノ神式土器の胴部上半にあたるものと考えられる。184も同じく胴部上半であるが、沈線の下部に撚糸文を縦位に施す。器壁は薄く、早期後葉の桙ノ原式土器である。

前期（第27図186、187）

186は口縁部に断面三角形状の凸帯を数状巡らし、羽状の文様を残しながら貼り付けた深鉢形土器である。口縁部直下には鋭利な棒状の工具による縦長の刺突が施され、また斜方向の二枚貝条痕が明瞭に残される。胎土には雲母片と石英が多く含まれる。口縁部の施文方法に相異があるものの、前期初頭の轟B式土器のバリエーションのものと推測される。187は羽状の単沈線文が横位に施された胴部片である。早期後葉の曾畠式土器である。

中期（第27図188～192）

中期の土器は、すべて大平式土器にあたる。188はその口縁部にあたり、鋸歯状文による亀甲状文である。189も同じく口縁部であるが、突起が付いており、さらに突起上には工具による刻み目が付けられる。文様モチーフは大平式土器とは若干異なるものの、範疇として帰属されるものと思われる。191、192は小片であり、文様のモチーフは定かでないが、大平式土器であると考えられる。

時期不明の土器（第27図193～195）

193は沈線文が平行した口縁部片である。口唇部断面は丸みを帯びており、型式名は不明である。194は「く」の字状に曲がる沈線文の認められるものである。195は口縁部片であるが、口縁は波状となり、その口縁に平行して凸帯が二条貼り付けられている。端部は口唇部を経て内側へと流れる。この破片は波頂部付近のものと考えられるが、波頂部の正確な形状は把握不可能である。内側は丁寧なナデが行なわれているほか、全体的に黒味を帯びた赤褐色をしており、焼成は極めて良好である。調整から考えて口縁部は大きく外反し、頸部でくびれたのち、胴部が膨らむ器形を呈するようである。

無文の土器（第27図196～198）

198は深鉢形土器の胴部下半にあたる。内面は入念になでられており、外面は丁寧に磨かれるほか、煤も付着している。196、197は小片である。

石器

石鏃（第28図201～211）

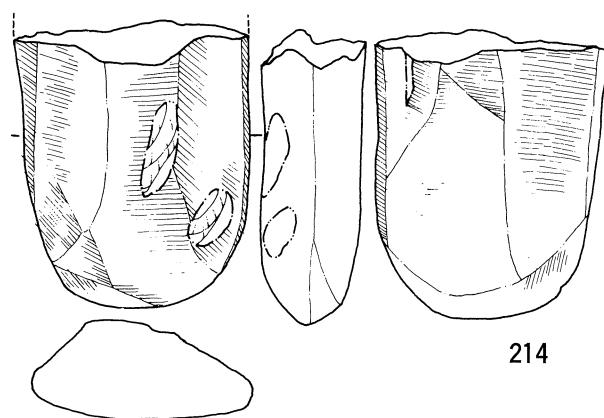
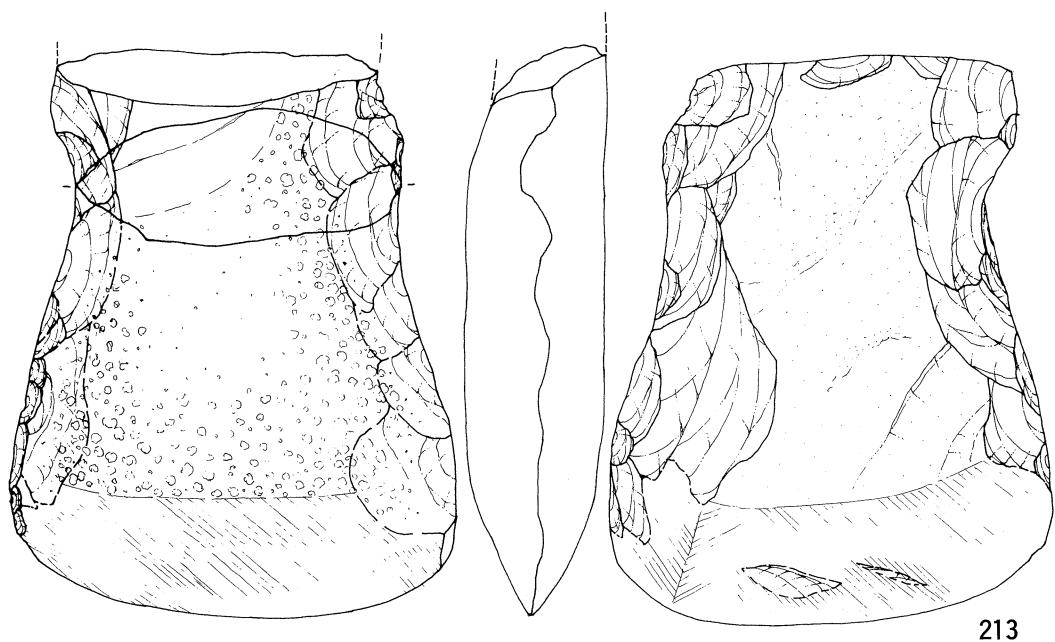
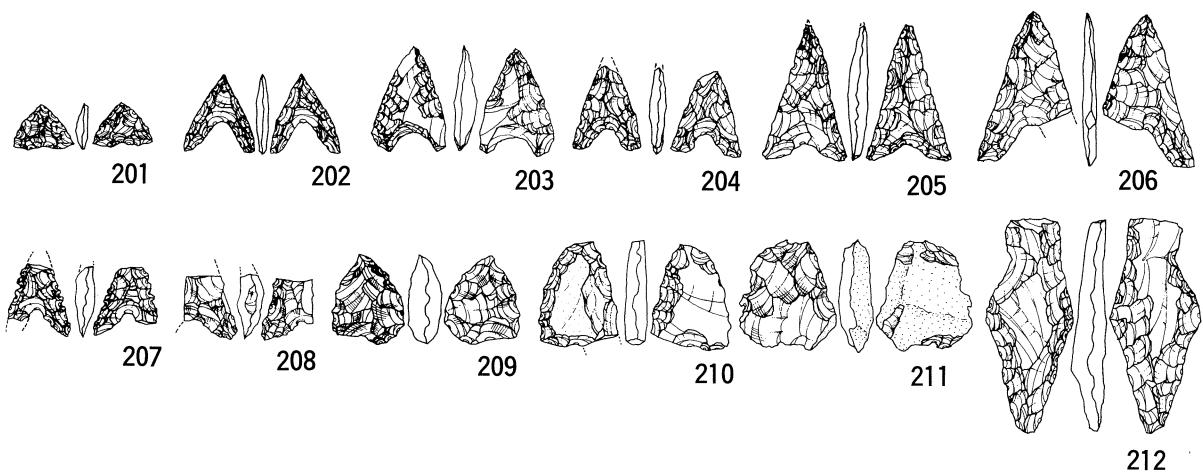
完形品は3点（201～203）のみであり、残りは欠損部をもつ。石器のうち殆どは基部に抉りを有す。209～211は未製品であり、石鏃製作の初期段階のものであると考えられる。

石匙（第28図212）

薄手の剥片の縁辺部を整形した、縦長の形態を呈するチャート製の石匙である。表面中央の剥離面は、素材剥片獲得段階のものと考えられる。

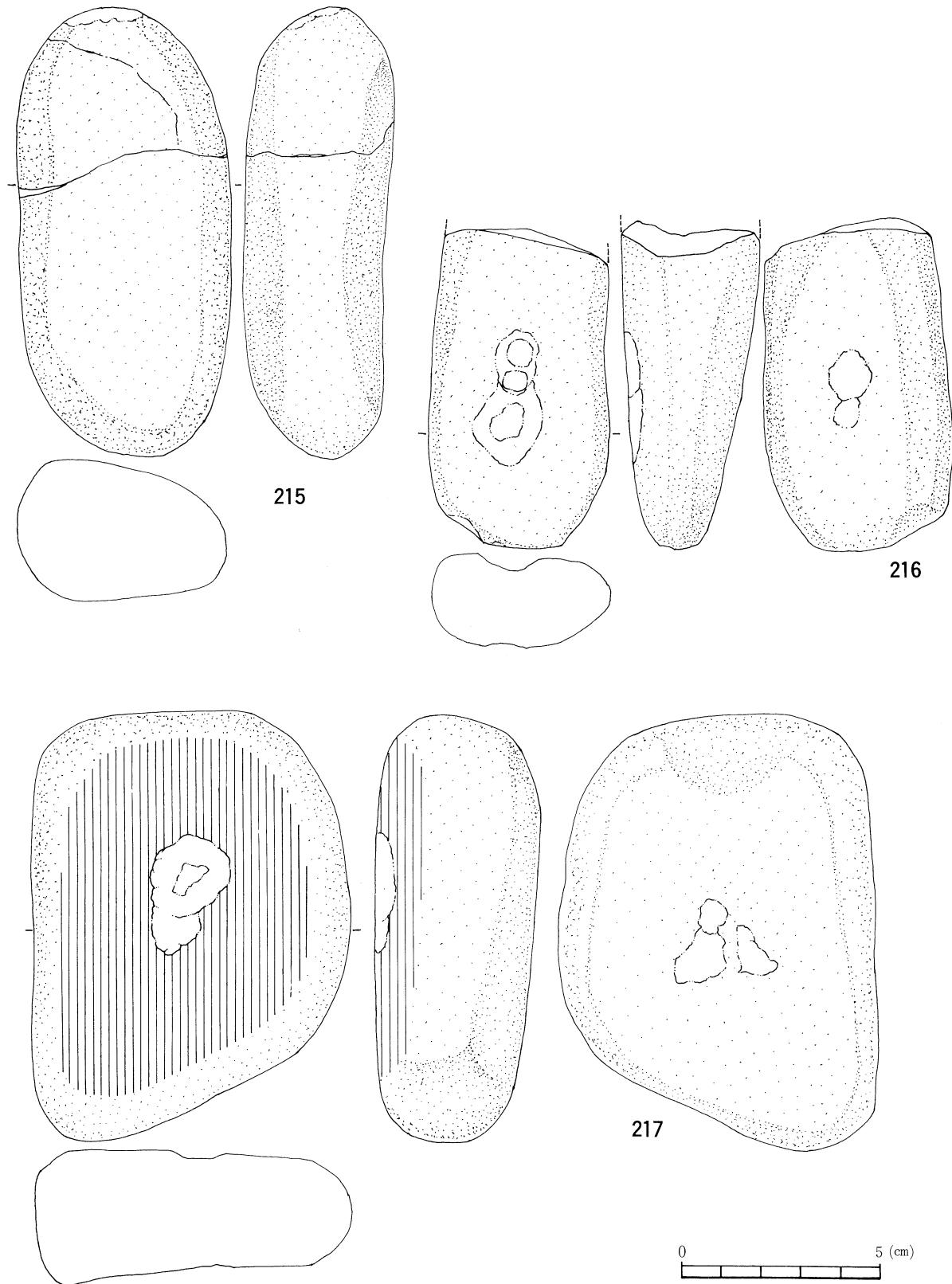
石斧（第28図213）

頁岩製の石斧である。両面から剥離を行ない整形したあと、表面を潰すことにより整形を行なっている。刃部は磨製により仕上げている。刃部の正面觀は直線上をなす。中途で折損しているため、全体の形態は不明であるが、石器上部のくびれから判断して、分銅形を有するようである。

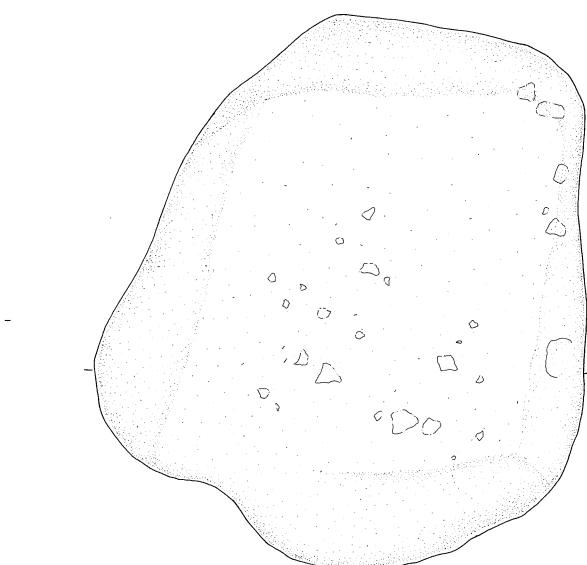
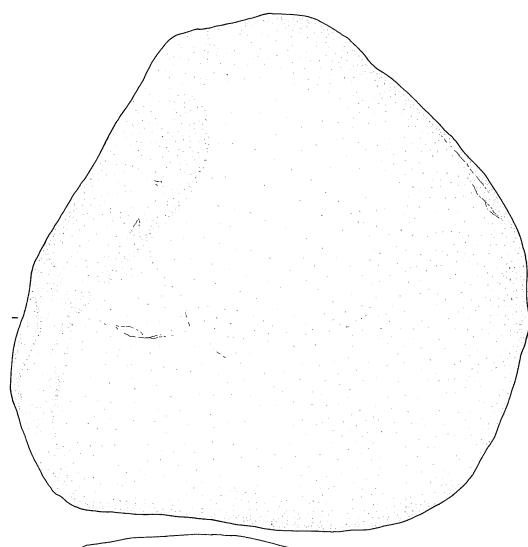


0 5 (cm)

第28図 表面採集石器実測図

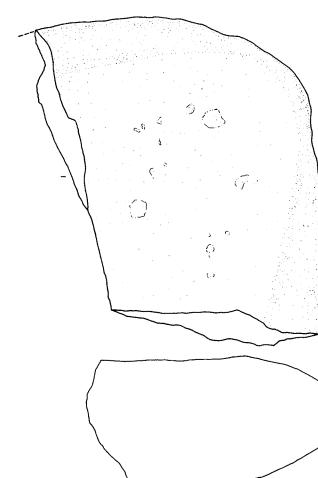
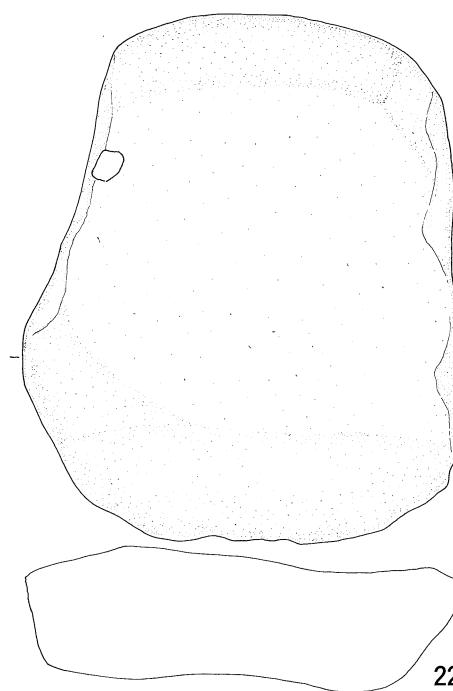


第29図 表面採集石器実測図



218

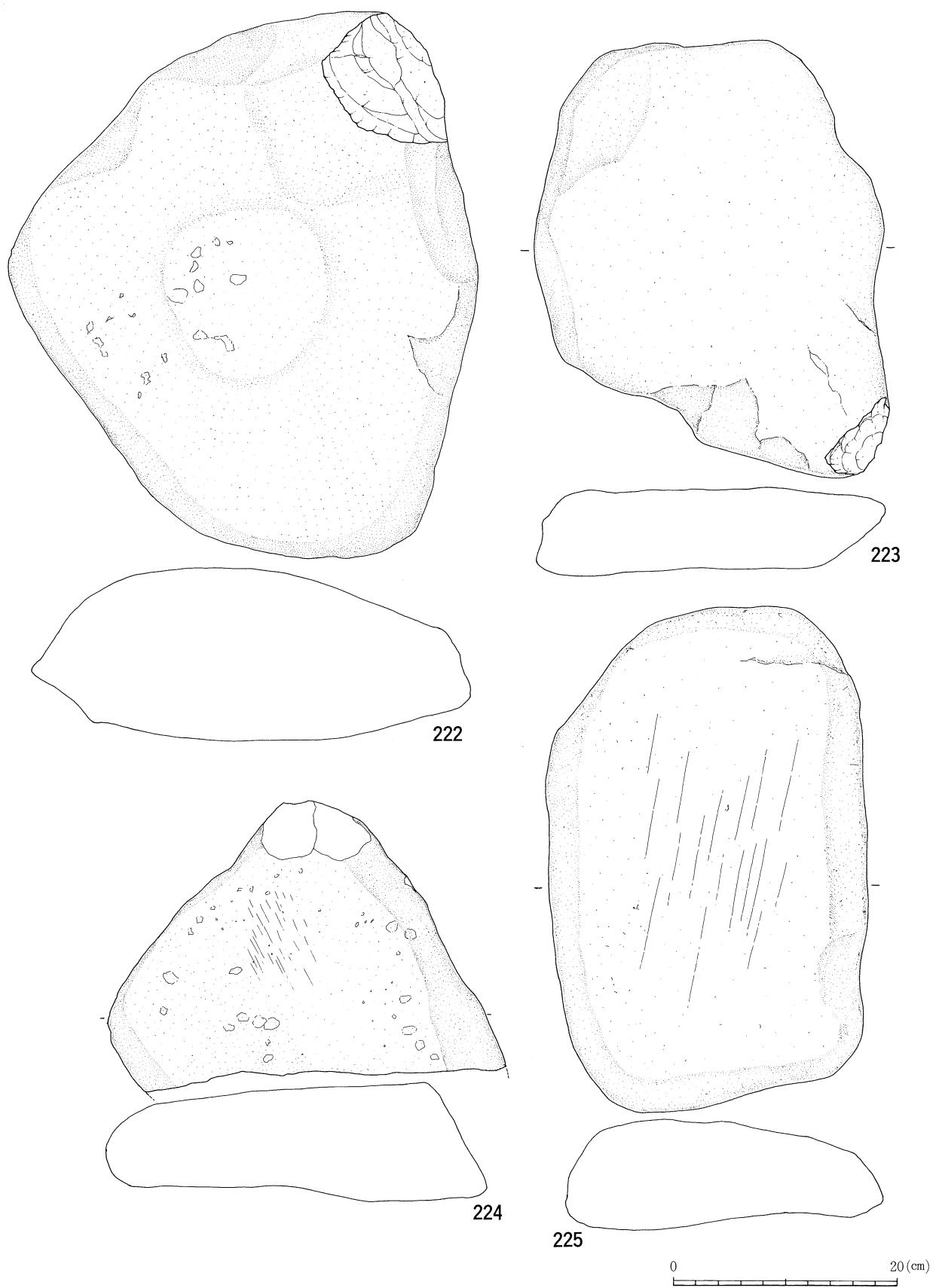
219



221

0 20 (cm)

第30図 表面採集石器実測図



第31図 B区出土石器挿入実測図

第10表 表面採集旧石器時代遺物観察表

遺物番号	出土層位	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
175		細石刃核	黒耀石	1.8	1.5	1.1	
176		細石刃核	流紋岩	1.9	2.4	2.6	
177		細石刃	流紋岩	1.5	0.7	0.3	下部欠損
178		スクレイパー	流紋岩	4.7	5.0	1.6	
179		スクレイパー	流紋岩	5.4	6.1	1.7	
180		剥片	流紋岩	6.7	4.0	2.4	
181		剥片	流紋岩	9.4	8.9	0.8	
182		剥片	凝灰岩	5.6	4.9	2.1	

第11表 表面採集土器観察表

遺物番号	出土層位	文様及び調整		焼成	色調		胎土	備考
		内面	外面		外面	内面		
183	胴部	ヨコ方向条痕のち撫糸のち ヨコナデのち連点のち沈線	ヨコナデ	ふつう	2.5Y8/4 淡黄	2.5Y8/4 淡黄	長石、角閃石、砂粒を多量	縄文早期
184	胴部	撫糸のちナデ	ヨコナデ	やや 良好	10YR7/4 黄橙	10YR7/4 黄橙	角閃石を少量、石英を少量、雲母片を多量	塞ノ神式土器
185	胴部	不定方向の粗い条痕文	ヨコミガキ	ふつう	10YR8/3 浅黄橙	2.5Y7/3 浅黄	角閃石、砂粒、石英いずれも少量	縄文早期
186	口縁部	横方向二枚貝条痕文のち凸帯貼付のち刺突	斜方向二枚貝条痕	ふつう	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	角閃石を少量、雲母片を多量、石英を多量含む	轟B式土器
187	胴部	沈線のちヨコミガキ	ヨコナデ	ふつう	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/3 にぶい橙	長石を少量、砂粒を多量、雲母片を少量	曾畠式土器
188	口縁部	ヨコナデのち沈線	斜方向条痕のちヨコナデ	ふつう	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR8/3 浅黄橙	長石を多量、砂粒、1mm以下の白色粒を少量	大平式土器
189	口縁部	横方向二枚貝条痕のちヨコナデのち沈線	横方向二枚貝条痕のちヨコナデ	やや 良好	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	長石を多量、角閃石を少量、砂粒を多量	大平式土器
190	胴部	ヨコナデのち沈線	不明	やや軟	2.5Y8/4 淡黄	2.5Y8/3 淡黄	長石を多量、角閃石を少量、1mm以下の白色粒を少量	大平式土器
191	胴部	ナデのち沈線	ヨコナデ	ふつう	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/3 にぶい橙	長石、角閃石、1mm以下の白色粒いすれも少量	大平式土器
192	口縁部	ヨコナデのち沈線	ナデ	ふつう	7.5YR8/6 浅黄橙	7.5YR7/3 にぶい橙	長石、角閃石、砂粒、雲母片、石英いずれも少量	大平式土器
193	口縁部	ヨコナデのち沈線	ヨコナデ	ふつう	2.5Y7/3 浅黄	10YR6/2 灰黄褐	長石、角閃石、石英、砂粒いすれも少量	型式不明
194	口縁部	のち沈線	ヨコナデ	ふつう	5YR7/6 橙	2.5Y7/2 灰黄	長石を多量、砂粒を少量、1mm以下の白色粒を少量	型式不明
195	口縁部	凸帯貼付のちナデ	横方向条痕のちヨコナデ	良好	10YR7/3 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	長石を少量、角閃石を少量、1mm以下の白色粒を少量	型式不明
196	胴部	横方向条痕のちヨコナデ	ヨコミガキ	やや軟	10YR8/3 浅黄橙	5YR8/1 灰白角	閃石を多量、砂粒を少量	時期不明
197	胴部	ヨコナデ	ヨコナデ	やや軟	2.5Y8/3 淡黄	2.5Y6/2 灰黄	長石を多量、砂粒を少量、1mm以下の白色粒を多量	時期不明
198	胴部	ヨコミガキ	横方向粗いナデ	やや 良好	5YR4/3 にぶい赤褐	10YR6/4 浅黄橙	長石、角閃石、砂粒を多量、1mm以下の白色粒を少量	時期不明
199	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	やや 良好	10YR7/4 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	長石を少量、角閃石を少量、砂粒を多量	中・近世土器
200	胴部	回転ヘラ削り	回転ナデ	良好	2.5Y8/3 淡黄	2.5Y8/3 淡黄	砂粒を少量	中・近世土器

第12表 表面採集縄文時代石器觀察表

遺物番号	出土層位	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
201		石鏸	黒耀石	1.0	1.2	0.3	
202		石鏸	チャート	1.0	1.4	0.3	
203		石鏸	頁岩	2.6	1.5	0.4	
204		石鏸	チャート	1.7	1.4	0.3	尖端部欠損
205		石鏸	流紋岩	2.8	1.7	0.4	尖端部欠損
206		石鏸	流紋岩	3.0	1.9	0.3	片脚部欠損
207		石鏸	流紋岩	1.4	1.3	0.4	尖端部・片脚部欠損
208		石鏸	黒耀石	1.3	1.1	0.5	左側部欠損
209		石鏸	黒耀石	1.8	1.4	0.6	未製品
210		石鏸	流紋岩	2.1	1.7	0.5	未製品
211		石鏸	黒耀石	2.2	1.9	0.6	未製品
212		石匙	チャート	4.3	1.7	0.7	
213		石斧	頁岩	11.3	9.0	2.8	上部欠損
214		用途不明石器	流紋岩	5.7	4.7	2.2	上部欠損
215		敲石	砂岩	9.4	5.6	3.8	
216		凹石	堆積岩系	8.4	4.8	3.5	下部欠損
217		凹石	堆積岩系	10.8	8.1	4.2	
218		石皿	堆積岩系	39.3	39.5	14.3	
219		石皿	堆積岩系	42.5	37.4	13.4	
220		石皿	堆積岩系	39.9	33.7	10.9	
221		石皿	堆積岩系	25.1	22.8	10.3	
222		石皿	堆積岩系	52.5	47.4	3.6	
223		石皿	堆積岩系	41.7	35.4	8.0	
224		石皿	堆積岩系	28.0	40.6	12.56	下部欠損
225		石皿	堆積岩系	51.3	32.0	11.0	

用途不明石器（第28図214）

全面に研磨を施した石器である。上部は欠損しているが、柱状に仕上げられたようであり、下端部は鈍角ではあるが刃部状に整形されている。裏面下部は敲打痕を有しており、使用痕の可能性も考えられる。おそらく石斧の一形態と思われるが、類例に乏しいため、特定の用途は断定しがたい。

敲石（第29図215）

長円形の川原石を素材とした磨石である。頭部に敲打痕が認められる。

凹石（第29図216、217）

川原石の平坦部を利用した凹石である。217は表面に磨きの痕が残される。またどちらも表裏両方に凹みがある。

石皿（第30図218～225）

220、221は、平坦面上に擦痕が残される。どれも扁平の川原石を使用している。

中近世の遺物（第27図199、200）

200は陶器片である。淡黄色を帶び、釉は付着していない。外面の屈曲部より下部は横方向に削られ、底部付近は窓により斜方向の削りが用いられている。内面は横方向のナデである。199は口縁部片である。上部にいくに従い強く外反しており、また胴部に若干の膨らみをもたせる。器壁は全体的に薄めであるが、その傾向は頸部が最も強く、口縁端部は肥厚している。胎土には砂粒が混入されている。

第3章 まとめ

当遺跡の変遷を振り返るにあたって、時代別に検証し考察を加えたい。

旧石器時代

旧石器時代の遺物は、ナイフ形石器・スクレイパー・側面調整剥片・二次加工剥片・剥片・石核が出土した。これらの資料は全体で50点に満たず、定型石器に乏しい。出土層位は第IX層の旧石器時代相当層と、第III層の攪乱層からである。ナイフ形石器はその形態からナイフ形石器文化期のなかでもAT降灰以降のものと考えられ、一方側面調整剥片は旧石器時代終末期のものである。それ以外の遺物もおおよそこの間の時期に該当すると考えられるが、時間的な幅の広さは否定できない。良質な遺物としてはほかに接合資料も出土している。特に31は作業面を転移する剥離工程が明確に復元されている。時期的な断定はしがたいものの、旧石器時代の資料が不足している県南部において、貴重な資料となることは言うまでもない。当時代の石材は、黒耀石製の石核とチャート製の碎片が僅かに出土しているほかは、流紋岩と在地の火山岩系の石材で占められるが、器種構成では流紋岩製の石器は製品が大部分であるのに対し、在地の石材は明確な石製品に乏しく、石材による器種選択を考察するうえで興味深い。なお、同時期に伴う遺構は検出されなかった。

縄文時代

(土器)

七野第4遺跡では、A地区より僅かながら縄文草創期と考えられる土器が出土した。草創期土器の出土は町内では砂田遺跡、井手ノ尾遺跡に次いで3例目となる。出土層位は第XI層であり、旧石器時代相当の石器と共に出土している。これらの土器のうち、有文のものは、外面に粘土紐を不規則に貼りつけたのち、隆帶上とその直下に爪形状の刺突を行なうものである。また小破片であるため明確ではないが、口縁部に山形の突出があり、鋸歯状の口縁を呈する可能性も有している。県内の草創期土器のうち、隆帶文系に属するものは清武町の堂地西遺跡、同椎屋形第1遺跡など各地に類例があるが、これらの資料の爪形文は隆帶上に刻み目という形で用いられており、隆帶は口縁に平行するという規則性も有している。さらに口縁部の突出という点においては、報告例が増加している南九州全体でも皆無であり、今後の類例となる資料の増加に期待するところである。この外にも、器面に鋭利な工具による描線の描かれた胴部片や、平底になると思われる底部片も出土している。

早期の土器は、第III層と第V層で少量出土するに過ぎない。型式名は、早期後半の椿ノ原式土器にあたるものが大部分を占める。他に、外面に櫛描状の沈線を施した土器も1点ながら出土している。

前期の土器は、第IV層より野口式土器が良好な状態で出土し、同じ層から水ノ江和同氏のいう轟C・D式土器にあたる外面に刺突文を施した土器や、曾畠式土器の破片も出土した。また轟B式土器も出土している。

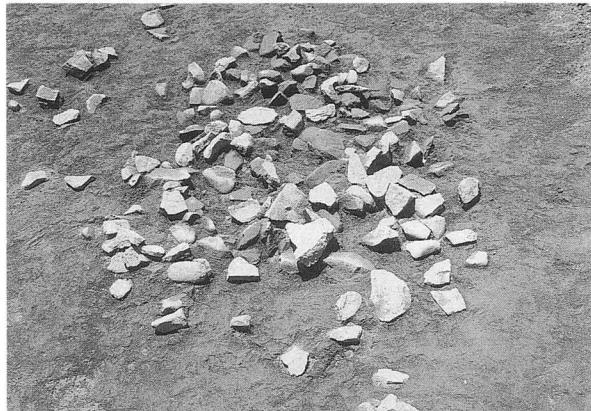
中期の土器は、当遺跡の出土土器のなかで最も頻度の高いものとなった。有文のものの大部分が大平式土器にあたる。南九州一帯で出土している土器型式であるが、これまで多量に確認された遺跡は鹿児島湾岸や志布志湾岸など南部に偏っており、ここ田野町での出土は現時点では珍しい例といえる。この型式について帰属する時期についてさまざまな論考があるが、最近の傾向では中期中葉～後葉にかけての土器型式であるという見方が強いようである。大平式土器は、図版でも示したとおり、施文工具により沈線文系、2類細線文系に分類が可能である。このうち凹線文系の土器については出土遺

跡が僅かであり検討は差し控えるが、残り2系統の土器の関係については他の良好な状態の出土遺跡からも層位的な差が認められていないほか、地域的な偏差についても看取しえず、今後の発掘による資料の増加に期待したい。また、この型式は横位の施文を基本とするが、沈線文系に分類されるものの中には複雑なモチーフを割り付けに捉われずさまざまな方向に施した一群や、斜位の直線文により構成された一群があり、これらの土器は細分が可能である。中期の土器はほかに、刻目凸帯文を有す口縁部片や沈線文の施された胴部片、無文の胴部片などの資料も出土している。但し型式名については定かでない。

遺構は集石遺構が4基検出された。層位はV層下部、時期的には縄文時代早期に比定される。このうちS I-1、S I-2は典型例であり、地下に掘込みを持たないものに分類されるが、S I-3、S I-4は集石遺構としてのまとまりに欠けるため、一般に使用されるような集石遺構の範疇には認定しがたい。また、いずれの遺構にも土器その他集石遺構に関連づけられる出土資料は皆無であった。一方、土坑は29基検出されている。遺構縄文早期に相当する。土坑からは全体で剥片、胴部片、礫が1点ずつ出土したに留まり、炭化物などの資料も出土をみない。また深さやプラン、全体的な配置などが一様ではなく、特定の用途を推察し得る材料に乏しい。



調査区遠景（南から）



S I - 0 1 検出状況



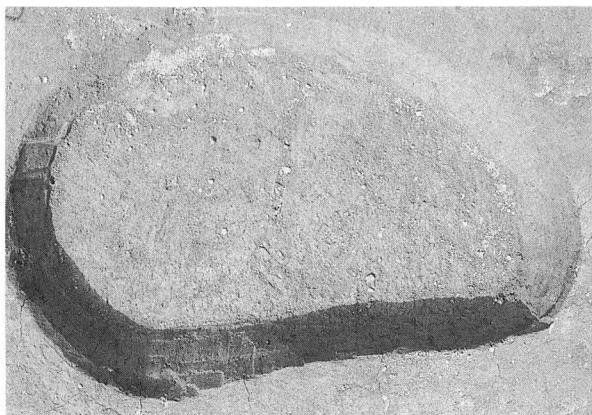
S I - 0 2 検出状況



S I - 0 3 検出状況



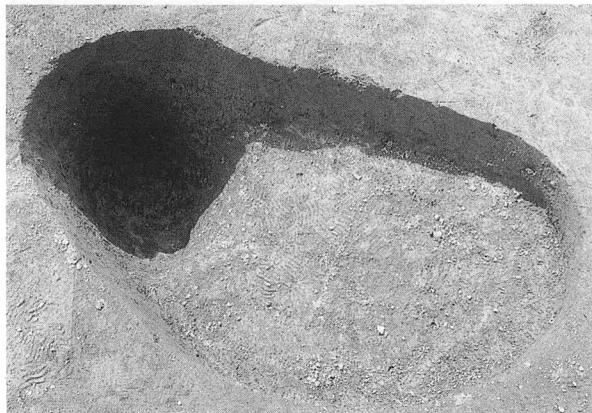
S I - 0 4 検出状況



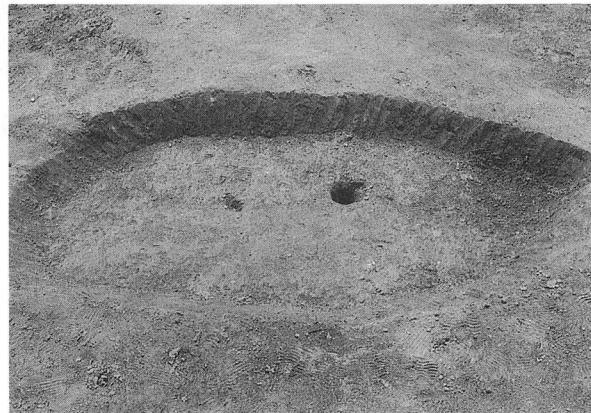
S C - 0 1 検出状況



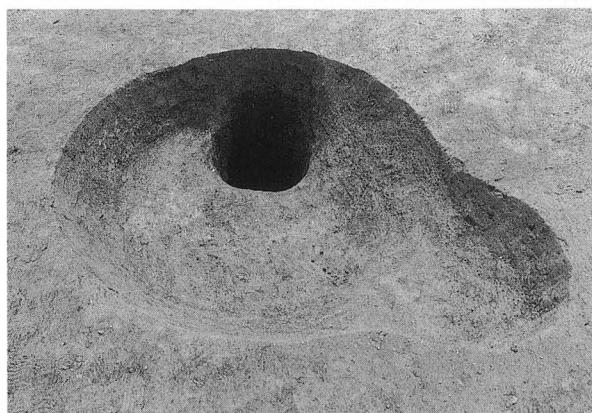
S C - 0 2 検出状況



S C - 0 3 検出状況



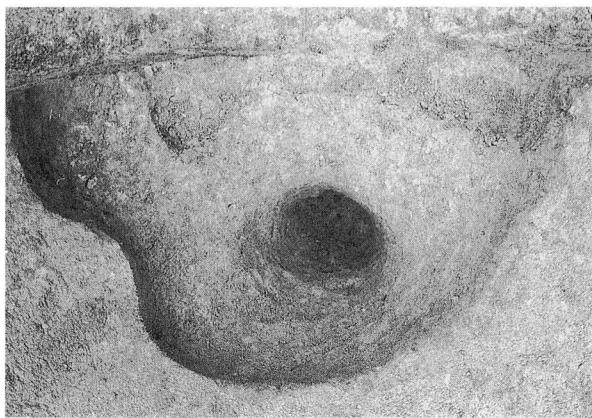
S C - 0 4 検出状況



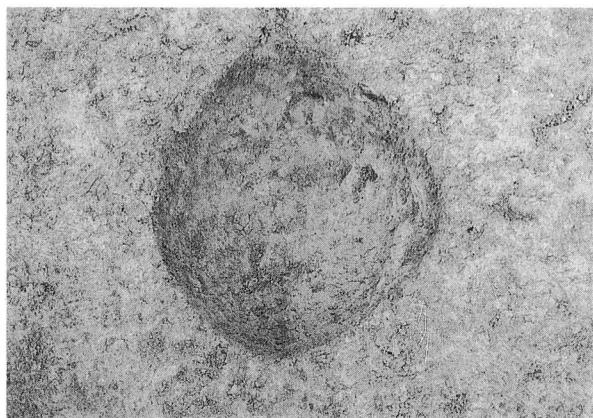
S C - 0 5 検出状況



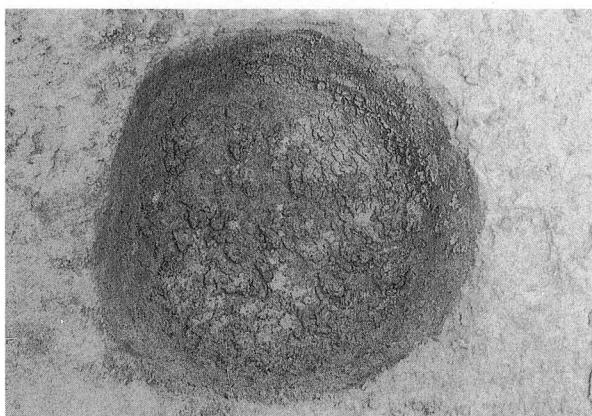
S C - 0 6 検出状況



S C - 0 7 検出状況



S C - 0 8 検出状況



S C - 0 9 検出状況



S C - 1 0 検出状況



S C - 1 1 検出状況



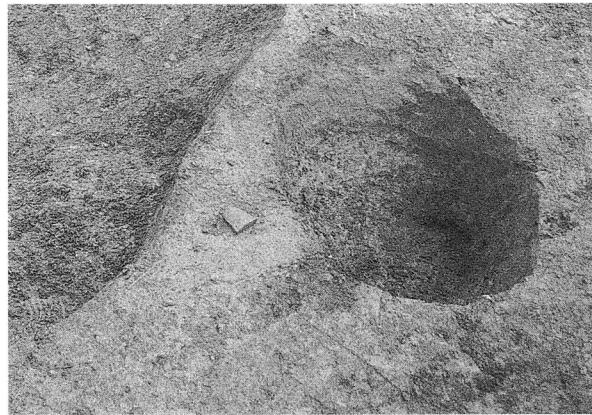
S C - 1 2 検況出状況



S C - 1 3 検出状況



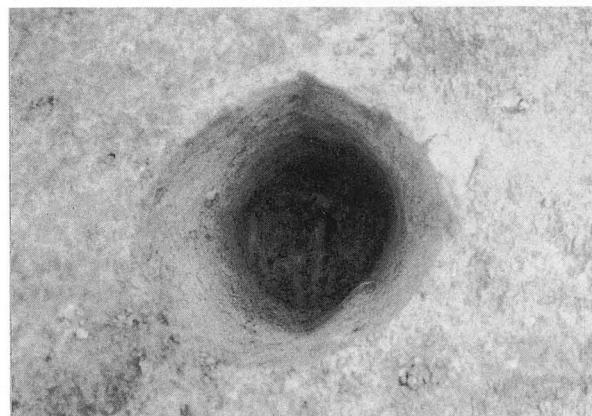
S C - 1 4 検出状況



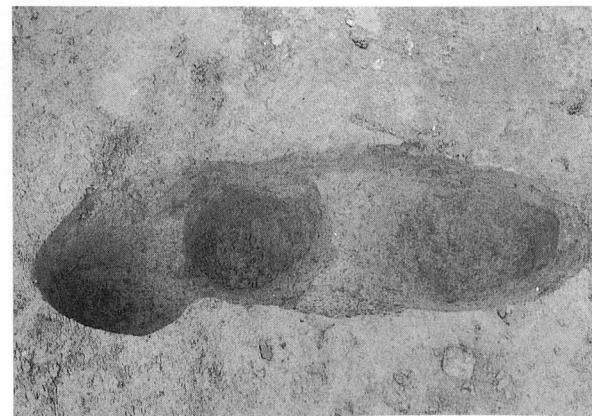
S C - 1 5 検出状況



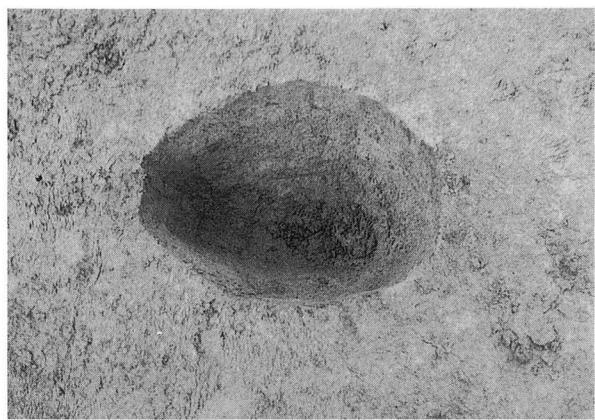
S C - 1 6 検出状況



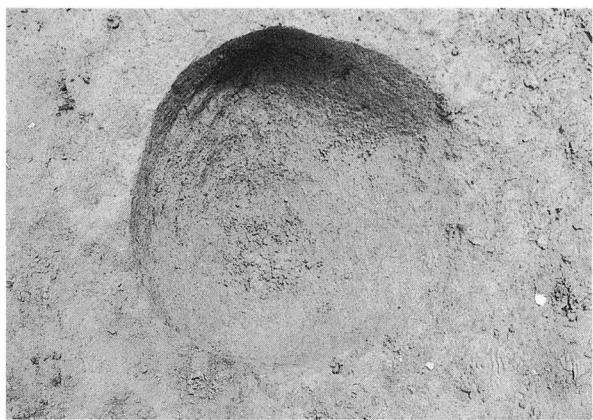
S C - 1 7 検出状況



S C - 1 8 検出状況



S C - 1 9 検出状況



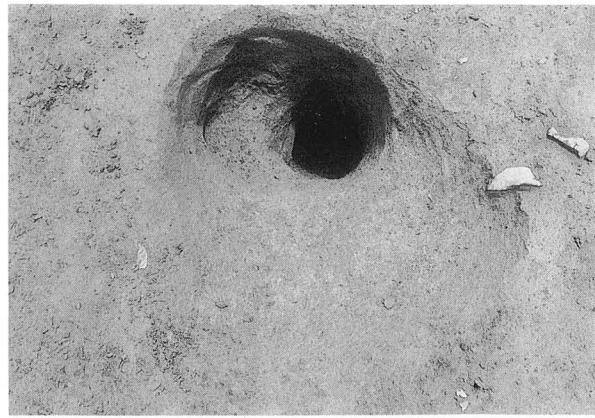
S C - 2 0 検出状況



S C - 2 1 検出状況



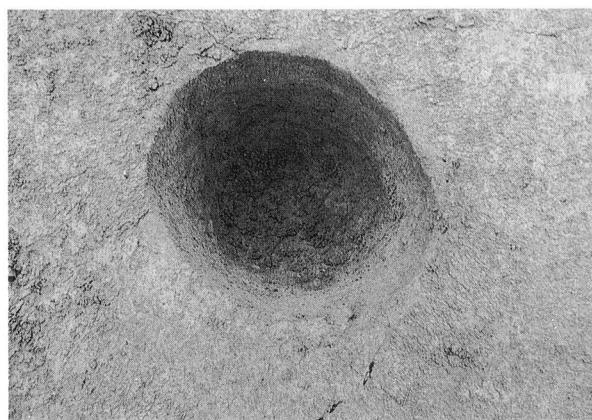
S C - 2 2 検出状況



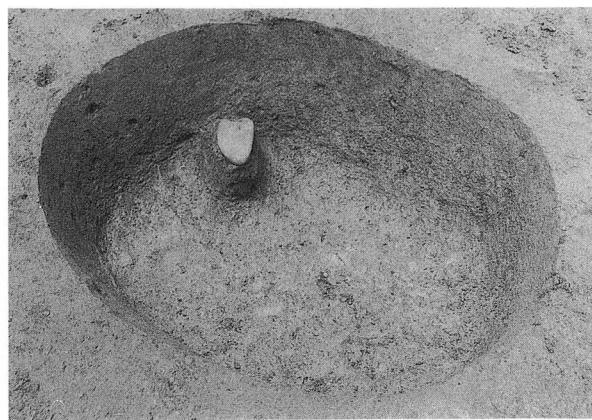
S C - 2 3 検出状況



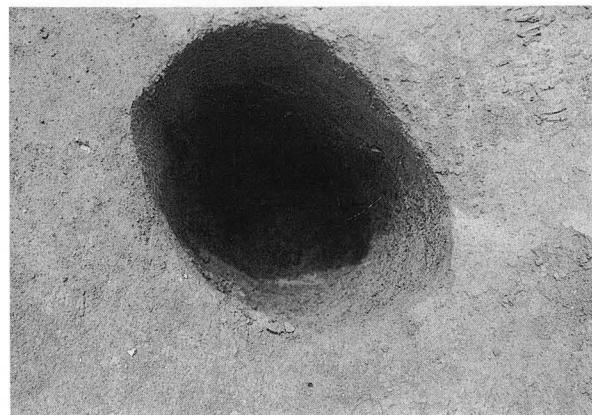
S C - 2 4 検出状況



SC-25 検出状況



SC-26 検出状況



SC-27 検出状況



SC-28 検出状況



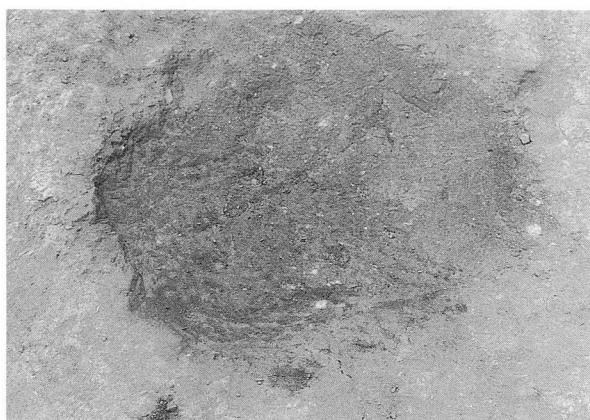
SC-29 検出状況



SC-30 検出状況



S C - 3 1 検出状況



S C - 3 2 検出状況



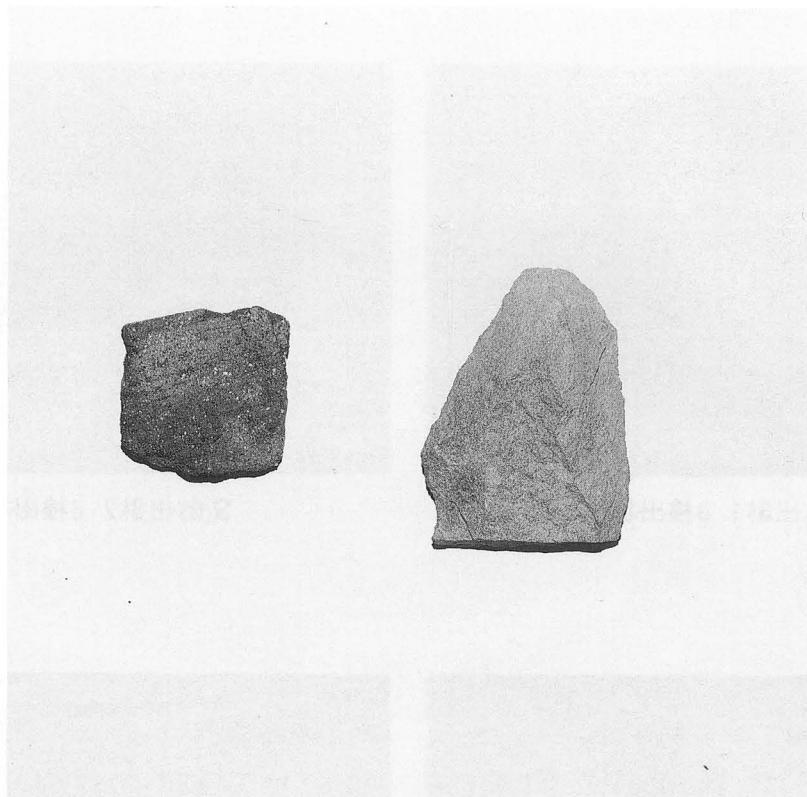
集石遺構 検出状況



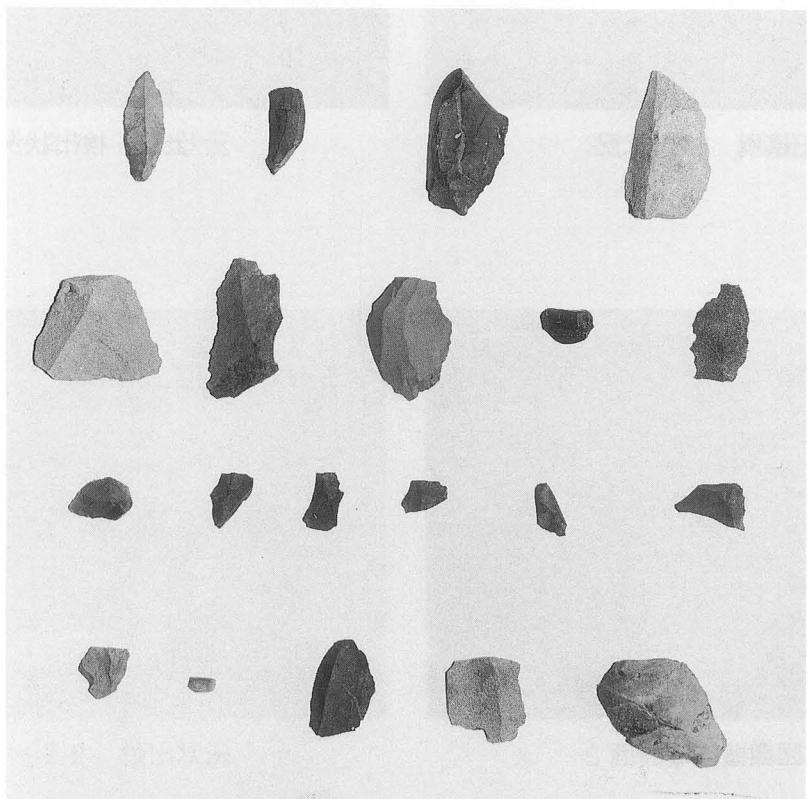
土壤 検出状況



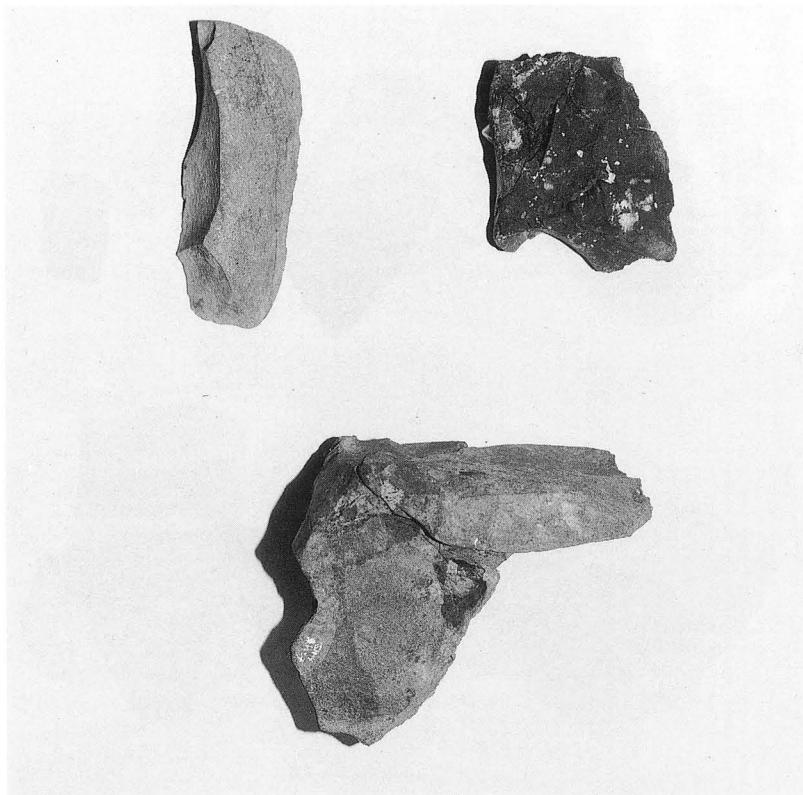
B 区西壁土堀断面



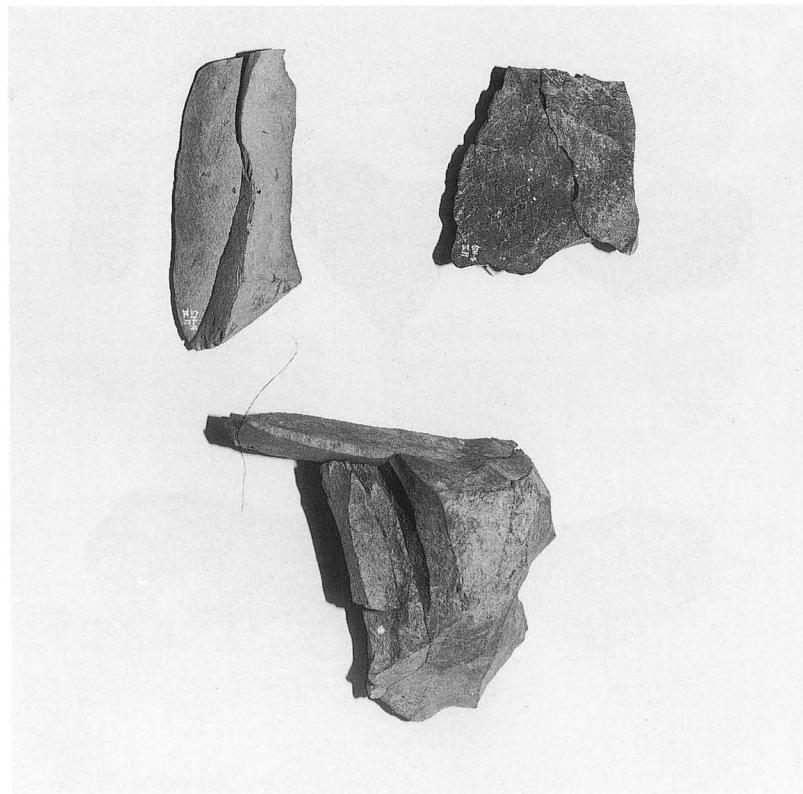
S I - 30 出土遺物



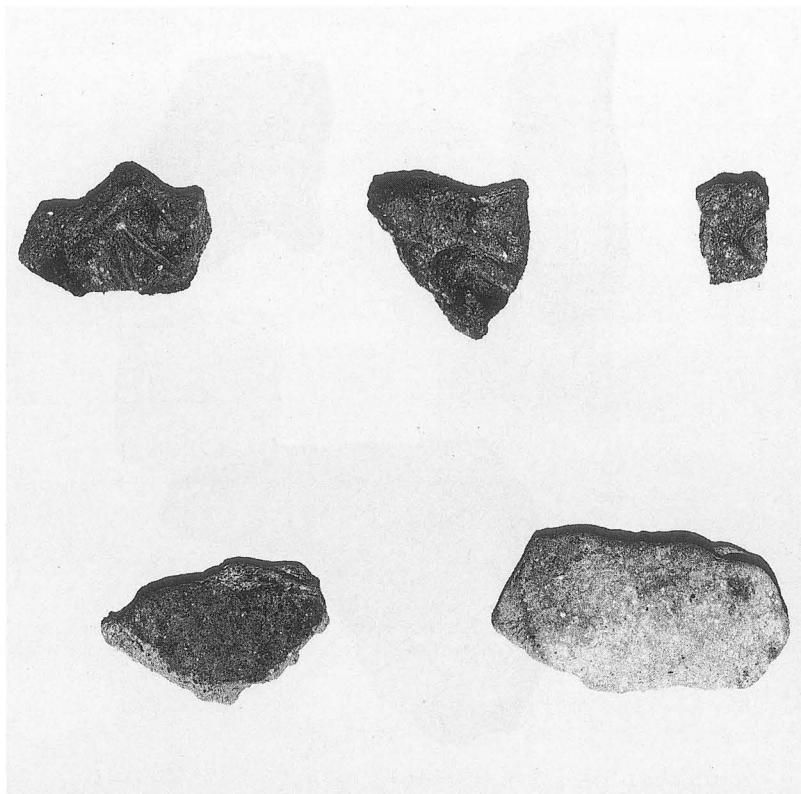
A区 出土石器



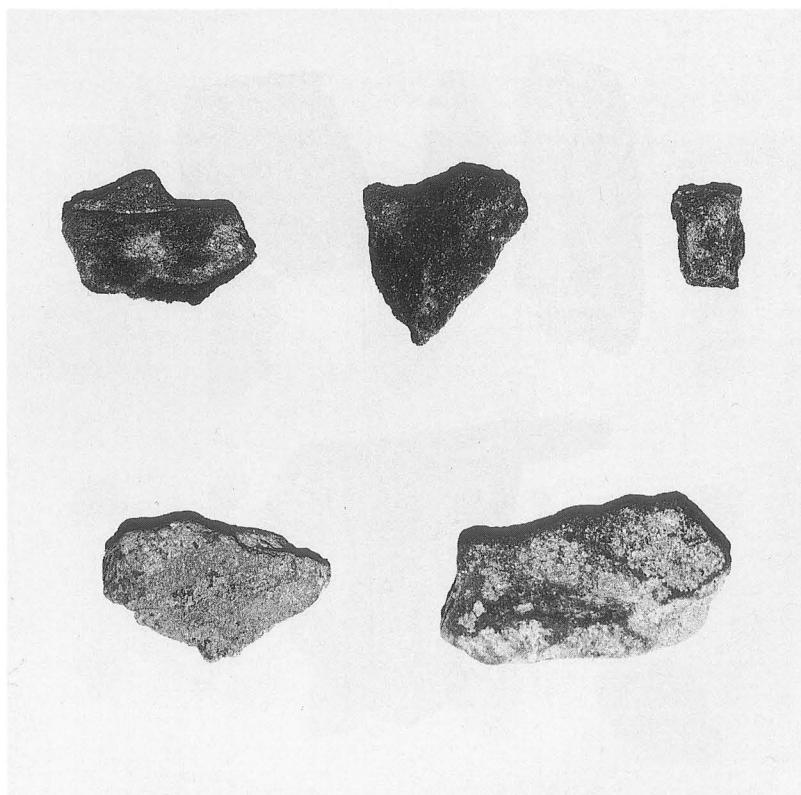
A区 出土接合資料



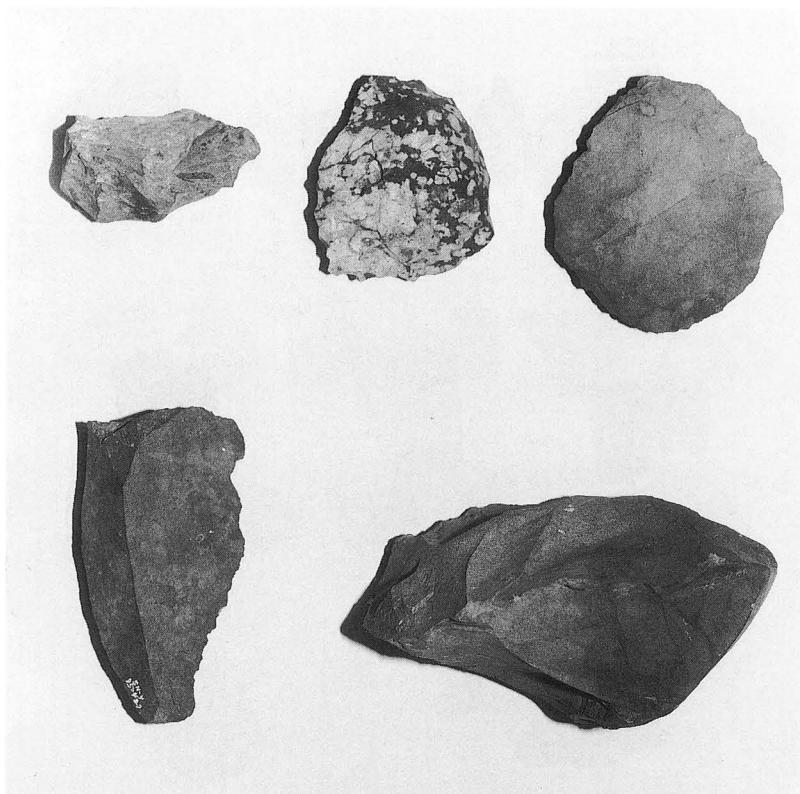
A区 出土接合資料



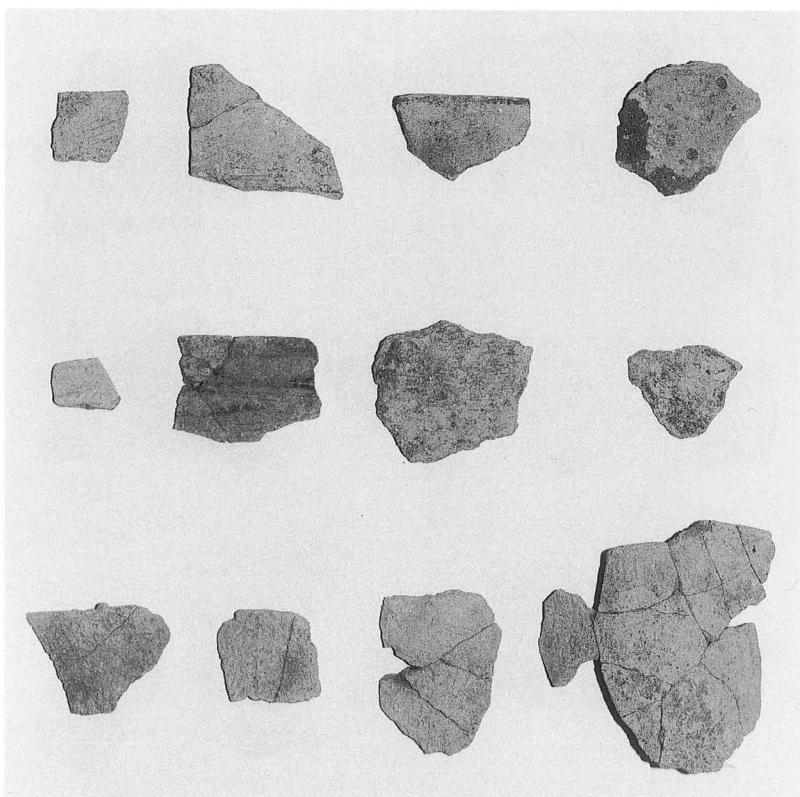
A区 出土土器（外面）



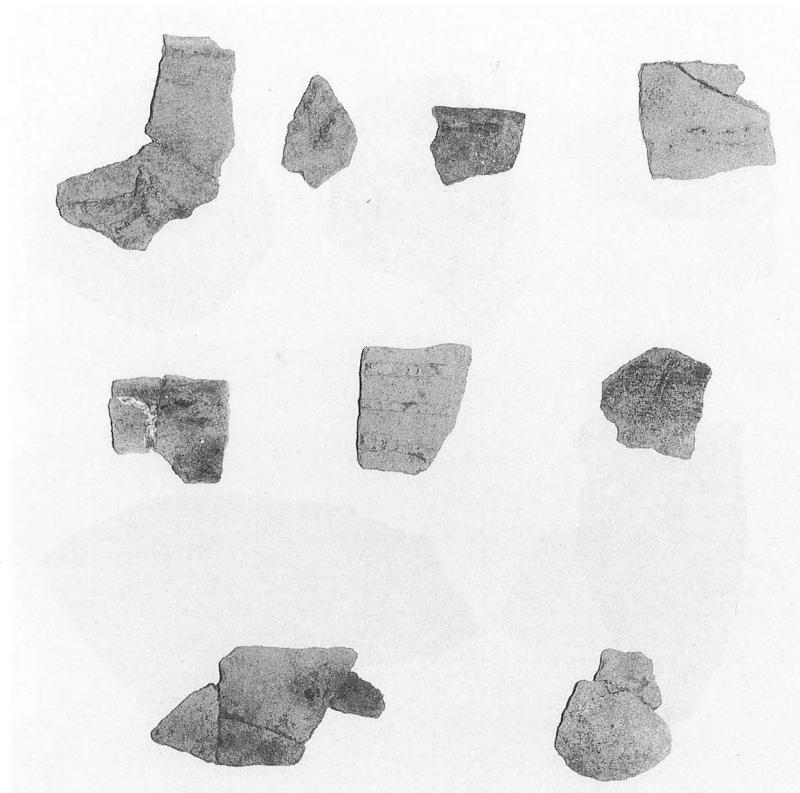
A区 出土土器（里面）



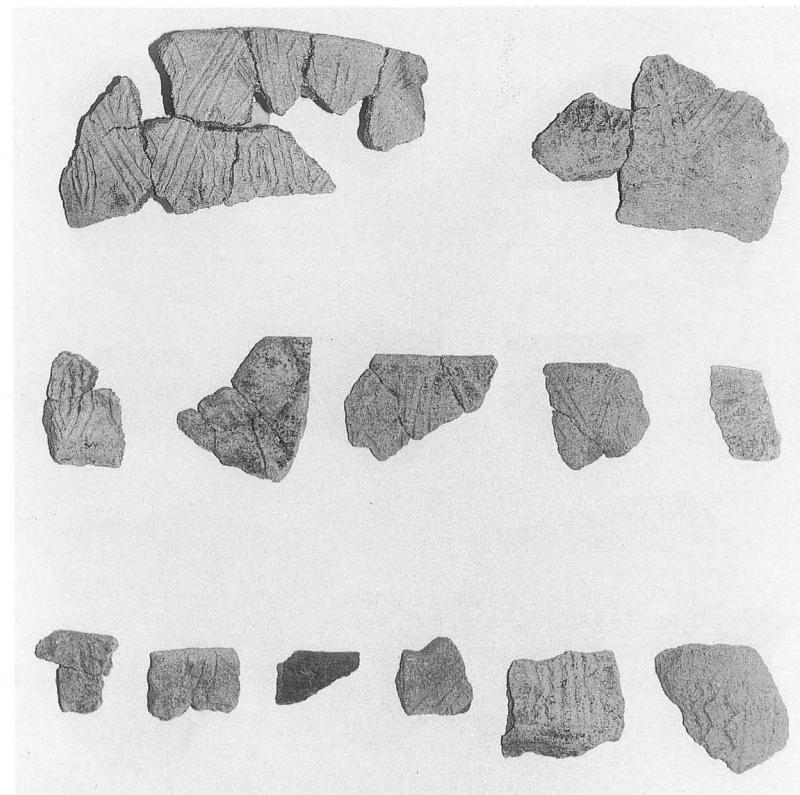
B区 出土旧石器時代石器



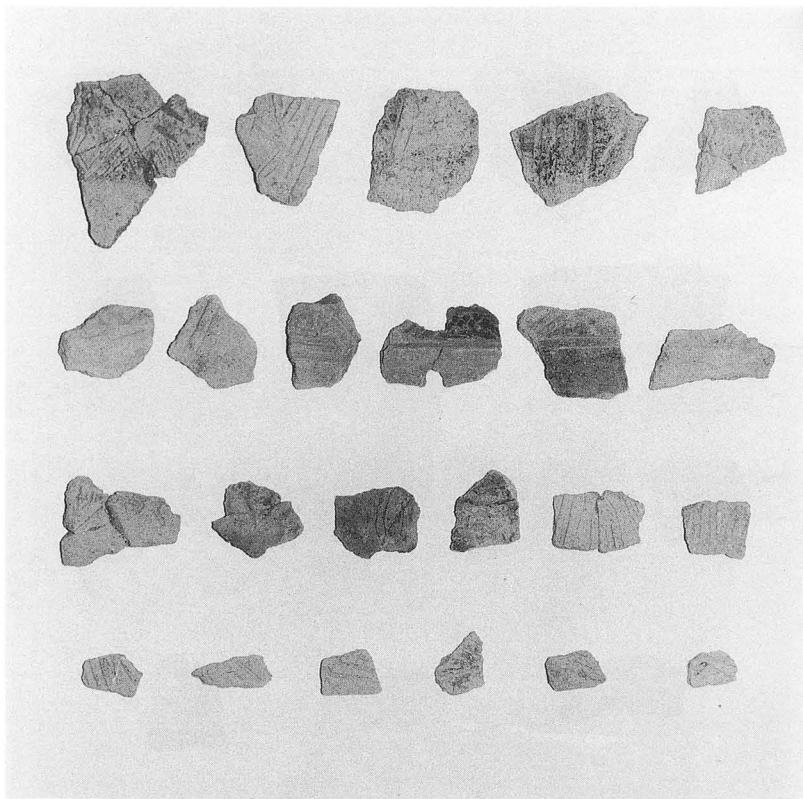
B区 出土土器



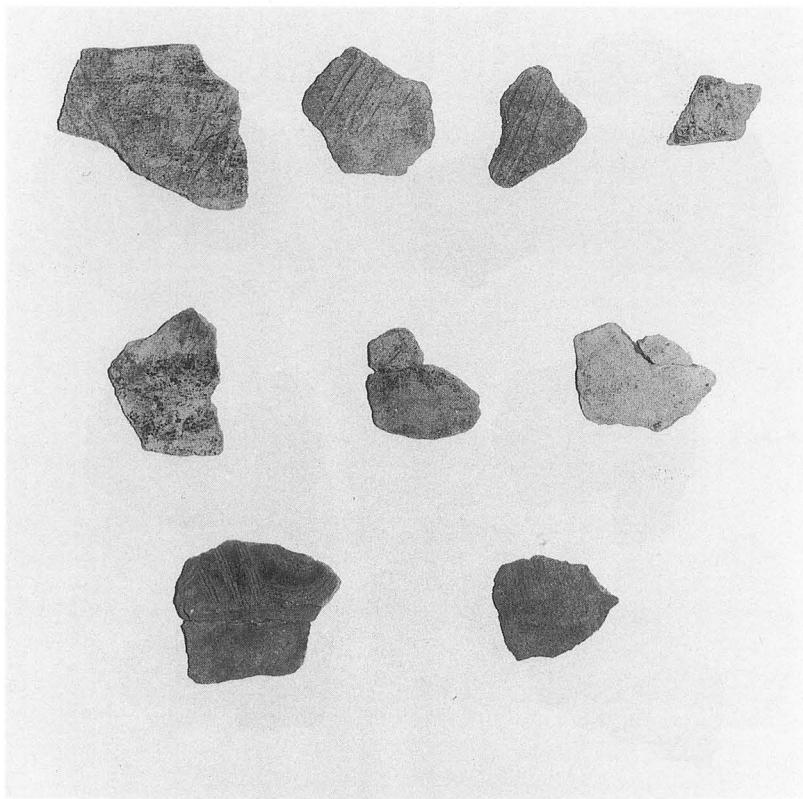
B区 出土土器



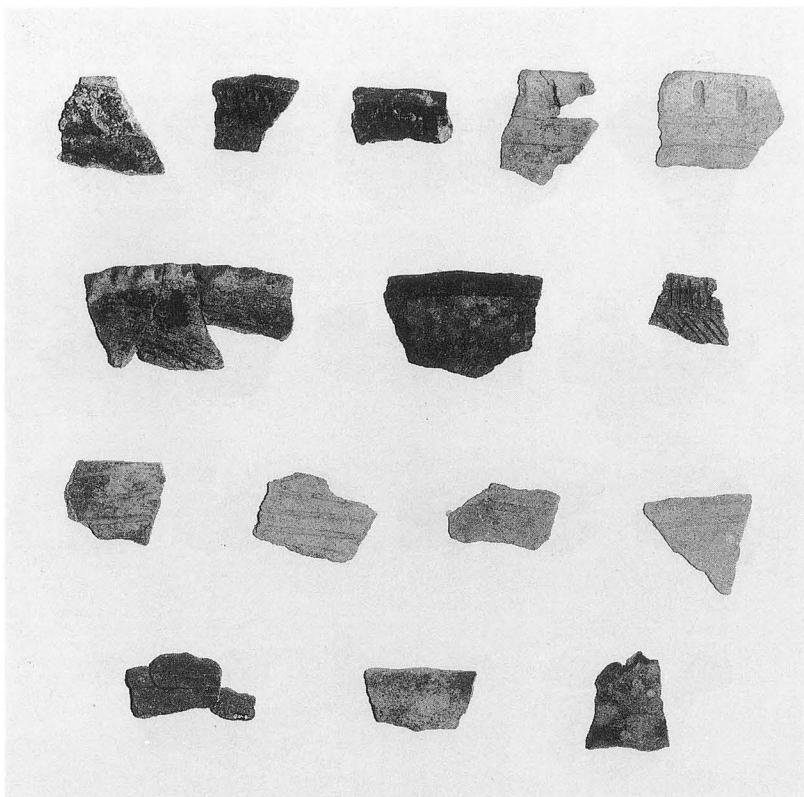
B区 出土土器



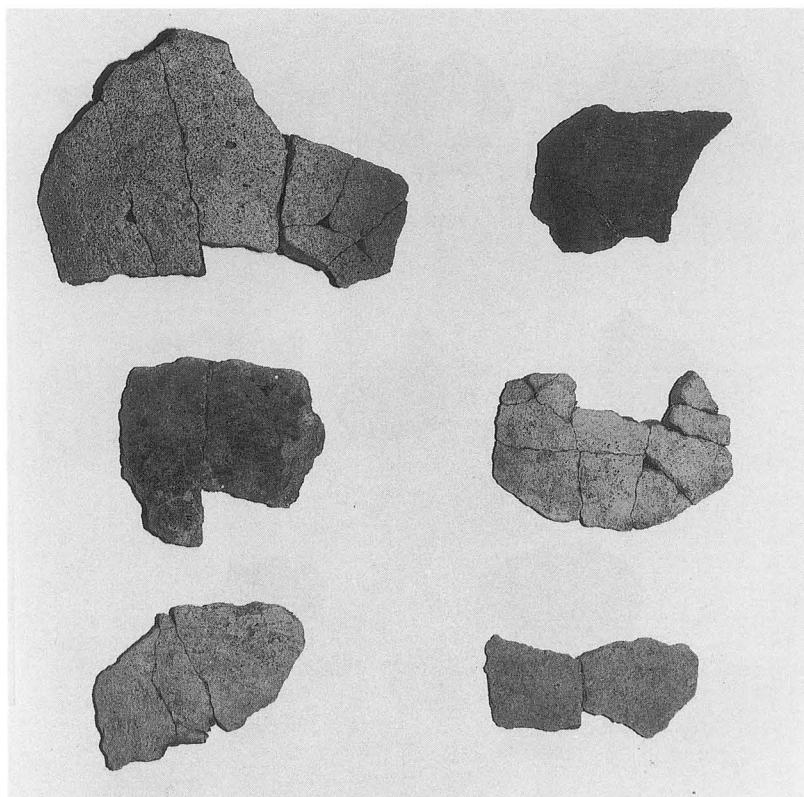
B区 出土土器



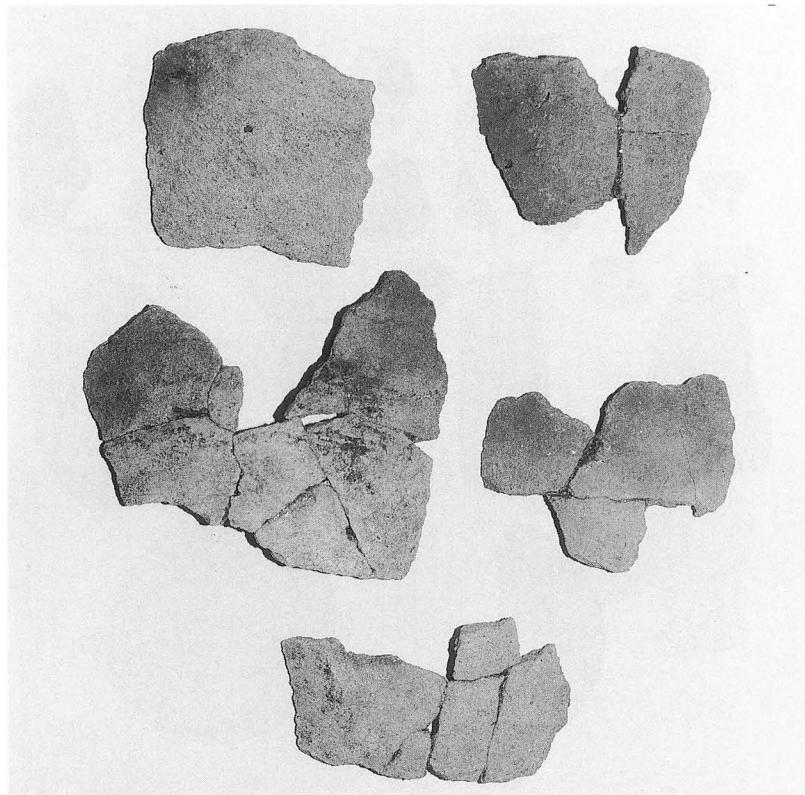
B区 出土土器



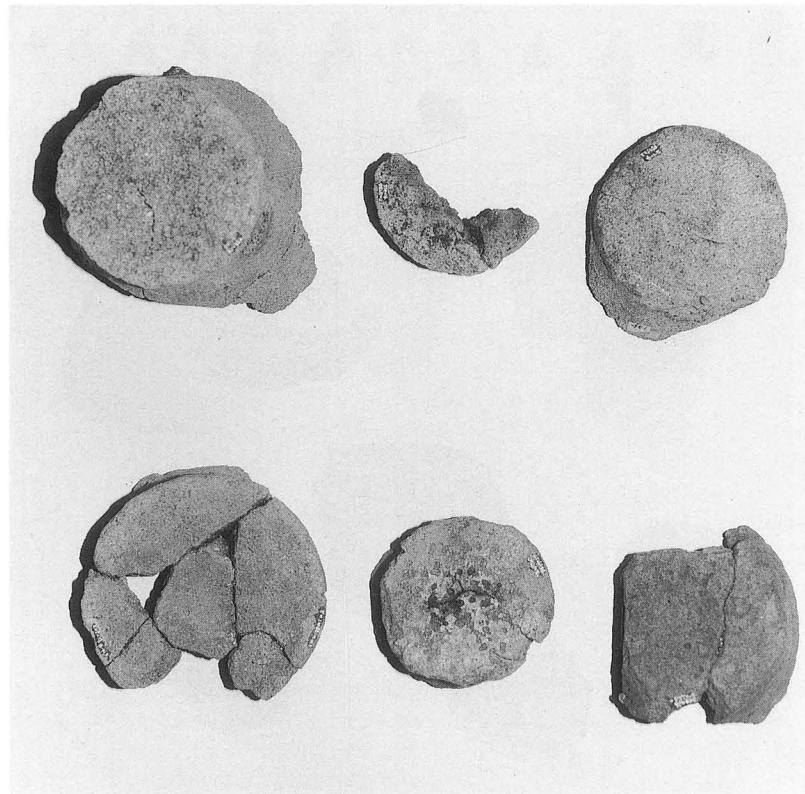
B区 出土土器



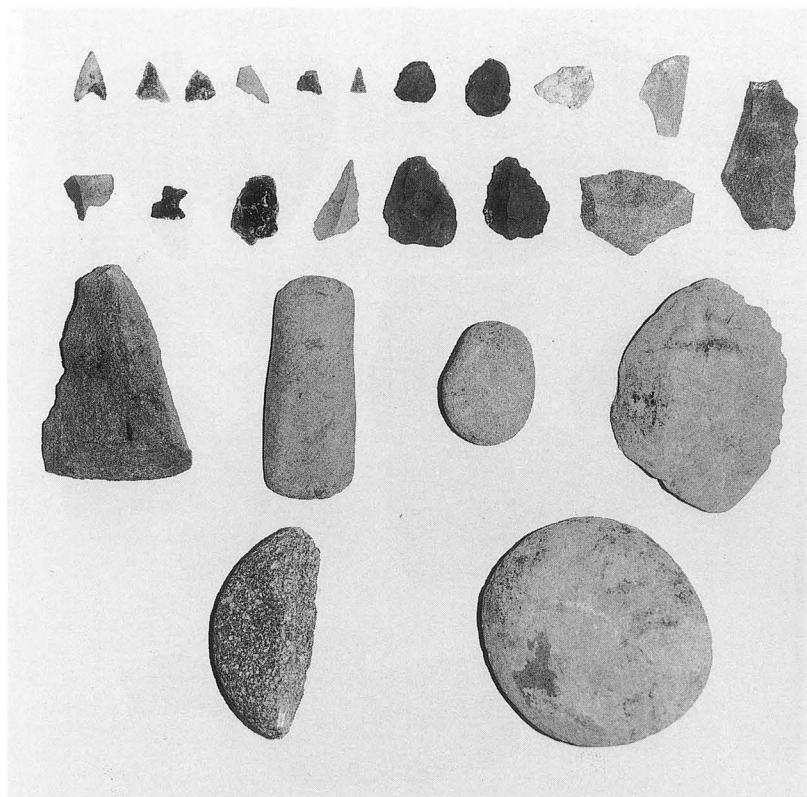
B区 出土土器



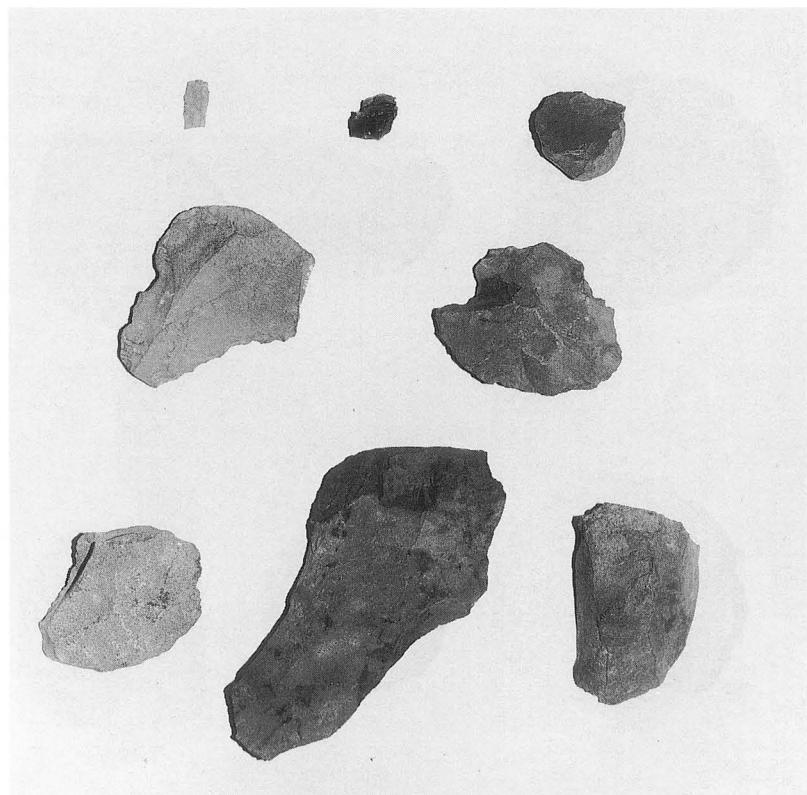
B区 出土土器



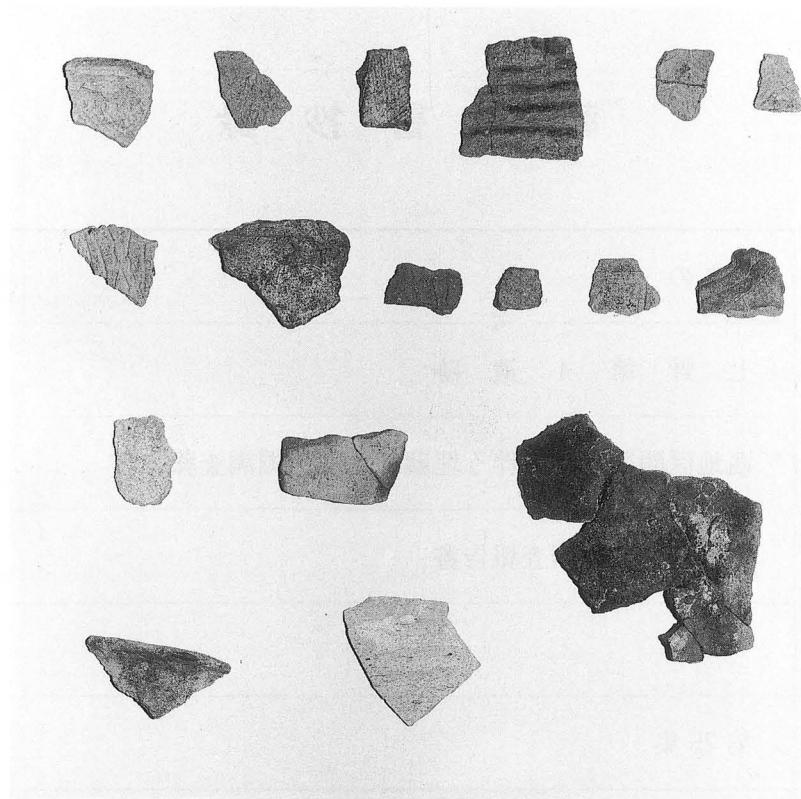
B区 出土土器



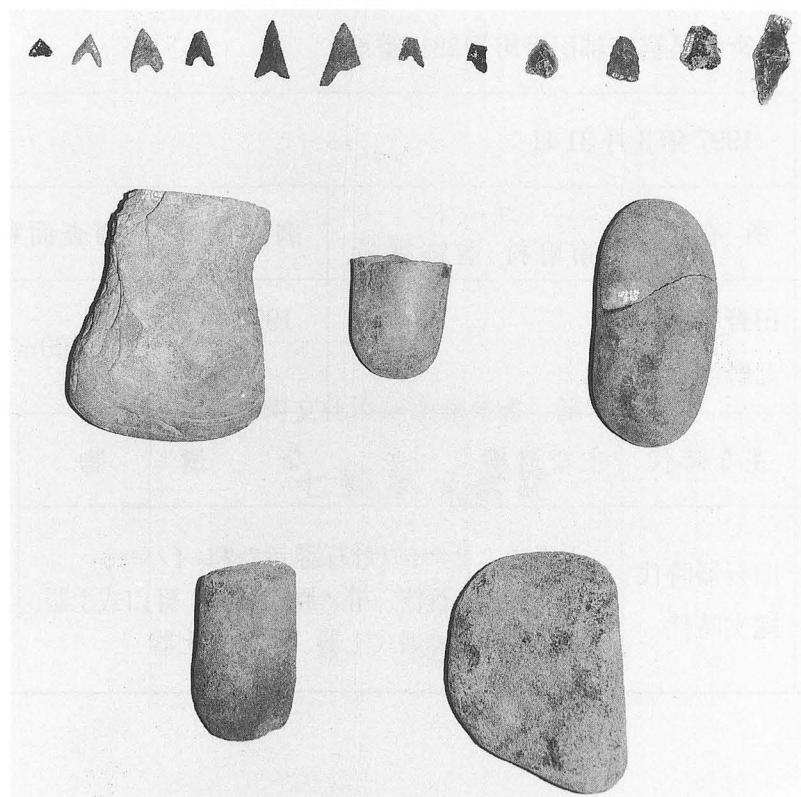
B区 出土縄文時代石器



表面採集旧石器時代石器



表面採集土器



表面採集繩文時代石器

報 告 書 抄 錄

ふりがな	しちの				
書名	七野第4遺跡				
副書名	西地区開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書				
卷次	田野町文化財調査報告書				
シリーズ名					
シリーズ番号	第25集				
編著者名	田野町教育委員会 金丸武司				
編集機関	田野町教育委員会				
所在地	宮崎県宮崎郡田野町甲2818番地				
発行年月日	1997年3月31日				
所収遺跡名	所在地	コード 市町村:遺跡番号	調査期間	調査面積	調査原因
七野第4遺跡	田野町甲 七野字七野		1996.4/26 ~6/14	1,000m ²	
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
散布地	旧石器時代 縄文時代	集石遺構 土杭	ナイフ形石器、スクレイパー、 石核、杵ノ原式土器、野口式土器、 曾畠式土器、大平式土器	中、近世土器 も僅かに出土 する。	

田野町文化財調査報告書 第25集

七野第4遺跡

発行年月日 1997年3月

編集・発行 田野町教育委員会

印 刷 印刷センタークロダ